114

龍源寺跡

社会資本整備総合交付金（道路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（国）256号 飯田市 上久堅拡幅（1）

長野県飯田建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

飯田市

RYUGENJIATO

龍 源 寺 跡

社会資本整備総合交付金（道路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
（国）256号 飯田市 上久堅拡幅（1）

２０１７.３

長野県飯田建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

飯田市

RYUGENJIATO

龍 源 寺 跡

社会資本整備総合交付金（道路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
（国）256号 飯田市 上久堅拡幅（1）

２０１７．３

長野県飯田建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

龍源寺跡　遠景

中世　礎石建物跡　全景

はじめに

飯田市街地から南東におよそ８㎞、山あいの上久堅地区は、室町時代には知久氏が神之峰城を構え、江戸時代になると秋葉参りや塩の運搬に人びとが行き交う道が通じるなど、歴史と文化の色濃いところです。昭和に入り、近世秋葉支道にほぼ沿うルートに三遠南信自動車道（飯喬道路）が計画され、現在、当地区上平で飯田東インター（仮称）の建設が進んでいます。

平成20年（2008年）、長野県飯田建設事務所は飯田東インター（仮称）へのアクセスや生活道路としての利便性を考え、国道256号の拡幅事業を開始しました。長野県埋蔵文化財センターは、長野県教育委員会の指導のもと、工事に先立って「龍源寺」の小字名が残る付近一帯の発掘調査を実施しました。その結果、15世紀中頃（応仁の乱前後の時期）に斜面を平場に造成して建てた礎石建物の痕跡そのほか、関連する遺構のいくつかを確認することができました。

残念ながら、この建物を「龍源寺」とする確証は得られませんでしたが、上久堅地区の中世史に新たな１ページを書き加えることになりました。これもひとえに、長野県飯田建設事務所、飯田市、飯田市教育委員会、上久堅地区の皆さま、そのほか関係各位の深いご理解とご協力の賜物と存じます。心から敬意と感謝を表す次第です。

長野県埋蔵文化財センターでは、三遠南信自動車道（飯喬道路）の建設に伴って神之峯城跡、風張遺跡及び鬼釜遺跡の発掘を行い、すでに発掘調査報告書を刊行しております。それらが本書とともに地域史構築と今後の地域づくりの一助となれば望外の喜びとするところです。

例　言

1　本書は、長野県飯田市上久堅地区に所在する龍源寺跡の発掘調報告書である。

2　発掘調査は国道252号上久堅拡幅に伴う記録保存調査として、長野県飯田建設事務所から委託を受けた一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託契約等については第１章を参照願いたい。

3　調査の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』32で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

4　本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（「時又」1:50,000、「時又」「上久堅」1:25,000）・地勢図（「飯田」「甲府」「豊橋」「静岡」1:200,000）、飯田建設事務所作成計画平面図（1:1,000）である。なお、第２図は飯田市所管の1:2,500都市計画基本図を使用して作成したものである。承認番号：28飯地計第375号

5　本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は世界測地系を用いている。

6　発掘調査に当たっては、以下の機関・諸氏に業務委託もしくは協力を得た。（敬称略）
測量・空中写真撮影：（株）みすず綜合コンサルタント
金属製品Ｘ線写真撮影・応急保存処理・石製品赤外線写真撮影：長野県立歴史館
中世寺院指導：立正大学文学部教授　時枝　務
石器・石製品の石材指導：信州大学理学部教授　原山　智

7　遺物図版に用いた写真は、長野県埋蔵文化財センター写真室で職員が撮影した。

8　発掘調査および報告書刊行にあたり、以下の方がた・機関にご指導、ご協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表する。（敬称略）
飯村　均　市澤英利　小田部家秀　伊坪達郎　岡田正彦　小池茂彦　小林正春　坂詰秀一　笹本正治
下平博行　竹原　学　中澤克昭　羽生俊郎　馬場保之　原　董　松井一明　溝口彰啓　守矢昌文
山下誠一　山本智子　吉川金利　吉川　豊
長野県飯田建設事務所　国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所　飯田市上郷考古博物館
飯田市教育委員会　飯田市役所財政課　飯田市美術博物館　飯田市歴史研究所
飯田市上久堅自治振興センター　飯田市下久堅自治振興センター　ＪＡ南信州下久堅支所

9　発掘調査の担当者、発掘作業員、整理作業員は第１章第２節に記載した。

10　本書の執筆は河西克造が行い、調査部長平林　彰、調査第１課長岡村秀雄が校閲した。

11　本書に添付したCDには、以下の内容を収録した。
遺構一覧表、遺構番号対比表、遺物観察表、中世土器・陶磁器組成表

凡　例

1　本書は、調査経過、遺跡の調査と概要、遺構と遺物、総括で構成されている。全体にかかわる図や個別遺構図、個別の表は章中に掲載し、遺構一覧表と遺物観察表、写真図版（PL）は巻末に一括して掲載した。

2　本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。他についても該当箇所のスケール上に表示している。

（1）全体図

事業地と発掘調査遺跡の位置　1:50,000　遺跡範囲と調査対象地・地形図　1:2,500

測量基準線設定図　1:2,000　秋葉街道推定図　1:300,000　遺跡分布図　1:25,000

調査範囲・トレンチ配置図　1:500　基本土層図　1:60　遺構全体図　1:100　1:250

平場（造成）図　1:100・300

（2）個別遺構図

礎石建物跡　1:60　柵列　1:80　井戸跡　1:40　ピット　1:20　1:40　土坑　1:20　1:40

溝跡　1:40　1:60　1:100　焼土跡　1:20

（3）遺物実測図

土器・陶磁器　1：4　打製石斧・横刃形石器・石錘　1：3

硯・砥石　1：2　礫石経代用品　1：4　鉄製品　1：2　銭貨　1：1

3　スクリーントーンは下記のとおり使用した。これ以外は該当箇所で説明してある。

焼土・被熱部分　　地山

4　基本土層及び遺構埋土等の色調は、『新版　標準土色帖』による。

5　本書で用いる飯田市内の遺跡名は、飯田市教育委員会『飯田市埋蔵文化財包蔵地地図（市内遺跡詳細分布調査報告書）』2015による。

なお、本書では龍源寺跡の南側に近接する神之峯城跡の発掘成果について触れたが、改訂後の遺跡名「神之峰城跡」、「神之峰北中腹遺跡」を用いる。

6　遺構一覧表で用いた断面形状は、下記のとおりである。

a1種		底部は平坦で、壁はほぼ垂立気味に立ち上がり、深さは比較的浅い。
a2種		底部は平坦で、壁はほぼ垂立気味に立ち上がる。
b1種		底部は湾曲し、壁がなだらかに立上がり、深さは比較的浅い。
b2種		底部は湾曲し、壁がなだらかに立上がる。
b3種		底部は湾曲し、壁がほぼ垂立気味に立上がる。
c 種		底部は狭く、断面が「V」字状になる。
d 種		底部は狭く、中間にテラスを持つもの。

7　遺物の報告番号（掲載番号）は遺物実測図・遺物写真図版とも共通する。なお、図化せず写真図版にのみ掲載した遺物は管理番号を用いた。

8　本文中で用いた遺構及び遺物の計測値は基本的にメートル表示とし、小数点以下の値になる場合はセンチメートル表示とした。

9　出土陶磁器のうち、中世陶磁器（古瀬戸製品、大窯製品）の時期区分は、藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯2002、藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』高志書院2008を基準とした。なお、本文中で用いる古瀬戸製品と大窯製品の小期は、正確には古瀬戸後期様式「後Ⅳ期古段階」、大窯第１段階であるが、「古瀬戸後Ⅳ期（古）」、「大窯１段階」と表記する。藤澤良祐氏の年代観は以下のとおりである。

古瀬戸後Ⅰ期：14世紀後半～末
古瀬戸後Ⅱ期：14世紀末～15世紀前半
古瀬戸後Ⅲ期：15世紀前半
古瀬戸後Ⅳ期（古）：15世紀前半～後半
古瀬戸後Ⅳ期（新）：15世紀後半～末
大窯１段階：15世紀後半～16世紀前半
大窯２段階：16世紀前半～後半
大窯３段階：16世紀後半～末
大窯４段階：16世紀末～17世紀初頭

10　遺物写真

原則として遺物図と同一縮尺であるが、任意縮尺にしているものもある。なお、写真図版は種別ごとに掲載した。

目　次

巻頭写真
はじめに
例言
凡例
目次
挿図目次
挿表目次
写真図版目次

第１章　調査の経緯と方法 …… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
　　1　一般国道256号の拡幅計画 …… 1
　　2　飯田市教育委員会による試掘調査と保護協議 …… 1
　　3　発掘届と発掘指示 …… 1
　　4　埋文センターによる受・委託契約 …… 3
　第２節　発掘・整理作業の体制と方法 …… 3
　　1　体制 …… 3
　　2　発掘調査における記録の方法 …… 3
　　（1）遺跡名称と遺跡記号　（2）調査区（グリッド）の設定と略号（第３図）
　　（3）遺構名称と遺構記号　（4）遺構等の測量と写真撮影　（5）遺跡の公開
　　3　整理作業の経過 …… 5
　　（1）基礎整理作業　（2）本格整理作業　（3）報告書の作成
　　4　調査経過（日誌抄）…… 6
第２章　遺跡周辺の環境 …… 9
　第１節　遺跡の位置と遺跡周辺の地理的環境 …… 9
　第２節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 11
　　1　旧石器時代 …… 11
　　2　縄文時代 …… 11
　　3　弥生時代 …… 11
　　4　古墳時代 …… 11
　　5　奈良・平安時代 …… 12
　　6　中世 …… 12
　　7　近世（織豊期以降）…… 13
第３章　遺跡と調査の概要 …… 17
　第１節　調査の概要 …… 17
　　1　調査の課題 …… 17
　　2　調査の方法 …… 17

（1）平場の認定　（2）トレンチ調査　（3）面調査
第２節　基本土層 …… 19
第４章　遺構と遺物 …… 26
第１節　概要 …… 26
第２節　遺構 …… 26
1　平場（造成） …… 26
2　礎石建物跡 …… 26
3　柵列 …… 35
4　井戸跡 …… 35
5　溝跡 …… 36
6　焼土跡 …… 43
7　土坑 …… 44
第３節　遺物 …… 49
1　土器・陶磁器 …… 49
（1）遺構内　（2）遺構外
2　石器 …… 51
3　石製品 …… 51
4　金属製品 …… 53
5　そのほか …… 53
第５章　総括 …… 55
遺構一覧表
遺物観察表
写真図版
報告書抄録
奥付
添付ＣＤ

挿図目次

第１図　国道256号（上久堅拡幅）事業地と発掘調査遺跡の位置 …… 2
第２図　遺跡範囲と調査対象地・地形図 …… 2
第３図　測量基準線設定図 …… 4
第４図　秋葉街道推定図（県教育1985をもとに作成）…… 10
第５図　遺跡分布図 …… 14
第６図　調査範囲・トレンチ配置図 …… 18
第７図　基本土層図 …… 21
第８図　遺構全体図１ …… 23
第９図　遺構全体図２ …… 24
第10図　遺構全体図３ …… 25
第11図　平場造成図 …… 27
第12図　ST01　遺構図１ …… 30
第13図　ST01　遺構図２ …… 31
第14図　ST01　ピット …… 32
第15図　Ⅳ層・Ⅴ層遺物出土状況図 …… 33
第16図　SA101　遺構図 …… 34
第17図　SE01　遺構図 …… 35
第18図　SD01～05　遺構図１ …… 37
第19図　SD01～05　遺構図２ …… 38
第20図　SD01・03　礫出土状況図 …… 39
第21図　SD06・07・101　遺構図１ …… 41
第22図　SD06・07・101　遺構図２ …… 42
第23図　SF01～03　遺構図 …… 43
第24図　SK02･03･16･17･25～28　遺構図 …… 46
第25図　SK29～31･34･37･39･40　遺構図 …… 48
第26図　土器・陶磁器　実測図 …… 50
第27図　石器・石製品　実測図 …… 52
第28図　礫石経　規模グラフ …… 53
第29図　金属製品　実測図 …… 54

挿表目次

第１表　文化財保護法の手続き …… 1
第２表　受・委託契約一覧 …… 3
第３表　調査・整理体制一覧 …… 3
第４表　遺跡地名表 …… 15
第５表　礎石建物跡一覧 …… 60
第６表　礎石建物跡　礎石一覧 …… 60
第７表　礎石建物跡　ピット一覧 …… 60
第８表　柵列一覧 …… 60
第９表　柵列　ピット・礎石一覧 …… 61
第10表　井戸跡一覧 …… 61
第11表　溝跡一覧 …… 61
第12表　焼土跡一覧 …… 61
第13表　土坑一覧 …… 62
第14表　石積遺構一覧 …… 62
第15表　土器・陶磁器観察表 …… 63
第16表　石器観察表 …… 65
第17表　石製品観察表 …… 65
第18表　金属製品観察表 …… 66

写真図版目次

PL１　龍源寺跡遠景
PL２　調査区全景
PL３　調査区全景、調査前風景
PL４　ST01全景
PL５　ST01全景・硬化面・礎石・礎石セクション・礎石断ち割り
PL６　ST01礎石断ち割り、ST01断ち割り、ST01 P11遺物出土状況
PL７　ST01 P11土器出土状況、SA101礎板石設置状況、SA101 P10完掘、SD01・03・04・05完掘・セクション、SD01・03セクション
PL８　SD03・ST01完掘、SD03石列・セクション、SD06・07完掘・セクション、SD101検出状況、SE01礫出土状況
PL９　SE01・SD06セクション、SE01・断ち割り、SK03完掘、SK25セクション・柱痕跡掘り下げ状況・礎板石設置状況、SK27完掘
PL10　SK27セクション・礫出土状況、SK29・37完掘、SK30完掘、SK39完掘・検出状況、SK40完掘、SF01検出状況
PL11　SF02検出状況、SF03検出状況、SX01石積遺構全景・山裾の石積、Ⅰ118　Ⅳ２層出土銭貨（23）、Ⅳ２層出土　平碗（14）、３トレンチセクション
PL12　２トレンチセクション、６トレンチセクション、７トレンチセクション、11・12トレンチ全景、12トレンチセクション、17トレンチセクション、18トレンチセクション
PL13　遺構内出土土器・陶磁器
PL14　遺構外出土土器・陶磁器
PL15　出土石器・石製品・金属製品

第１章　調査の経緯と方法

第１節　発掘調査に至る経緯

１　一般国道256号の拡幅計画

一般国道256号（以下、「国道256号」という。）は岐阜県岐阜市を起点として長野県飯田市上村を終点とする道路で、長野県でのおもな経由地は木曽郡南木曽町と下伊那郡阿智村、飯田市である。龍源寺跡が所在する飯田市域の中央をほぼ東西にのびる道路で、鼎、北方、松尾、下久堅、上久堅の各地区を通過する。上久堅地区内の現道は幅員が狭いうえに急カーブも多く、通行の支障となっている。国道256号の拡幅工事は、円滑な交通を確保し生活道路としての快適性・安全性を図るために、長野県飯田建設事務所（以下、「建設事務所」という。）が計画している道路改良である（第１・２図）。

２　飯田市教育委員会による試掘調査と保護協議

龍源寺跡の所在する飯田市上久堅地区は、飯田建設事務所による国道256号道路改良工事予定地に当たっており、事業の進捗に併せて、建設事務所、飯田市教育委員会（以下、「市教委」という。）、長野県教育委員会文化財・生涯学習課（以下、「県教委」という。）による協議が続けられてきた。

国道256号と下条米川飯田線の交差付近には、知久氏が建立したとされる「知久十八ケ寺」のひとつ「龍源寺」が所在したとされてきた（市村1925、岡田ほか1992、市教育1998）。平成25年度、事業が当該地に及ぶことになったことから、市教委が２回の試掘調査を実施した。

１回目は、平成26年１月15日～24日に国道256号と下条米川飯田線交差地点の東側、下条米川飯田線に沿って行われ、調査の結果、玉川の氾濫原であったことが判明した。

２回目は、平成26年７月15日～８月19日に国道256号と下条米川飯田線交差地点の南東側にある尾根に挟まれた谷状地形のなかに６本のトレンチを設定して行われた（第６図）。その結果、平坦地１に掘削したトレンチでＬ字状に配置された礎石建物跡の一部と考えられる４個の礎石、暗渠と考えられる溝跡、石垣、石積遺構、土坑、石の集積箇所とともに、17世紀と19世紀以降の陶磁器が確認された。この調査結果に基づき、市教委は龍源寺跡の範囲を拡張した。

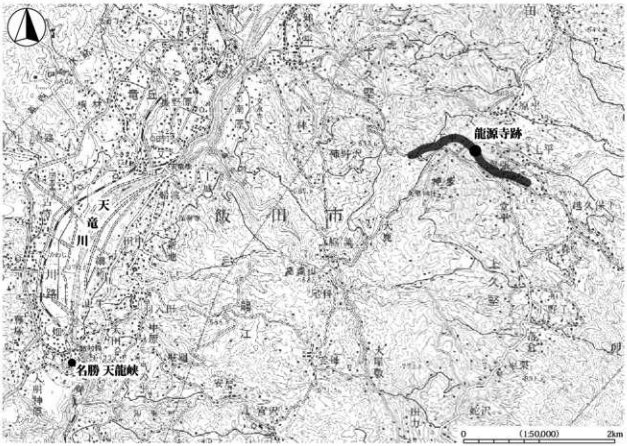
同年９月に建設事務所、県教委、市教委、長野県埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」という。）の四者による協議がもたれ、国道256号拡幅工事にあっては埋文センターが発掘調査を受託して実施することとなった。

３　発掘届と発掘指示

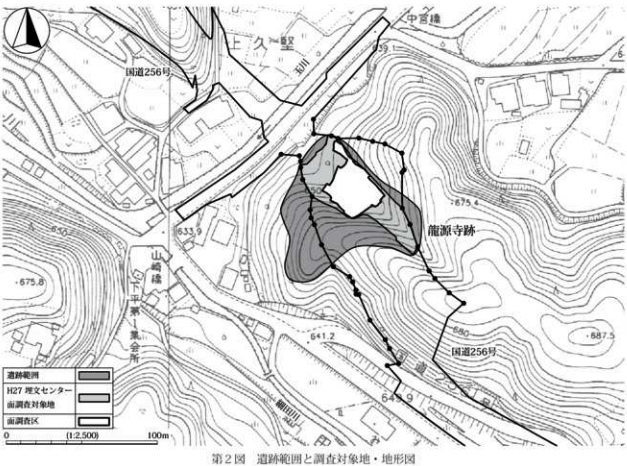
文化財保護法に基づく届け出等の手続きは第１表のとおりである。

第１表　文化財保護法の手続き

土木工事通知（法94条）	県教委勧告（法94条）	発掘届（法92条）	県教委指示（法92条）	埋蔵物発見届	文化財認定
文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付
25飯建第294-2号 （H26.1.30）	25教文8-343号 （H26.2.14）	26長埋第251号 （H27.3.3）	26教文第６-17号 （H27.3.12）	27長埋第2-3号 （H27.8.11）	27教文第20-42号 （H27.8.19）



第１図　国道256号（上久堅拡幅）事業地と発掘調査遺跡の位置



第２図　遺跡範囲と調査対象地・地形図

4　埋文センターによる受・委託契約

本報告書に関わる受委託契約は第２表のとおりである。

第２表　受・委託契約一覧

年度	契約期間	契約額（円）	作業内容	対象遺跡
平成27年度	平成27年３月30日～平成28年３月31日	33,480,000	発掘調査、基礎整理	龍源寺跡
平成28年度	平成28年６月１日～平成29年３月24日	20,098,800	本格整理	龍源寺跡

調査対象面積は、1,750㎡である。

第２節　発掘・整理作業の体制と方法

1　体制

調査・整理作業体制は第３表のとおりである。

第３表　調査・整理体制一覧

年度	所長	副所長	管理課長	管理課長補佐	調査部長	担当課長	担当調査研究員
平成27年度	会津敏男	多城　哲	山本希一	望月英夫	平林　彰	岡村秀雄	河西克造　鷹地孝大
平成28年度	会津敏男	竹内　誠	山本希一	望月英夫	平林　彰	岡村秀雄	河西克造　藤原直人　水澤教子
平成27年度　発掘調査作業員 金澤勢津子、木下由紀子、小嶋啓亮、後藤　寛、竹村サダエ、竹村満利、中野麻里子、中野充夫、長沼史子、長沼善朗、西野英利、松枝義雄、松沢キヌ子、簑島正三							
平成27年度　整理作業員（基礎整理） 鳥羽仁美、三沢真由美							
平成28年度　整理作業員（本格整理） 猪股万里子、柄澤登紀子、窪田　順、清水栄子、高松美法、藤丸　薫、西村はるみ、待井　聖、柳原澄子							

2　発掘調査における記録の方法

調査は県教委が示した「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」（2013年）と、埋文センターの「遺跡調査の方針と手順」（2014年）に則って実施した。

(1) 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称は、市教委作成の遺跡地図（2015）に記載されている遺跡名「龍源寺跡」とした。

遺跡記号は、発掘調査の便宜を図るため、遺跡名を大文字でアルファベット３文字で表記した記号で、龍源寺跡はIRGとした。１文字目は長野県内を９地区に分割した場合の飯田地区の記号を示す「Ｉ」、２文字目と３文字目は遺跡名をローマ字表記（RYUĈENJI）したなかの２文字「RG」を抽出したものである。これは、発掘調査を通じ記録類、遺物注記に用いている。

(2) 調査区（グリッド）の設定と略号（第３図）

国土地理院の平面直角座標系の原点（長野県はⅧ系、Ｘ＝0.000、Ｙ＝0,000）を基点に200の倍数を選んで測量基準点を設け、調査対象地全体をカバーするように調査区を設定した。

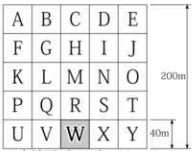
大々地区は、200×200mの区画で、グリッド名は北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字で表記。

大地区は、大々地区内を40×40mの25区画に分割し、北西から南東へＡ～Ｙのアルファベットで表記。

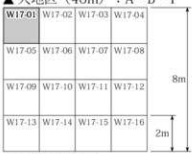
中地区は、大地区内を８×８ｍの25区画に分割し、北西から南東へ１～25のアラビア数字で表記。

小地区は、中地区内を２×２ｍの16区画に分割し、北西から南東に１～16のアラビア数字で表記。

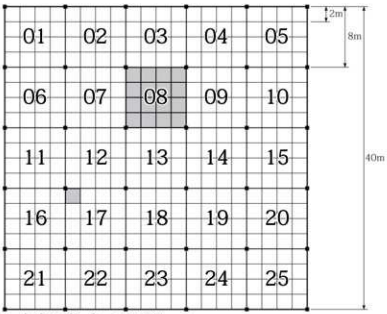
今回の調査では、中地区を遺構測量の基準単位とした。



▲ 大地区（40m）：A・B…Y

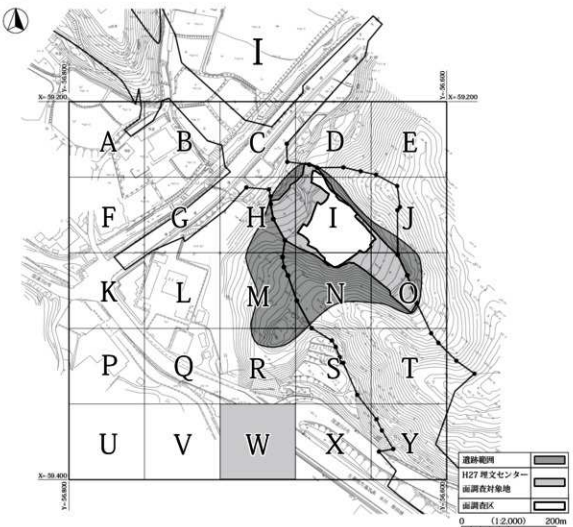


▲ 小地区（2m）



▲ 中地区（8m）：ＩW08
小地区（2m）：ＩW17-01

▼ 大々地区（200m）：Ｉ



第３図　測量基準線設定図

(3) 遺構名称と遺構記号

埋文センターでは、検出された遺構について記録と遺物注記等の便宜を図るために遺構記号を用いている。本書で用いた遺構記号は以下のとおりである。

ＳＴ：掘立柱建物跡、礎石を使用した建物跡　　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝跡　　ＳＡ：柵列

ＳＦ：焼土跡　　ＳＸ：不明遺構

(4) 遺構等の測量と写真撮影

遺構等の測量は簡易遣り方により、調査研究員およびその指導のもとに発掘作業員が行った。加えて業者委託による単点測量を実施した。調査範囲、トレンチ掘削地点および土層断面記録地点は、全体図や地形図とともに業者委託の単点測量で作成した。

遺構等の写真は、６×７判カメラとデジタル一眼レフカメラを併用して調査研究員が撮影した。フイルムカメラでは、モノクロカメラ（フジネオパン SS100）とカラーリバーサル（フジクローム100F）を用いて埋文センターが撮影し、現像と焼き付けは業者委託とした。空中写真は業者委託でラジコンヘリコプターを用いて撮影した。

(5) 遺跡の公開

発掘作業中、各種団体や地元住民の遺跡見学があった際にはその都度対応し、龍源寺跡の調査内容と発掘調査の意義や方法について説明した。平成27年６月27日（土）には地域住民を対象にした現地説明会を開催し、調査内容をいち早く地元に公開した（見学者53名）。その他、長野県考古学会や埋文センター発行の情報誌およびホームページで報告した。

３　整理作業の経過

(1) 基礎整理作業

平成27年度、発掘調査終了後の冬期に基礎整理作業を行った。作業内容は、各種記録類の内容確認、台帳及び遺跡・遺構の調査所見の作成である。写真類は撮影内容等の点検後、台帳を作成し、アルバムに収納した。出土遺物のなかで土器・陶磁器類は、洗浄・注記を行い、種類別に仮収納した。金属製品については脆弱遺物台帳を作成し、現場プレハブでアルコール洗浄したが、整理時に再度洗浄し乾燥剤を入れたタッパーに保管した。

(2) 本格整理作業

平成28年度に報告書の刊行に向けた本格整理作業を行った。

遺構については、基礎整理で作成した台帳をもとに属性表を作成するとともに、個別に内容を検討して報告書掲載遺構を確定した。掲載遺構は、パソコンを用いたデジタルトレース（使用ソフトはイラストレータ）で個別遺構図や遺物出土状況図等を作成した。遺構全体図や基本土層図等も同様である。なお、遺構全体図や測量基準線設定図、調査範囲図等は、委託業者が作成した図面を報告書掲載用に加筆・修正して用いた。

遺構写真等については、報告書掲載写真を選択した後に仮図版組みを行った。

遺物のうち土器や陶磁器は、全体像を把握した後に遺構単位に観察し、遺構の時期や性格を裏付けるために必要か否か、遺存率が高く図化できるかなどの観点で報告書に掲載する遺物とそれ以外に選別した。

掲載遺物については、土器・陶磁器類は接合、復元、補強ののち通し番号（管理番号）を付け、遺物管理台帳を作成した。本書に掲載した遺物観察表は、この遺物管理台帳をもととして作成したものである。また、金属製品は長野県立歴史館でＸ線写真を撮影し、同館での応急保存処理を経て遺物の遺存度

が良好でかつ種類が判別可能なものを抽出して図化した。実測図は1/1縮尺で作成している。

なお、遺構記号及び番号は、基本的に発掘作業時に認定したものを踏襲しているが、整理作業の過程で遺構として認定できないと判断したものや、新たに遺構記号・番号を付けたものもある。新たに付けた遺構番号や遺構番号を変更したものには、基本的に101番以降の番号を付けた。また、新旧遺構番号がわかるように、掲載遺構図にはST01 P1（SK06）と新旧両遺構名を併記し、遺構番号対比表をCDに収録した。

（3）報告書の作成

平成28年度の本格整理時に編集作業を行った。遺構図・遺物図・挿図・挿表など報告書に掲載する各種の図・写真仮図版と原稿が出来上がった段階で業者へ委託して行った。遺物写真撮影は、埋文センター職員が行った。

4　調査経過（日誌抄）

平成27年

３月30日　受・委託契約締結

４月６日　事前現地協議（建設事務所、埋文センター）

４月９日　発掘作業開始。重機によるトレンチ掘削開始。

４月15日　プレハブ・トイレ設置。

４月16日　発掘器材を埋文センターから現場プレハブに運搬。

４月17日　発掘作業開始式。

４月23日　平坦地１、市教委が試掘調査で礎石を確認した場所の精査。精査面から古瀬戸後期の平碗出土。山裾で確認した方形の石積遺構の精査。

４月24日　平坦地１、礎石を通す形でトレンチ掘削。トレンチ精査により礎石の設置面を確認。

４月27日　平坦地１、方形の石積遺構から幕末～近代の陶磁器出土。市教委試掘結果どおり、幕末～近代の遺構と判断する。

４月28日　平坦地１、重機による表土はぎ開始。礎石を覆うⅣ（暗褐色土）上面をやや下げたレベルまではぐ。Ⅲ層（黒褐色土）より近世以降の瓦と陶磁器出土。

４月30日　排土の場外搬出開始。

５月７日　平坦地１、表土はぎ部分における遺構検出開始。２トレンチの掘り下げ。礎石は造成後に設置されている可能性が高いことを確認する。

５月８日　平坦地１、平坦地の縁辺部にトレンチ掘削。土層断面観察の結果、縁辺部は盛土により構築されていることが明らかとなる。

５月13日　平場での遺構検出で、礎石推定地から土坑状の落ち込み（SK02）を確認。

５月14日　平坦地１、遺構検出において試掘で確認した礎石の延

発掘調査開始式

出土遺物の精査

谷状地形での調査

長を確認。これらの礎石は方形に配置することから礎石建物跡（ST01）と認定する。礎石には明瞭な掘方はなく、礎石の下部がわずかに窪むものがあることを確認。古瀬戸後期の平碗出土。

５月20日　平坦地１、Ⅳ層から銭貨（皇宋通宝）出土。

５月25日　ST01の礎石で囲まれた内側で硬化面Ⅵ１層を確認。遺跡が立地する谷状地形の奥部にトレンチ掘削。平場の造成土はないことを確認。

５月28日　飯田市上郷考古博物館　岡田正彦前館長、上久堅地区風張区在住の小池茂彦氏、市教委　吉川　豊専門主査現場見学。ST01の礎石上部に堆積するⅣ層から古瀬戸の天目茶碗出土。

５月29日　平坦地１、方形の石積遺構(石垣の裏込め)から砥石出土。

６月10日　飯田市上郷考古博物館　市澤英利館長、同博物館吉川金利学芸員現場見学。Ⅳ層から青磁碗出土。

６月16日　平坦地１、ST01の南西面に並走する石列を伴う溝跡（SD03）の精査。溝跡はST01を切っていることを確認。

６月17日　ST01の南東側の遺構検出で土坑状の落ち込みを数基確認。検出時に大窯製品（丸皿）出土。

６月19日　建設事務所　宮下　覚担当係長現場視察。

６月22日　市教委　下平博行文化財係長、羽生俊郎主査現場見学。

６月23日　ST01周囲で焼土跡（SF01～03）を確認。

６月27日　現地説明会を開催（参加者53名）。

６月30日　県教委文化財・生涯学習課　上田典男指導主事現場視察。

７月２日　長野県考古学会　小林正春学会長現場視察。遺構検出で硯出土。

７月６日　平坦地１、南西側（谷状地形の奥部付近）で溝状の落ち込み（SD07）を確認。

７月10日　平坦地１、石組みの井戸跡（SE01）を確認。

７月13日　空中写真撮影。

７月14日　井戸跡（SE01）から内耳土器出土。

７月17日　飯田市歴史研究所で明治７年作成の地引絵図を閲覧。明治年間に平坦地１は畑として利用されていたことを確認。

７月27日　平場の縁辺部に重機でトレンチ掘削。縁辺部の造成土の厚さは1.5mを測ることが判明。

７月28日　ST01の断ち割り（礎石列にトレンチ掘削）。土層断面の精査と観察の結果、谷状地形に堆積する自然堆積層（Ⅵ層）を削り、発生土を混ぜて平場を造成していることが判明。造成土下層の自然堆積層（Ⅵ層）から打製石斧出土。

７月29日　重機で井戸跡（SE01）の断ち割り。井戸跡に施した石

長野県考古学会　小林正春学会長の視察

現地説明会の風景

基礎整理での図面照合・修正

基礎整理での遺物注記

積みの精査。

７月30日　発掘作業終了式。

７月31日　発掘機材を埋文センターに運搬。

８月５日　重機でトレンチ等の埋戻し。引き渡し協議（建設事務所、埋文センター）

８月６日　平坦地３、重機で表土はぎと精査。遺構・遺物はなし。

８月11日　現場作業終了。

８月12日　基礎整理作業開始。飯田市歴史研究所で資料調査（龍源寺跡とその周辺の地籍図、土地台帳の閲覧）。

８月31日　基礎整理作業中断。

12月１日　基礎整理作業再開。

12月２日　遺物（注記）台帳作成開始。

12月６日　長野県考古学会の遺跡報告研究会で発掘成果を報告（報告者：河西）。

12月７日　脆弱遺物台帳作成開始。

12月９日　遺構台帳作成開始。

12月11日　遺物注記開始。

12月12日　図面照合・修正開始。

12月21日　写真台帳作成開始。

平成28年

１月12日　遺構所見カード作成開始。

３月11日　基礎整理作業員作業終了。

３月31日　基礎整理作業終了。

６月１日　受・委託契約締結。本格整理開始。

６月６日　遺物（土器・陶磁器）接合開始。

６月29・30日　立正大学文学部　時枝　務教授の中世寺院指導。

７月13日　遺物実測開始。

７月14日　個別遺構図デジタルトレース、版組開始。

７月21日　県立歴史館での金属製品応急保存処理終了。

８月18日　遺構計測開始。

９月14日　遺物計測開始。

９月27日　遺物観察表作成開始。

10月４日　遺物写真図版仮版組開始。

11月９日　遺構属性表（一覧表）作成開始。

12月９日　信州大学理学部　原山　智教授の石器・石製品指導。

平成29年

１月12日　遺物写真撮影開始。

１月13日　印刷業者決定（ほおずき書籍）。

３月16日　整理作業員作業終了。

３月24日　整理作業終了。

立正大学　時枝　務教授の指導

本格整理での遺物実測

本格整理での遺構図作成

信州大学　原山　智教授の指導

第２章　遺跡周辺の環境

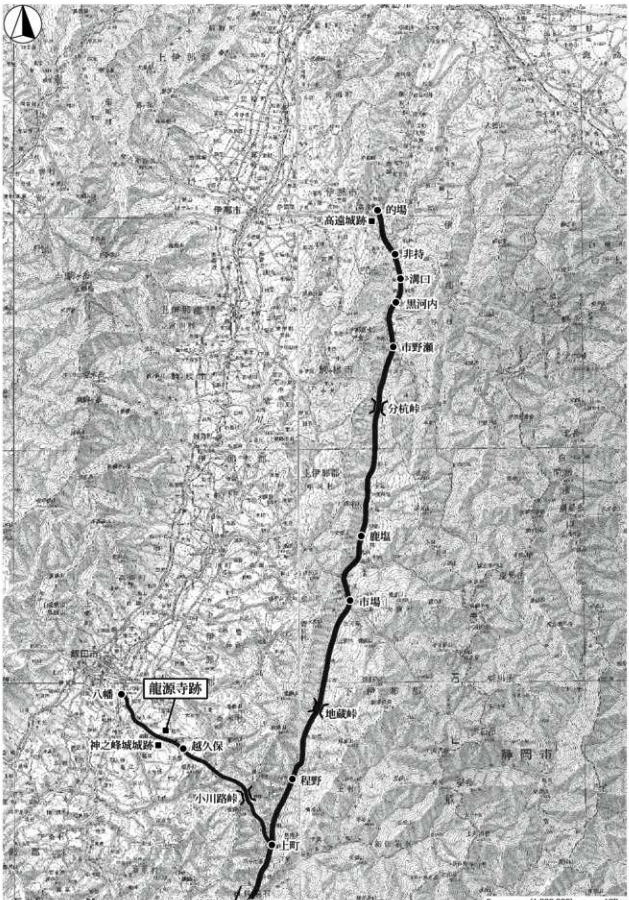
第１節　遺跡の位置と遺跡周辺の地理的環境

龍源寺跡は、長野県飯田市上久堅地区中宮区（上久堅3931-1ほか）に所在する（第２図）。上久堅地区は伊那谷の天竜川左岸（以下､「竜東」という。）に当たり、天竜川と伊那山地の中間地点に位置する。現在の飯田市街地（飯田城跡周辺）から約９㎞南東方向にあり、尾根と谷が入り組む複雑な地形を成す山間地にある。

龍源寺跡のある中宮区は上久堅地区内の北側に当たり、権現山・二本松山付近を水源とする玉川が流れている。玉川左岸には尾根状の台地があり、龍源寺跡は南東～北西に傾斜する台地の先端に形成された谷状地形のなかに立地する（第２図）調査対象地の標高は650mで、眼下には玉川と上久堅地区の集落、遠くは天竜川右岸（以下、「竜西」という。）に連なる木曽山脈が臨める。

上久堅地区には、江戸時代に盛んとなった秋葉山（静岡県）への参詣の道が通っており、今回、拡幅工事がされる現在の国道256号と重複もしくは沿って延びていたと推測されている（長野県教委1985）。秋葉信仰は火防の信仰として、庶民信仰として全国的に広まったという。秋葉山への参詣道は江戸時代中期には「秋葉みち」、近代になって「秋葉街道」と呼ばれるようになった。秋葉街道の本道は、伊那市高遠町から南下し、下伊那郡大鹿村を通り和田宿（南信濃村）、遠州（静岡県）へとつながる。途中の上町で、飯田の八幡宿から上久堅、小川路峠を越える道と合流する（第４図）。物資の移動、人の往来のある重要な道となっている。このルートは龍源寺跡に接するため、遺跡を評価するうえで欠くことができない。

飯田市上久堅地区　遠景（合成写真）



第４図　秋葉街道推定図（県教育1985をもとに作成）

第２節　遺跡周辺の歴史的環境

龍源寺跡の発掘調査では、中・近世の遺構と遺物を発見した。本節では、龍源寺跡が所在する上久堅地区周辺の遺跡を中心に概観する。第５図１が龍源寺跡である。従来、飯田市域の発掘例は竜西が大半を占め、竜東は少ない状況であったが、三遠南信自動車道（飯喬道路）建設に伴う広範囲な発掘調査によって、考古学的にみた竜東の様相をうかがうことができつつある。なお、平成27年度に市教委によって埋蔵文化財包蔵地地図が改訂されたため、本節では改訂後の遺跡名、遺跡範囲を用いて記述する（註１）。

１　旧石器時代

飯田市域における旧石器時代遺跡は、飯田市域の竜東では確認されていない。

２　縄文時代

第４表に示した範囲のなかで、当該期の遺跡分布は天竜川を臨む低位段丘とその直下にある微高地、さらに天竜川からやや離れた山間地に分かれるが、遺物が採取されたに過ぎない遺跡が多く、遺跡の様相を捉えることは難しい。

草創期の絡条体圧痕文土器は鬼釜遺跡（10）、早期の押型文土器は北田遺跡（22）と鬼釜遺跡、前期は北田遺跡で土坑が１基確認されている。

中期になると、遺跡の大半が河川の浸食で形成された尾根状（段丘状）地形や扇状地に遺跡が立地する。北田遺跡では50軒の竪穴建物跡で構成された中期後半の集落が確認されている。また、中期初頭の土坑12基が発見され、いずれの土坑にも土器を埋納し、なかには土偶や横刃形石器、黒曜石製の剥片を伴う土坑もある。鬼釜遺跡では、玉川左岸の自然堤防上から縄文中期後半の集落が発見され、集落背後の低地からは、廃棄されたと推測される多くの土器や土偶が出土している。

後期・晩期に属する遺跡は確認されておらず、鬼釜遺跡から後期の深鉢が確認されているに過ぎない。

３　弥生時代

弥生時代の遺構は、天竜川に面した微高地に立地する川原遺跡（48）で竪穴建物跡、天竜川からやや離れた山間地に所在する北田遺跡（22）で竪穴建物跡５軒、鬼釜遺跡（10）から後期最終末の竪穴建物跡１軒が確認されている。

後期は、北田遺跡で竪穴建物跡５軒、鬼釜遺跡から後期最終末の竪穴建物跡１軒が確認されている。

４　古墳時代

当該期の遺跡は、天竜川を臨む低位段丘と、天竜川からやや離れた山間地に分布する。前者は段丘の先端部に密集する様相を呈しており、内御堂遺跡（51）では後期の竪穴建物跡２軒が確認されている。後者では北田遺跡（22）から竪穴建物跡17軒、掘立柱建物跡24棟が確認されており、竜東における当該期の集落様相が把握できる貴重な資料である。この集落は６世紀後半～７世紀初頭に比定され（岡田ほか1992）、集落構成員と後述する鬼釜古墳（追葬）の被葬者との関連性がうかがえる。

古墳は天竜川を臨む河岸段丘（低地段丘）から山間地である上久堅地区まで散在的に分布するが、消滅した古墳も多い。鬼釜古墳（13）では周溝内から馬の殉葬墓がみつかった。古墳は６世紀前半に初葬、

６世紀末～７世紀初頭に追葬されたと推測され、殉葬墓は初葬時に構築されている。５世紀に竜西で形成された馬匹文化が６世紀に周辺地域に拡大したことを示す資料である。鬼釜古墳の北西方向に所在する塚穴１号（15）・２号古墳（16）では、７世紀の横穴式石室が発掘されている。

5　奈良・平安時代

奈良時代の遺跡では坂下遺跡（54）があるが、確認された遺構・遺物が僅少で、当該期の様相は不明である。

平安時代になると、天竜川氾濫原と低位段丘の先端、天竜川からやや離れた山間地に遺跡が分布し、前者では特に密集する様相を示す。上久堅地区の鬼釜遺跡（10）では、竪穴建物跡５軒から構成された集落と、水田稲作を行った可能性が高い集落背後の低地がセットで確認されている。竜東の下久堅地区と龍江地区には、平安時代の窯跡が分布する。第５図に図示した遺跡では、荻の平窯跡（79）、上の城窯跡（75）がある。

6　中　世

竜東に分布する中世の遺跡は、天竜川を臨む河岸段丘（下久堅地区）とその背後（龍江・千代地区）、さらに天竜川より奥まった場所（上久堅地区）とに分布する。

下久堅地区では菅沼氏の本城である知久平城城跡（50）、内御堂遺跡（51）、内御堂東遺跡（52）で発掘調査されており、知久平城城跡（50）では堀跡と土橋、掘立柱建物跡と推定される柱穴列と配石列がみつかっている。16世紀の蓮弁文青磁碗や中津川産の大甕が出土している。

千代地区の鷺ケ城城跡（図外）で山城の全面発掘されており、平場や堀切などで構成された15世紀後半～16世紀後半の城郭とその下層から中世墓が発見されている。

上久堅地区では風張遺跡（２）、神之峰城城跡（３）、神之峰北中腹遺跡（４）、鬼釜遺跡（10）、北田遺跡（22）が発掘調査されている。

集落遺跡では、風張遺跡において緩やかに傾斜する尾根を削平して平坦化した場所に構築した掘立柱建物跡が確認されている。複数の掘立柱建物跡で構成された屋敷地が展開している。鬼釜遺跡では、掘立柱建物跡で構成された集落が発見され、方形の竪穴を伴う掘立柱建物跡が確認されている。北田遺跡（22）では、長辺６間、短辺３間で四面庇がついた掘立柱建物跡と、骨が入った漆器が設置された土坑が確認されている。後者は出土遺物から墓坑と推測されている。

城郭遺跡として神之峰城城跡（３）と小野子城城跡（36）が所在する。神之峰城城跡（３）と知久平城城跡（50）の周囲には、砦跡などの小規模城郭は点在しない。

寺院関連の遺跡は、上久堅地区内の北側18か所の寺院推定地（知久十八ケ寺、市村1925）がある。このなかのひとつが龍源寺跡である。旧興禅寺跡（14）と旧玉川寺跡（25）には寺院が現存するが、ほかは所在不明である。これら寺院推定地は平成23年までは調査例がなかったが、飯喬道路建設に伴う調査では法心院跡（５）から15世紀～16世紀の２間×３間の総柱礎石建物跡、今回の調査で龍源寺跡から３間×３間の総柱礎石建物跡がみつかったことから、上久堅地区にはこの時期に宗教施設（堂宇）が散在的に分布していたと想定できる。なお、竜西の竜岡に所在する駄科北平遺跡（図外）では、礫をコ字状に並べ、その外側に溝跡（周溝）

文永寺　山門（河西撮影）

がめぐる遺構が確認されており、堂跡と推測されている（佐藤1987）。

次に、文献史学の研究成果（市村ほか1970、岡田ほか1992）から竜東の動向をうかがう。

武田氏侵攻以前の下伊那は、おおむね竜西を小笠原氏、竜東を知久氏が支配した。知久氏は承久３年（1221年）５月の承久の乱の軍功によって、上伊那郡から下伊那郡伴野庄へ移ったようである。知久郷（上久堅・下久堅）を本拠とし、初代信貞もしくは２代敦幸が文永寺(63)を創建している。天文２年(1533年）５月には、この文永寺に京都醍醐寺理性院の厳助僧正が下向し、結縁灌頂を執行している。同年６月、厳助僧正は文永寺から知久頼元のいる神之峰城へ輿に乗って登城している。頼元は文永寺と神之峰城で連歌会を行うなど、厳助僧正の接待をしている（「信州下向記」信濃史料刊行会1970）。「信州下向記」には、「神峯」の記載が多く認められる。

天文17年（1548年）、諏訪郡への侵攻を手始めとして、武田晴信（信玄）は信濃侵攻を開始する。諏訪氏との衝突に勝利し、諏訪郡を支配した武田氏は伊那郡に侵攻する。天文23年（1554年）には、知久郷に侵入（「勝山記」信濃史料刊行会1958）し、文永寺をはじめ知久郷をことごとく放火している（「厳助往年記」信濃史料刊行会1958）。武田軍の知久郷侵攻時に頼元が捕えられ、甲斐大原嶋に流されている（「勝山記」信濃史料刊行会1958）。この後、武田氏が滅亡する天正10年（1582年）の間に神之峰城の存続を示す文献史料は確認されていない。

７　近　世（織豊期以降）

竜東に分布する近世の遺跡は、天竜川を臨む低位段丘の先端と、天竜川からやや離れた山間地に分布する。遺構が確認されている遺跡では、風張遺跡（２）、神之峰城城跡（３）、神之峰北中腹遺跡（４）、鬼釜遺跡（10）がある。風張遺跡（２）では緩やかに傾斜する尾根上を削平して平坦化した場所に構築した４間×４間の掘立柱建物跡、神之峰城城跡（３）では16世紀代と推測される堀切、神之峰北中腹遺跡（４）では18・19世紀の小集落、鬼釜遺跡（10）では溝跡が確認されている。

竜東の喬木村富田地区では、江戸時代後期と推測される富田窯跡（図外）が発掘調査されている。

天正10年（1582）２月、武田氏討伐のため織田信忠が信濃に侵入する。上久堅地区の興禅寺には、信忠が同寺に与えた禁制（註２）が残っている（「興禅寺文書」信濃史料刊行会1969）。知久頼氏は、旧領（知久領）に復帰（「矢嶋文書」信濃史料刊行会1969）しているので、神之峰城は再興されたと理解されている（平山2011ａ）。頼氏は武田軍に放火された文永寺を復興した（「文永寺文書」信濃史料刊行会1961）が、後に徳川家康に浜松まで呼び出され切腹させられている。その時期は天正12年（1584年）11月頃（平山2011ｂ）とされている。この時期以降、神之峰城の存在を示す同時代の文献史料は確認されていない。知久頼氏に代わって旧知久領を治めた菅沼定利は、天正12年（1584年）に知久平城を築城し、伊那郡支配の拠点とした（平山2011b）。

「秋葉みち」道標（河西撮影）

上久堅地区に関係する交通路として、近世に盛んとなった秋葉山（静岡県）への参詣道「秋葉みち」が龍源寺跡の立地する台地に沿って通っている（註３、長野県教委1985）。この道が中世に存在したことをうかがわせる事象として以下のものがある。第一は、知久氏が本城を下久堅の知久平から上久堅の神之峰城に移していること。第二は、天文２年（1533年）に厳助僧正が文永寺から神之峰城に向かっていること。第三は、織田信忠が興禅寺に天正10年２月に禁制を発

第５図　遺跡分布図

第４表　遺跡地名表

	飯田市遺跡番号	遺跡名	地区	ふりがな	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	概況	備考
1	1150	高源寺跡	上久堅	ちゅうげんじあと							○	○	寺跡跡	今回、発掘調査実施
2	466	鳴笛遺跡	上久堅	かぢはいせき		○		○			○	○	集落跡	-郭発掘調査済
3	1108	神之林城跡	上久堅	かんのみねじょうじょうあと							○	○	城跡	-郭発掘調査済
4	467	神之林北中腹遺跡	上久堅	かんのみねきたちゅうふくいせき						○	○	○	集落跡・その他の遺	-郭発掘調査済
5	1144	法元遺跡	上久堅	ほうもんいんあと							○		寺院跡	-郭発掘調査済
6	1145	知覚寺跡	上久堅	ちかくでらあと							●		寺院跡	
7	1146	観慶寺跡	上久堅	しんけいじあと							●		寺院跡	
8	1147	隠光寺跡	上久堅	ようこうじあと							●		寺院跡	
9	1148	常福寺跡	上久堅	こうふくじあと							●		寺院跡	
10	465	塩釜遺跡	上久堅	ねこがまいせき		○	○	○		○	○	○	集落跡	-郭発掘調査済
11	1155	熊神寺跡	上久堅	もくぜんじあと							●		寺院跡	
12	1061	冬頭古墳	上久堅	もくぜんこふん					●				古墳	
13	1060	塩釜古墳	上久堅	おにがまこふん					○				古墳	-郭発掘調査済
14	1151	日輪座寺跡	上久堅	きゅうこうざんじあと							●		寺院跡	現、興禅寺の所在地
15	1058	塚穴１号古墳	上久堅	つかあな１ごうこふん					○				古墳	-郭発掘調査済
16	1059	塚穴２号古墳	上久堅	つかあな２ごうこふん					○				古墳	-郭発掘調査済
17	1149	西門跡	上久堅	ふもういんあと							●		寺院跡	
18	464	中沢原遺跡	上久堅	なかみやはらいせき		○		○					散布地	
19	463	明田塚遺跡	上久堅	みょうだつかいせき							○		散布地	
20	1152	東福寺跡	上久堅	じゅうりんじあと							●		寺院跡	
21	1214	明照塚	上久堅	みょうがつか							●		信仰塚	
22	462	北田遺跡	上久堅	きただいせき		○	○	○			○		集落跡	-郭発掘調査済
23	461	原の平遺跡	上久堅	はらのたいらいせき		○		○			○	○	散布地	
24	1153	東福寺跡	上久堅	えいふくじあと							●		寺院跡	
25	1154	甘五山寺跡	上久堅	きゅうぎょくざんあと							●		寺院跡	現、玉川寺の所在地
26	1136	是心寺跡	上久堅	ぜしんじあと							●		寺院跡	
27	1137	古寺跡	上久堅	こでらあと							●		寺院跡	
28	1158	八王寺跡	上久堅	はちおうじあと							●		寺院跡	
29	468	鳴山遺跡	上久堅	きりやまいせき		○							散布地	
30	469	越久保遺跡	上久堅	こいくぼいせき		○							散布地	
31	470	越久保南遺跡	上久堅	こいくぼみなみいせき		○							散布地	
32	1139	山寺跡	上久堅	やまでらあと							●		寺院跡	
33	472	整三坂遺跡	上久堅	せうさんざかいせき									散布地	
34	1160	小野寺跡	上久堅	おのでらあと							●		寺院跡	
35	475	小野子上遺跡	上久堅	おのこじょうじょうあと		○							散布地	
36	1109	小野子城遺跡	上久堅	おのこじょうじょうあと							●		城跡	
37	474	小野子遺跡	上久堅	おのこいせき		○							散布地	
38	471	北ノ入遺跡	上久堅	きたのいりいせき		○							散布地	
39	473	堂平遺跡	上久堅	どうだいらいせき		○							散布地	
40	1161	興禅寺跡	上久堅	おきょうどうあと							●		寺院跡	
41	1051	神殿古墳	下久堅	じんでんこふん					●				古墳	
42	437	南の前原平遺跡	下久堅	みなみのくみつかだいらいせき		○			○				散布地	
43	440	南塩沢上遺跡	下久堅	みなみしおざわしたいせき						○	○		散布地	
44	439	南塩沢遺跡	下久堅	みなみしおざわいせき						○	○		散布地	
45	442	三石遺跡	下久堅	みついしいせき		○		○		○			散布地	
46	441	土狼遺跡	下久堅	しゃぼいいせき		○				○			散布地	
47	446	下谷戸遺跡	下久堅	しもいさどいせき						○			散布地	
48	447	川原遺跡	下久堅	かわらいせき		○	○						集落跡	-郭発掘調査済
49	445	高塚遺跡	下久堅	たかつかいせき				○				○	散布地	
50	1107	知久平城遺跡	下久堅	ちくだいらじょうじょうあと							●		城跡	-郭発掘調査済
51	443	内藤平遺跡	下久堅	うちふじいらいせき		○	○	○		○	○	○	集落跡	-郭発掘調査済
52	444	内藤平東遺跡	下久堅	うちふじらひがしいせき		○		○			○	○	集落跡	-郭発掘調査済
53	449	荒田し遺跡	下久堅	うまだしいせき		○				○	○	○	散布地	
54	450	塩下遺跡	下久堅	さかしたいせき				○	○	○	○	○	散布地	
55	451	鍛冶田遺跡	下久堅	みとをだいせき						○			散布地	
56	448	下川原遺跡	下久堅	しもかわらいせき							○		散布地	
57	748	塩沢古墳	松尾	はりはるこふん					●				古墳	
58	194	塩原遺跡	松尾	はりばいいせき		○		○	○	○	○	○	集落跡	-郭発掘調査済
59	768	丸塚古墳	塩沢	まるつかこふん					●				古墳	
60	207	城跡遺跡	塩沢	じょうちゃいせき		○	○	○		○	○	○	集落跡	
61	458	下久堅南原遺跡	下久堅	しもひさかたみなばらいせき		○							散布地	
62	455	五輪原遺跡	下久堅	ごりんばらいせき		○		○			○	○	散布地	
63		文永寺	下久堅	ぶんえいじ									現在寺院	中世に知久氏が建立
64	457	松平遺跡	下久堅	まだいらいせき		○							散布地	
65	454	小林原遺遺跡	下久堅	こばやしはらはいせき		○					○	○	散布地	
66	453	小林沢の前遺跡	下久堅	こばやしみやのまえいせき		○					○	○	散布地	
67	1064	赤塚古墳	下久堅	あかをかこふん					●				古墳	
68	452	向新道地遺跡	下久堅	むかいしんどうちいせき							○		散布地	
69	1106	小林城城跡	下久堅	こばやしじょうじょうあと							●		城跡	
70	456	小松原遺跡	下久堅	こまつばらいせき		○					○		散布地	
71	1057	十ノ平古墳	下久堅	しちのたいらこふん					●				古墳	
72	459	下の平遺跡	下久堅	しものたいらいせき		○							散布地	
73	460	南原中平遺跡	下久堅	みなばるなかだいらいせき		○					○	○	散布地	
74	479	上の城東遺跡	龍江	かみんじょうのがしいせき		○						○	散布地	
75	1166	上の城堀跡	龍江	うえのじょうのまあと						●			堀跡	
76	1056	塚穴調古墳	下久堅	つかあなほうこふん					●				古墳	
77	1213	野田十三塚	下久堅	のだじゅうさんづか							●		十三塚	-郭発掘調査済
78	1055	宮ノ台古墳	下久堅	みやのきこふん					●				古墳	
79	1165	鍋の平遺跡	龍江	おぢのたいらかまあと						●			窯跡	
80	480	龍江鍋原遺跡	龍江	たつえきつばかかいせき							○		散布地	
81	481	塚ヶ原遺跡	龍江	たにがはらいせき						○			散布地	

凡例　第４表は、市教委2015「飯田市埋蔵文化財包蔵地図（市内遺跡詳細分布調査報告書）」をもとに作成。
○：遺構確認（市教委2015に記載あり）。
○：遺物確認（同上）
●：市教委2015に記載されている時期。

給したことである。

註

1）飯喬道路建設に伴い調査した「神之峯城跡」は、改訂後「神之峰城城跡」と「神之峰北中腹遺跡」に分けられた。

2）禁制は寺社などの受給者からの申請に基づいて戦国大名などが発給する文書（田中2004）で、基本的に札銭を持参して下付されること（峰岸1993）からすると、興禅寺側は阿智から竜西（三州街道）を北上して進軍する織田軍に接して受給されたと考えられる。

3）飯田市歴史研究所で閲覧した「野池山山論図」でも龍源寺跡の近くを通っていることを河西が確認した。

現存仏堂（長野県下伊那郡大鹿村福徳寺本堂　室町時代前期　重要文化財　河西撮影）

谷状地形に立地する現存仏堂（埼玉県飯能市福徳寺　鎌倉時代　重要文化財　河西撮影）

第３章　遺跡と調査の概要

第１節　調査の概要

１　調査の課題

調査においては、以下に記す３項目の調査課題を設定して実施した。

第一は、市教委の試掘調査で確認された遺構の全体像を把握することである。特に、トレンチで検出した礎石が礎石建物跡の一部であるか否かと、その時期を捉えることであった。

第二は、礎石下層における先行遺構・遺物の存否を捉えることである。

第三は、神之峰北中腹遺跡の調査では、谷状地形を埋め立てて平場を形成していることが判明したことから遺構を構築するに当たり自然地形を改変して平場を形成したか否か、またその構築状況とその時期を捉えることである（註１）。

２　調査の方法

(1) 平場の認定

市教委の試掘調査で確認された３か所の平坦地（平坦地１、２、３）のなかで、礎石建物跡（ST01）等を構築するために造り出した平坦な箇所を「平場」と呼称することとした。

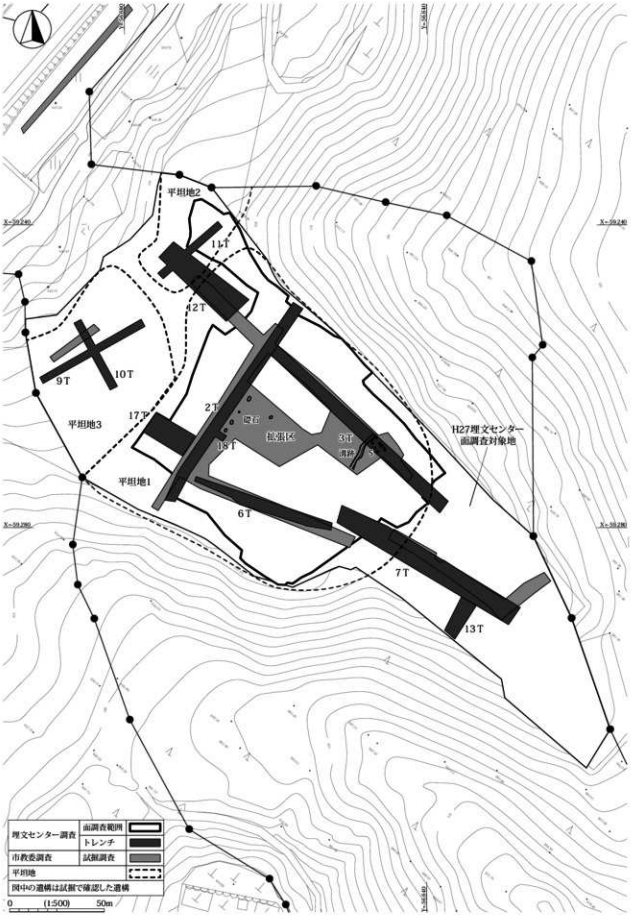
(2) トレンチ調査

表土はぎを伴う面調査に先行し、谷状地形内の土層堆積状況や遺構と遺物の存否もしくは密度を確認するためにトレンチを設定し確認調査を進めた。調査の初段階に、試掘調査で確認した土層堆積状況と検出遺構を把握する目的で、トレンチは試掘調査の箇所以外にも、平坦地１縁辺の17、18トレンチや平坦地３に９・10トレンチ、平坦地２の11トレンチ、平坦地２の斜面下方の８トレンチなど、必要と認めた箇所に設定した（第６図）。

その結果、平坦地１では礎石、土坑、溝跡、暗渠等を確認し、また平場で造成している可能性が高いことがうかがえた。また、平場の想定範囲より谷奥で平場形成前の自然堆積層が確認されたこと、礎石検出面が平坦化していることから、平場の範囲は谷状地形の中央部やや南東側から谷状地形が開口する北西側一帯であると想定した。

さらに、遺構検出面は、①Ⅱ層（耕作土）上面、②Ⅲ層（黒色土）上面、③Ⅴ層上面に存在することが確認でき、市教委が把握した上部造成面が①、下部造成面が③に対比できると考えた。しかし、試掘調査報告書には、③で検出される礎石は17世紀と記載されているが、確認調査が進行するにしたがい、Ⅳ１層もしくはⅣ２層には中世遺物しか出土せず、礎石は中世に帰属する可能性が考えられた。確認調査では、③の下層における生活面は把握できていないため、③の調査が最も重要視されると予想した。

なお、確認調査で設定したトレンチは、市教委の試掘調査と同じ場所に設定したものはその番号を踏襲し、新規に掘削したトレンチは続き番号を付けた。



第６図　調査範囲・トレンチ配置図

(3) 面調査

面調査の範囲は、調査区内への排土流出を防ぐために掘削しなかった縁辺部の縁を除き、平坦地１のほぼ全域とした。また、確認調査で検出した遺構は、出土遺物から、①Ⅱ層を掘り込む遺構が幕末～明治、②Ⅲ層を掘り込む遺構が近世、③Ⅴ層上面に設置された遺構を中世と把握できた。なお、トレンチ土層断面観察では、②は③の遺構検出面まで下げても残存することが把握できたため、面調査では③における遺構検出・遺構調査を重点的に行うこととし、同一面で②の遺構も併せて検出・調査することとした。

面調査が進行するにしたがい、Ⅳ層（Ⅳ１層・Ⅳ２層）から出土する土器・陶磁器は古瀬戸後期のものが多いことが明らかになった。したがって、遺構調査に移行する段階で、Ⅴ層上面で確認できる遺構は、中世（15世紀）に帰属する可能性が高いと認識した。

第２節　基本土層

調査対象地は谷奥である南東から玉川が流れる北西側に開口する谷状地形で、地表面は同方向に緩やかに傾斜する（第２図）。ここに礎石建物跡などの遺構を構築するため、谷奥付近と谷状地形の中央部に堆積する自然堆積層を削平し、発生土を開口部側に盛る造成行為がなされている。

発掘時に付けた基本土層名は、造成が谷状地形全域に及ばないことや造成土と自然堆積層の堆積状況が各所で異なるなど、谷状地形内の土層堆積状況が複雑化していることが発掘調査の進行に伴いわかったため、初めに付けた基本土層名（算用数字）は、細部で再検討を余儀なくされた。

そこで、整理作業時に調査区内に堆積する土層や確認された遺構・遺物をもとに再整理した。

基本土層図（第７図）は、自然堆積層が遺存する谷奥と斜面の削平痕跡確認地点、礎石建物跡（ST01）確認地点、平坦地１の北西縁辺部で記録した土層断面図を用いて作成した。

遺構検出面はⅤ層もしくはⅥ層である。

龍源寺跡　基本土層

Ⅰ層：10YR2/2　黒褐色。草木・木根多量混入。表土。

Ⅱ層：10YR3/3　暗褐色。谷状地形内ほぼ全域に堆積する層である。締まりややあり、粘性なし。花崗岩粒ブロックと炭化物が混入する。土質から耕作土（畑地）と推測され、18世紀～19世紀の陶磁器が出土したことから、当該期以降に形成されたものと判断される。明治20年代に作成された地籍図（旧公図）には、平坦地１の地目は畑と記載されており（註２）、この畑が本層を示していると判断する。

Ⅲ層：谷状地形内に堆積する層である。17世紀前半の陶磁器が出土したSD05と近世以降の瓦と礫が多く充填される暗渠は本層を切っている。土質と色調からⅢ１層～Ⅲ３層に分層した。

Ⅲ１層：10YR4/3　にぶい暗褐色。平坦地１の北東側に堆積する。本層の土質はⅢ３層に酷似するが、３トレンチ土層断面では、本層の下にⅢ３層が堆積していることから、本層はⅢ３層堆積後に耕作等が及んだことで形成されたものと理解できる。締まり、粘性なし。砂質で花崗岩粒が多量に混入する。花崗岩風化層ブロックと褐色土ブロックが混入する。

Ⅲ２層：10YR3/2　黒褐色。平坦地１の南東側から谷奥に堆積する層である。層全体が黒色化し、締まり、粘性なし。やや砂質で花崗岩粒と炭化物粒が混入する。自然堆積層と判断する。

Ⅲ３層：10YR3/1　黒褐色。平坦地１の中央部～東側に堆積する層である。Ⅲ２層と同様、層全体に黒色化する。しまり、粘性なし。花崗岩粒と炭化物粒が混入し、自然堆積層と判断する。

Ⅳ層：平場の中央部～西側に堆積し、礎石建物跡（ST01）を覆う層である。ST01の中央部を境に北側と南側で土質に異なりが認められたためⅣ１層とⅣ２層に分層したが、両者は同じ性格と判断する。なお、本層は部分的に暗褐色～黒褐色化することから、耕作等が行われた可能性が高い。

Ⅳ１層：10YR4/4　褐色。平場１の中央に位置するST01の中央部～北側に堆積する。締まりあり、粘性なし。シルト質で、花崗岩粒の主体層。黒褐色土ブロックが混入する。古瀬戸後Ⅲ期の遺物が出土している。

Ⅳ２層：10YR3/4　暗褐色。ST01の中央部～南側に堆積する。締まりややあり、粘性なし。暗褐色土の主体層で、花崗岩粒が多く混入する。古瀬戸後Ⅲ期・後Ⅳ期、大窯１段階の遺物、青磁碗、常滑の甕が出土している。

Ⅴ層：平場を造成した層である。層厚は平場の縁辺部で約1.5mに及ぶ。土質と色調からⅤ１層～Ⅴ30層に分層したが、詳細は第７図を参照。本層は、堆積状況から以下の２種類に分けられる。

Ⅴ１層～Ⅴ19層：谷状地形の開口部側を埋めた後、ST01等を構築するために平場を形成した層である。ST01直下に堆積するⅤ１層・Ⅴ２層は硬化しており、人為的にたたき締めたと判断する。ST01の南側に堆積するⅤ６層・Ⅴ８層（第７図）もたたき締めた可能性が高い。

Ⅴ20層～Ⅴ27層：Ⅴ１層～Ⅴ19層による造成を行う以前、平場の縁辺部を埋めた複数の土である。本層には基本土層Ⅵ１・３層を基調とした黒褐色土主体層（Ⅴ11層・Ⅴ18層・Ⅴ20層・Ⅴ22層）、基本土層Ⅵ４層を基調とした褐色土主体層（Ⅴ６層・Ⅴ８層・Ⅴ26層）、基本土層Ⅵ１～Ⅵ３層を基調とした黒褐色土と褐色土の混合層（Ⅴ３層・Ⅴ５層・Ⅴ７層・Ⅴ12層・Ⅴ15層・Ⅴ23層・Ⅴ27層）があり、平場を形成するために、谷奥側に堆積する自然堆積層（Ⅵ層）を削平し、発生土を用いて開口部側に盛土していると判断できる。

Ⅵ層：平場を構築する以前、谷状地形に堆積した自然堆積層である。谷奥と造成土（Ⅴ層）の下層で確認した。遺存するⅥ層の傾斜からすると、造成以前の谷状地形は、谷奥から開口部側に向かい緩やか（約10～20°）に傾斜していた。土質と色調からⅥ１層～Ⅵ４層に分層した。

Ⅵ１層：10YR3/2　黒褐色。谷奥と谷状地形の中央部～開口部側に堆積する。谷状地形の中央部～谷奥側は、平場の形成に伴い削平され遺存しない。黒色化が顕著な層で、締まりあり、粘性なし。炭化物粒と褐色ブロックが混入する。打製石斧が出土している。

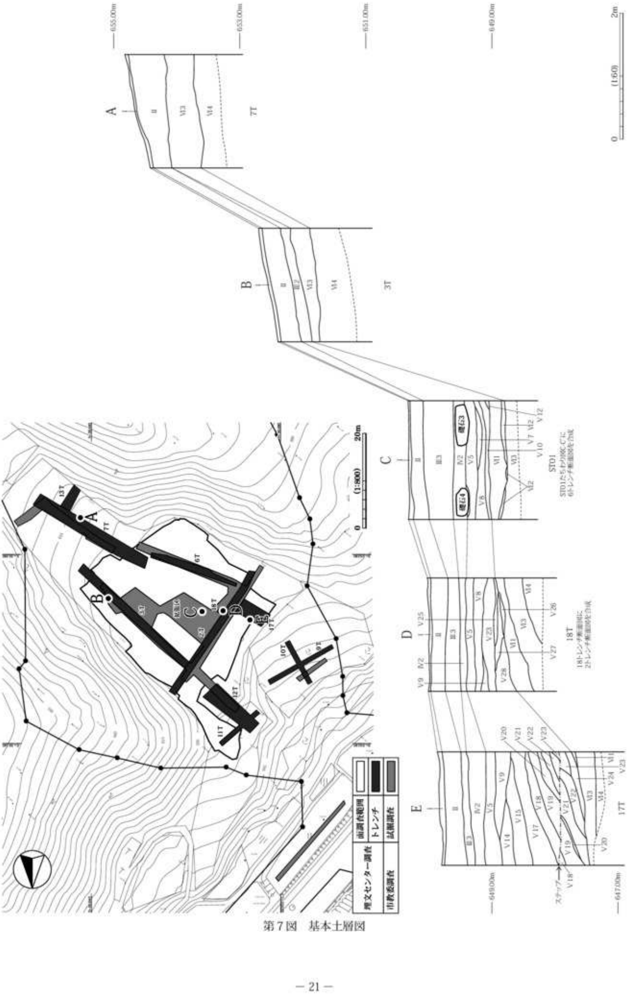
Ⅵ２層：10YR4/6　褐色。谷状地形の中央部やや開口部側で確認した。締まりが強く、粘性なし。シルト質で、花崗岩粒が混入する。

Ⅵ３層：10YR3/2　黒褐色。谷状地形の中央部から谷奥側は、削平され遺存しない。黒色化が顕著な層で、締まり、粘性あり。シルト質で、褐色土ブロックが混入する。

Ⅵ４層：10YR4/4　褐色。谷状地形の全域に堆積する。部分的に粘土質で花崗岩粒が多量混入する。花崗岩風化層。

註

1）近年提唱された「土木考古学」（工業2008）は、考古資料から土木の実態を明らかにする研究分野で、龍源寺跡の調



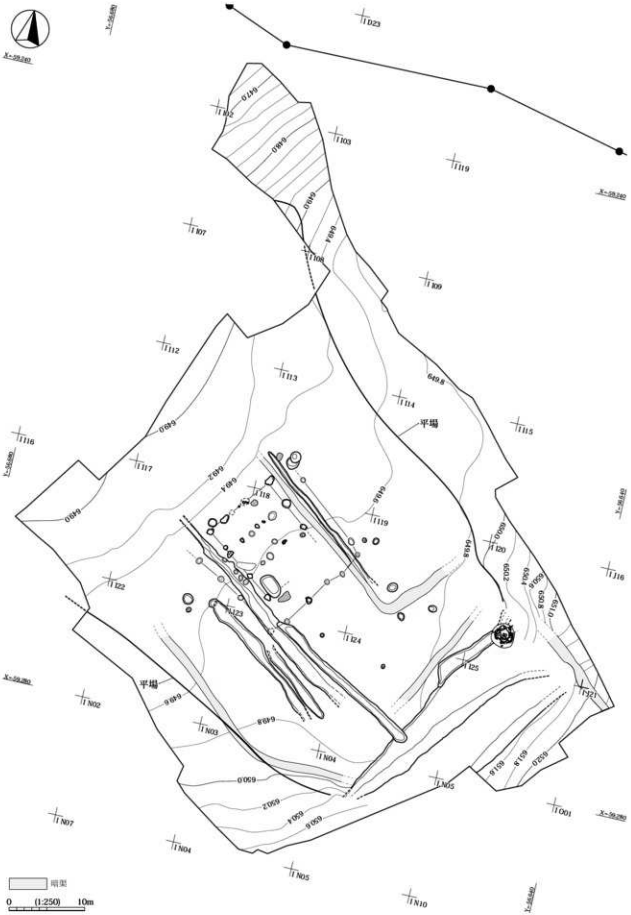
第７図　基本土層図

査では土木考古学の分野に良好な資料を提示することができる可能性がある。

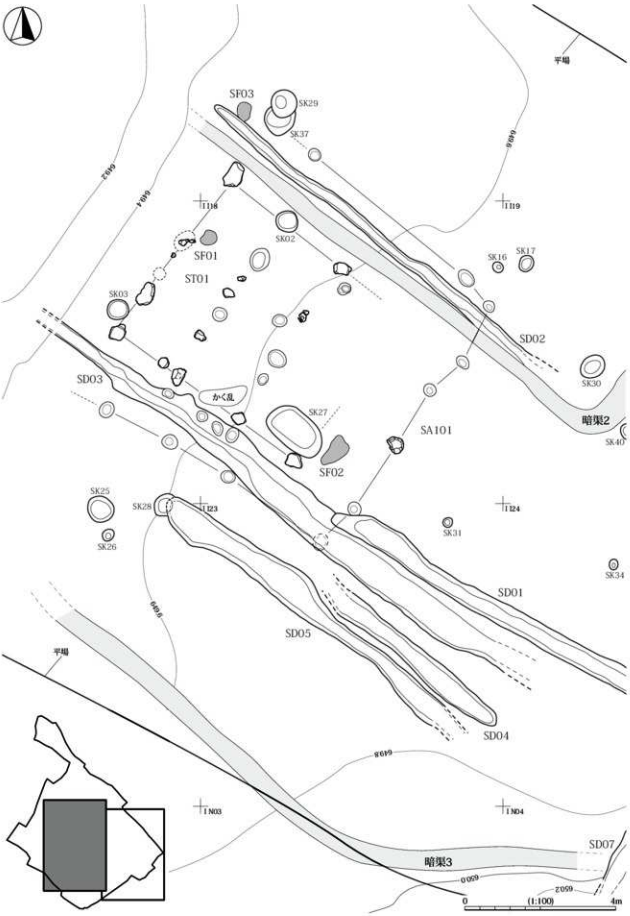
２）平成27年８月12日、飯田市歴史研究所で地籍図を河西が閲覧して確認した。

発掘作業記念写真

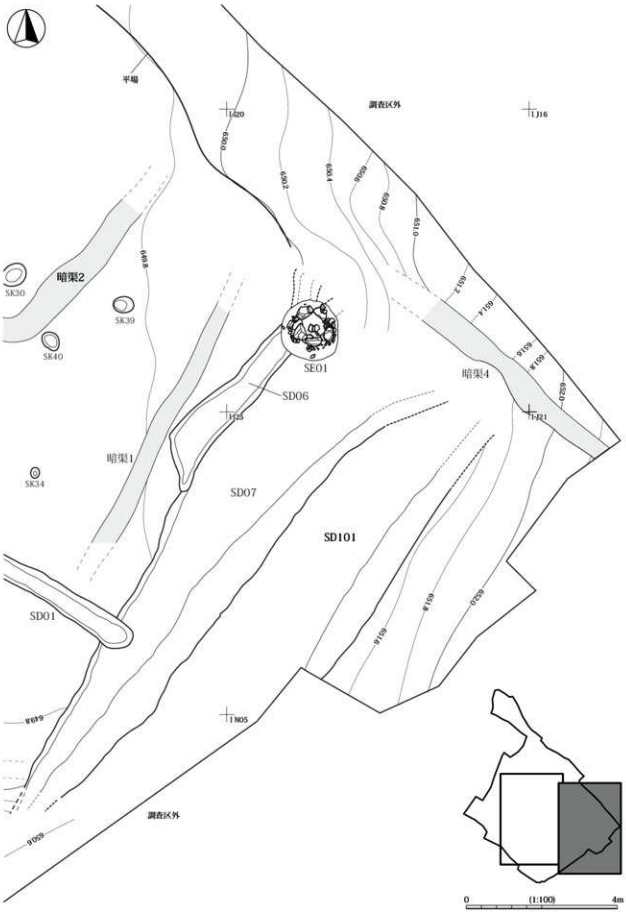
本格整理記念写真



第8図　遺構全体図1


平場
SF03
SK29
SK37
6.00
7.00
6.00
I118
I119
SK02
SF01
ST01
SK16
SK17
SK03
SD02
SK30
SD03
かく乱
SK27
暗渠2
SA101
SK40
SF02
SK25
SK28
I123
I124
SK31
SK26
SK34
SD01
6.00
SD05
平場
SD04
6.00
I N03
I N04
SD07
暗渠3
6.00
6.02
0
(1:100)
4m

第９図　遺構全体図２


平場
調査区外
I J20
I J16
暗渠2
SK30
SK39
SK40
SK34
暗渠1
暗渠4
SE01
SD06
I R25
I R21
SD07
SD101
SD01
I N05
調査区外
0
(1:100)
4m

第10図　遺構全体図３

第４章　遺構と遺物

第１節　概要

調査対象地である谷状地形内から15世紀中頃～近代にわたる遺構が確認された。この谷状地形内は、もともと谷奥から開口部（玉川側）に向かって緩やかに傾斜する地形であったが、15世紀中頃には谷状地形内を造成して平坦な場所（平場１）を造り出した後に礎石建物（ST01）や柵列、井戸、溝、土坑などの中世遺構が構築されている。また、礎石建物廃絶後の17世紀には、溝跡や土坑も造られた。

出土遺物は、中・近世の土器・陶磁器と礫石経の代用品などの石製品、鉄釘・銭貨などの金属製品、鉄滓のほか、縄文時代の石器も出土した。中世の土器・陶磁器は、その多くが古瀬戸製品・大窯製品で、鉄釘とともにST01直上のⅣ層からの出土が目立った。

第２節　遺構

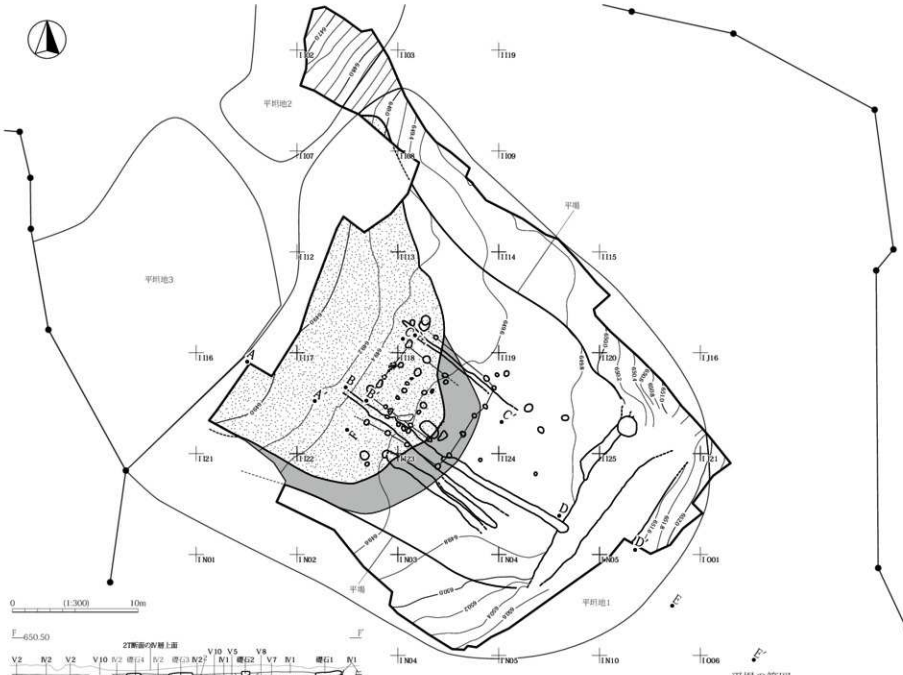
１　平場（造成）［遺構：第11図、PL12、遺物：第26図、PL13］

位置：谷状地形の谷奥側から開口部に位置し、ST01などの中世遺構を構築するために造り出した平坦面である。　**検出**：Ⅳ層（Ⅳ１・２層）をはいだⅤ層上面もしくはⅥ層上面で検出した。　**規模・形状**：北西の開口部側は掘削されて不明ながら、北東－南西方向60～80m、北西－南東方向（調査部分）約80mを測り、長方形に近い形状である。平場は、谷奥側に掘削した溝跡（SD07）とその付近の地山（Ⅵ層）を削平し、発生土を谷状地形の中央部から開口部側に盛土（造成土、Ⅴ１層～Ⅴ28層）して造成されている。したがって、平場の使用面はⅤ層が露出する場所とⅥ層が露出する場所とがある。Ⅴ14層～Ⅴ28層が平場の縁辺部を埋めた土で、縁辺部で最も玉川寄りでは約1.5mの厚さを測る。Ⅴ１層～Ⅴ13層が平坦化するための土である。Ⅴ１・２層は硬化しており、人為的にたたき締めたと判断する。　**遺物出土状況**：礎石建物跡ST01礎石３北側のⅤ８層から内耳鍋（２）が出土した。小破片であるため上層から混入したものと推測する。この土器はST01　P11出土土器やⅣ２層出土土器と接合した。　**時期**：ST01直上に堆積するⅣ層（Ⅳ１・２層）出土遺物から、15世紀中頃には造成されたと判断する。

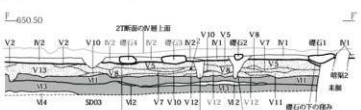
２　礎石建物跡

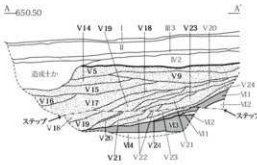
ST01［遺構：第12～15図、PL ４～７、遺物：第26・27・29図、PL13～15］

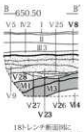
位置：平場の中央部、Ⅰ113・17・18グリッドに位置する。　**検出**：Ⅳ１・２層を除去し、Ⅴ層上面もしくはⅥ層上面で検出した。礎石１・３・４・６～12はⅤ層上面、礎石５はⅥ層上面に乗る。P １～12とSK02・03はⅤ層上面、SK27はⅤ層上面もしくはⅥ層上面で検出したが、断面観察及び埋土の状況から判断して、P11・12やSK02、SK27はⅣ層中から掘り込んでいる。また、礎石２はⅣ１層から掘り込まれたピット内に据えてある。　**規模・形状**：遺存する礎石やピットの配置から、平面が正方形を呈する３間×３間総柱の礎石建物跡と判断した。規模は礎石４と８の間は5.35m、礎石１と４間が4.55m、面積は約10㎡である。建物跡の長辺は北から50°西に傾いているが、これは周囲の地形に因った結果であ

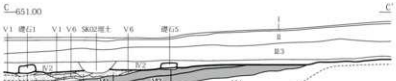


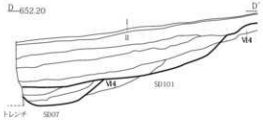
平場の範囲

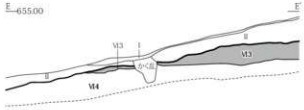










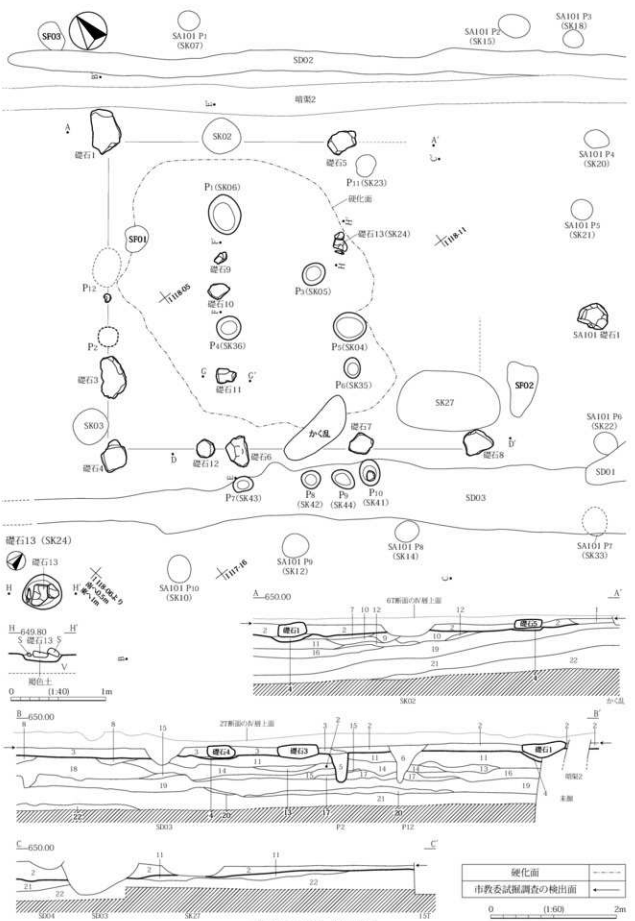


I	10YR2/2	黒褐色土	草木・木根混入　表土
II	10YR3/3		暗褐色土　締まりややあり　粘性なし　φ1～3mm花崗岩粒30%・花崗岩粒ブロック・炭化物混入　全体に暗灰色化　現耕作土(畑地)
III3	10YR3/1	黒褐色土	締まり・粘性なし　φ1～3mm花崗岩粒20%・炭化物粒5%混入　φ5mm礫微量混入　黒色化
IV1	10YR4/4	褐色土	締まり・粘性なし　花崗岩粒多量混入　φ1～3mm花崗岩粒30%・黒褐色土ブロック15%混入
IV2	10YR3/4	暗褐色土	締まりやや弱い　粘性なし　シルト質　暗褐色土主体層　花崗岩粒30%以上・φ1～2mm花崗岩粒20%混入
V1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	締まり強い　粘性なし　黄褐色砂質土主体層　φ1～3mm花崗岩粒30%・黄褐色土粒30%・黒褐色土ブロック5%混入　全体に硬化　人為的にたたき締めた層か
V2	10YR4/6	褐色土	締まり強い　粘性なし　シルト化　黒褐色土ブロック10%・花崗岩粒10%混入　全体に硬化　人為的にたたき締めた層
V3	10YR3/4	暗褐色土	締まり・粘性なし　黄褐色土主体層　黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックの混合層　φ1～3mm花崗岩粒30%混入
V4	10YR3/2	黒褐色土	φ1～3mm花崗岩粒30%・黄褐色土ブロック20%混入
V5	10YR3/3	暗褐色土	締まりあり　部分的に砂質　黄褐色土主体層　部分的に黒褐色土主体層　黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロック混合層　φ1～4mm花崗岩粒30%混入
V6	10YR4/6	褐色土	締まり強い　黄褐色土主体層　φ1～4mm花崗岩粒30%混入　人為的にたたき締めた層か
V8	10YR3/2	黒褐色土	締まり・粘性なし　黒褐色土主体層　花崗岩粒20%・黄褐色土ブロック10%混入　中世陶磁器出土層
V9	10YR4/6	褐色土	締まりあり　粘性なし　シルト質　部分的に砂質　花崗岩風化土が基調　φ1～3mm花崗岩粒20%・崩れた花崗岩粒混入　造成土
V10	10YR4/4	褐色土	やや砂質　黄褐色土主体層　花崗岩粒20%混入　暗褐色土ブロック微量混入
V11	10YR3/2	黒褐色土	締まりあり　粘性なし　φ1～3mm花崗岩粒30%・炭化物粒5%混入　全体に黒褐色化
V12	10YR4/4	褐色土	締まり・粘性なし　黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロック混合層　φ5mm花崗岩粒30%混入
V13	10YR4/6	褐色土	締まり強い　粘性なし　シルト質　φ1～3mm花崗岩粒30%・暗褐色土ブロック20%混入　全体に褐色化
V14	10YR4/4	褐色土	締まりあり　粘性なし　シルト質　部分的に砂質　φ1～3mm花崗岩粒30%・φ5mm礫混入　炭化物粒微量混入
V15	10YR3/4	暗褐色土	締まり強い　粘性なし　シルト質　部分的に砂質　黒褐色土ブロック・褐色土ブロック混合層　φ5mm礫混入
V16	10YR4/3	にぶい黄褐色土	締まりあり　粘性なし　砂質シルト　φ2～4mm花崗岩粒30%・黒褐色土ブロック混入　崩れた花崗岩粒多量混入
V17	10YR4/6	褐色土	締まり・粘性なし　シルト質　粒子細かい　φ3mm礫10%・黒褐色土ブロック2%混入　全体に褐色化
V18	10YR3/2	黒褐色土	締まりあり　粘性なし　シルト質　褐色土ブロック微量混入　全体に黒色化
V19	10YR4/4	褐色土	締まり・粘性なし　砂質　φ1～3mm花崗岩粒20%・黒褐色土ブロック10%・φ5mm礫5%混入　砂質土多量混入
V20	10YR3/2	黒褐色土	崩れた花崗岩粒10%・褐色土ブロック10%・φ5mm礫5%混入　全体に黒色化
V21	10YR4/6	褐色土	締まり・粘性なし　やや砂質　φ5mm礫10%・黄褐色砂質土・黒褐色土混入　全体に褐色化
V22	10YR3/2	黒褐色土	締まりあり　粘性なし　φ1～3mm花崗岩粒20%・褐色土ブロック2%混入　全体に黒色化
V23	10YR3/4	暗褐色土	黒褐色土ブロック・褐色土ブロック混合層　φ1～3mm花崗岩粒20%・φ5mm礫10%混入
V24	10YR4/3	にぶい黄褐色土	締まり・粘性なし　砂質　φ1～3mm花崗岩粒20%・φ5mm礫5%混入　崩れた花崗岩粒多量混入　全体に褐色化
V25	10YR5/3	にぶい黄褐色土	締まりあり　粘性なし　シルト質　基本土層VI4層主体　φ1～3mm花崗岩粒20%混入
V26	10YR5/8	黄褐色土	締まりあり　粘性なし　黄褐色シルト(基本土層VI4層基調)混入
V27	10YR5/4	にぶい黄褐色土	締まりあり　粘性なし　シルト質　黄褐色土(基本土層VI4層)ブロック・黒褐色土(基本土層VI3層)ブロック混合層
V28	10YR3/4	暗褐色土	締まりあり　粘性なし　黒褐色土ブロック・黄褐色土ブロック混入　基本土層VI1層に似るが暗色
VI1	10YR3/2	黒褐色土	締まりあり　粘性なし　炭化物粒5%・褐色土ブロック2%・φ5mm礫2%混入　全体に黒色化
VI2	10YR4/6	褐色土	締まり強い　粘性なし　シルト質　φ1～3mm花崗岩粒20%混入　やや暗色
VI3	10YR3/2	黒褐色土	締まり・粘性あり　シルト　φ5mm礫10%・褐色土ブロック5%混入　全体に黒色化
VI4	10YR4/4	褐色土	締まり強い　粘性ややあり　部分的に粘土質　φ1～5mm花崗岩粒20%混入

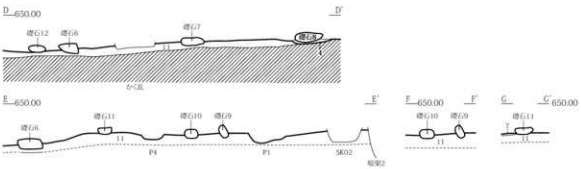
第11図　平場（造成）図

り、谷状地形の傾斜方向に合う。便宜上、谷奥側を東、開口部側を西として記述する。南辺外側に並ぶＰ７～10は出入口に関わる施設を想定したい。東側を除き、礎石１・４・５・７で囲まれた範囲に厚さ３～５㎝の硬化面（Ⅴ１層）が認められるが、硬化面は礎石の真下には及んでいない。なお、硬化面をはいだ面からは遺構は確認されていない。また、Ⅳ１層上面やⅣ層中から掘り込まれた可能性のある礎石２の存在から、建て替えの可能性がある。　**礎石**：大きさはおおむね、長さ30～70㎝、幅20～40㎝、厚さ10～20㎝で、石材は礎石４・８・９が塊状花崗岩、１図緑岩、６細粒閃緑岩、10細粒花崗岩、13不明のほかは片状花崗岩である（註１）。礎石９を除いていずれも上面は水平で、しかも礎石１・４・５・８・13には据え付け痕跡とみられる浅いくぼみがあるため、ほぼ原位置とみてよい。西辺の礎石１・３・４は外側面を揃えている。礎石13は中央の礎石を南北から小ぶりな平石が挟み込んでいる。柱の当たりや墨付けはないが、礎石芯々の柱間は礎石３-４間が1.2m、礎石４-６間が２m、礎石６-７間が２m、礎石７-８間が1.8mである。　**ピット**：検出した位置と礎石との関係から判断して、Ｐ１・４～６・12は建物本体に関係すると考えられる。大きさはおおむね直径30～60㎝の略円形で、P12を除くピットは礎石13が入るくぼみと同様に浅いことから、礎石の据え付け痕跡と判断する。Ｐ７～10は建物本体南面に並行して直線的に並び、かつ南面中央の１間分に位置することから、先述のとおり、出入口施設と考えておく。さらに、Ｐ３・11・SK27も礎石に囲まれた平面に位置するため、建物に関係する何らかの施設と想定しておきたい。　**重複関係**：Ｐ７～10はSD03の底面で確認していることから、SD03は建物の構築時より新しい。また、SK27やSF01は、SD03同様にⅣ層中で確認しているため、いずれも本建物跡の構築時より新しいとみてよい。ただし、Ⅳ層中で検出した礎石２やSK02の存在から明らかなように、本建物跡は建て替えにより一定期間存続しているため、SD03やSK27、SF01が建物の存続期間中あるいは廃絶直後に順次残されていった可能性がある。また、平面的な位置関係や検出面から判断すれば、SA101やSD02、SF02・03も本建物と有機的な関係にある施設と考えられる。　**遺物出土状況**：礎石検出時に礎石１～４間の硬化面（Ⅴ１層）から礫石経の代用品が45点（４～48）出土した。これらは、ST01のなかでも谷状地形の開口部がある西寄りに分布する偏りがみられた（第15図）。ST01が位置するグリッドのⅣ１層から古瀬戸後Ⅲ期の縁釉小皿（13）、古瀬戸後Ⅳ期（新）の平碗（14）、古瀬戸後Ⅲ期の平碗（15）、古瀬戸後Ⅳ期（古）の平碗（16）、Ⅳ２層から14世紀の青磁碗（17）、古瀬戸後期の天目茶碗（管理番号22）、鉄釘（13）、銭貨（23）が出土した。これらは本建物跡に伴うものと考えられる。なお、SD01出土遺物とⅣ２層出土遺物が接合した古瀬戸後期の折縁中皿（５）も本遺構に伴う可能性がある。また、ST01周辺のⅣ層から古瀬戸後Ⅳ期（新）のすり鉢（19）、古瀬戸後Ⅳ期のすり鉢（管理番号46）、古瀬戸の天目茶碗（管理番号52）、大窯１段階のすり鉢（12・管理番号24）、大窯１段階の丸皿（18）、大窯の平碗（管理番号23）と鉄釘６点（14・15・16・17・18・19）が出土しており、これらも本建物跡に伴う可能性がある。また、P11では平面プラン検出面時に古瀬戸後期の平碗（１）と16世紀中頃の内耳鍋（２・３）が出土した。内耳鍋は多くの破片が直径約５㎝の礫とともに重なっており、その上には礎石と思われる平石が設置されている。**時期**：Ⅳ層出土遺物から、15世紀中頃に構築し、16世紀前半に廃絶したと推測する。　**性格**：大規模な造成による平場の中央に建築し、建て替えを経ながら100年弱存続している点から判断して、本建物がこの地域において重要な役割を担っていたことは間違いない。平面が正方形の３間×３間総柱であること、床下の硬化面から礫石経の代用品が出土したことも加味すれば、本建物跡は三間仏堂と考えてよい。Ｐ７～10を出入口としてよければ、建立当初の堂宇は谷の開口部ではなく、南面していたことになる。

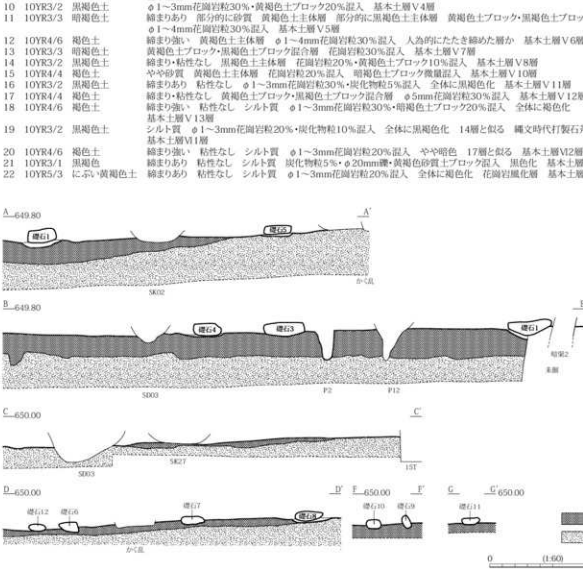
なお、本遺跡の南方に近接する神之峰北中腹遺跡で確認した15世紀代の礎石建物跡（河西ほか2016）は、建立方法や時期、形状が本建物跡と類似することから、堂宇として機能した可能性が高くなった。



第12図　ST01　遺構図１

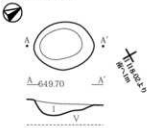


1	10YR3/2	黒褐色土	締まり・粘性なし	わずかに砂質　φ1～2mm花崗岩粒25%・φ3～4mm花崗岩粒15%混入　全体に灰色化 基本土層層3層
2	10YR4/4	褐色土	締まり・粘性なし	花崗岩粒主体層　φ1～3mm花崗岩粒30%・黒褐色土ブロック15%混入　基本土層Ⅳ1層
3	10YR4/3	暗褐色土	締まりややあり	粘性なし　シルト質　暗褐色土主体層　花崗岩粒30%以上・φ1～2mm花崗岩粒20%混入 基本土層Ⅳ2層
4	10YR4/4	褐色土	締まり・粘性なし	暗褐色土主体層　φ1～2mm花崗岩粒20%・黒褐色土ブロック10%混入　礎石の下の盗み
5	10YR5/3	にぶい黄褐色土	締まり・粘性なし	強い砂質　12層土主体層　φ1～3mm花崗岩粒30%・黒褐色土ブロック混入　P2理土
6	10YR3/2	黒褐色土	締まり強い	粘性なし　やや砂質　黒褐色土主体層　φ2～4mm白色土粒40%混入　P12理土
7	10YR4/3	にぶい黄褐色土	締まり強い	粘性なし　黄褐色砂質土主体層　φ1～3mm花崗岩粒30%・黄褐色土粒30%・黒褐色土ブロック5%混入 全体に硬化　人為的にたたき締めた層か　基本土層Ⅴ1層
8	10YR4/6	褐色土	締まり強い	粘性なし　シルト化　黒褐色土ブロック10%・花崗岩粒10%混入　全体に硬化　人為的にたたき締めた層 基本土層Ⅴ2層
9	10YR3/4	暗褐色土	締まり・粘性なし	黄褐色土主体層　黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックの混合層　φ1～3mm花崗岩粒30%混入 基本土層Ⅴ3層
10	10YR3/2	黒褐色土	φ1～3mm花崗岩粒30%・黄褐色土ブロック20%混入　基本土層Ⅴ4層	
11	10YR3/3	暗褐色土	締まりあり	部分的に砂質　黄褐色土主体層　部分的に黒褐色土主体層　黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロック混合層 φ1～4mm花崗岩粒30%混入　基本土層Ⅴ5層
12	10YR4/6	褐色土	締まり強い	黄褐色土主体層　φ1～4mm花崗岩粒30%混入　人為的にたたき締めた層か　基本土層Ⅴ6層
13	10YR3/3	暗褐色土	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロック混合層　花崗岩粒30%混入　基本土層Ⅴ7層	
14	10YR3/2	黒褐色土	締まり・粘性なし	黒褐色土主体層　花崗岩粒20%・黄褐色土ブロック10%混入　基本土層Ⅴ8層
15	10YR4/4	褐色土	やや砂質　黄褐色土主体層　花崗岩粒20%混入　暗褐色土ブロック微量混入　基本土層Ⅴ10層	
16	10YR3/2	黒褐色土	締まりあり　粘性なし	φ1～3mm花崗岩粒30%・炭化物粒5%混入　全体に黒褐色化　基本土層Ⅴ11層
17	10YR4/4	褐色土	締まり・粘性なし	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロック混合層　φ5mm花崗岩粒30%混入　基本土層Ⅴ12層
18	10YR4/6	褐色土	締まり強い	粘性なし　シルト質　φ1～3mm花崗岩粒30%・暗褐色土ブロック20%混入　全体に褐色化 基本土層Ⅴ13層
19	10YR3/2	黒褐色土	シルト質　φ1～3mm花崗岩粒20%・炭化物粒10%混入　全体に黒褐色化　14層と似る　縄文時代打製石斧出土 基本土層Ⅵ1層	
20	10YR4/6	褐色土	締まり強い	粘性なし　シルト質　φ1～3mm花崗岩粒20%混入　やや暗色　17層と似る　基本土層Ⅵ2層
21	10YR3/1	黒褐色	締まりあり	粘性なし　シルト質　炭化物粒5%・φ20mm礫・黄褐色砂質土ブロック混入　黒色化　基本土層Ⅵ3層
22	10YR5/3	にぶい黄褐色土	締まりあり	粘性なし　シルト質　φ1～3mm花崗岩粒20%混入　全体に褐色化　花崗岩風化層　基本土層Ⅵ4層



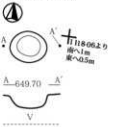
第13図　ST01　遺構図２

ST01 P1（SK06）

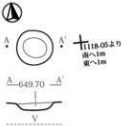


1　10YR6/3　にぶい黄橙色土
締まりあり　粘性なし　砂質
φ2～5mm花崗岩粒30%・
褐色土ブロック10%混入

ST01 P3（SK05）



ST01 P4（SK36）

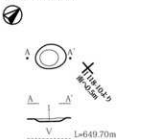


1　10YR4/2　灰黄褐色土
締まり・粘性なし　砂質
わずかにシルト化　粗粒砂主体層
1～2mm花崗岩粒30%・
炭化物粒5%混入
土質は基本土層Ⅳ2層類似

ST01 P5（SK04）

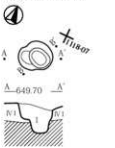
1　10YR4/4　褐色土
締まり強い　粘性ややあり
褐色シルト20%・φ3～5mm
花崗岩粒10%・小礫10%混入

ST01 P6（SK35）



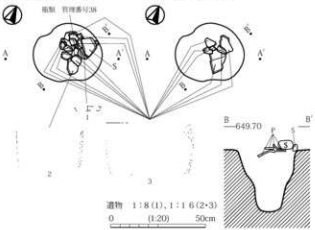
1　10YR4/2　灰黄褐色土
締まり・粘性なし　砂質
わずかにシルト化　粗粒砂主体層
1～2mm花崗岩粒30%・
炭化物粒5%混入
土質は基本土層Ⅳ2層類似

ST01 P11（SK23）

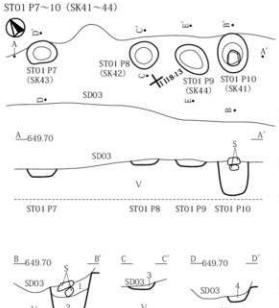


1　10YR3/3　暗褐色シルト
締まりややあり　粘性なし
砂質あびる　φ1～2mm
白色土粒5%・炭化物粒5%・
暗褐色シルト質土混入

遺物出土状況（上面）　遺物出土状況（下面）

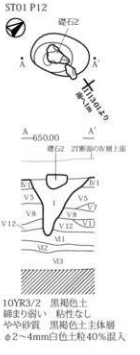


ST01 P7～10（SK41～44）



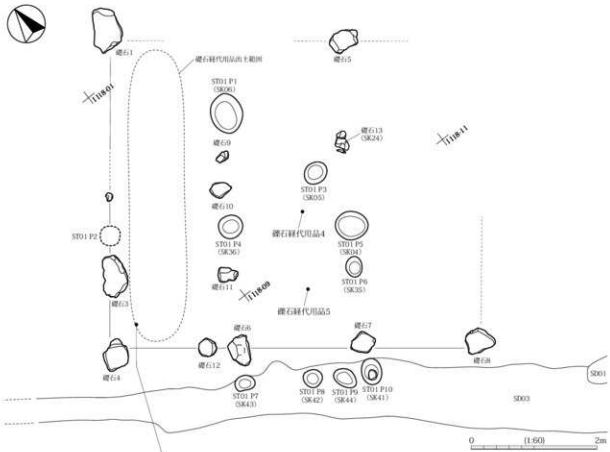
1　10YR4/4　褐色土
締まりあり　粘性なし　褐色土ブロック・
1～2mm花崗岩粒3%混入
2　10YR3/4　暗褐色土
締まり・粘性なし　砂質
φ1～2mm花崗岩粒20%・黄褐色土
ブロック10%混入
3　10YR4/4　褐色土
締まりあり　粘性なし　褐色土ブロック・
φ1～2mm花崗岩粒3%混入
4　10YR4/4　褐色土
締まりあり　粘性なし　褐色土ブロック・
φ1～2mm花崗岩粒3%混入

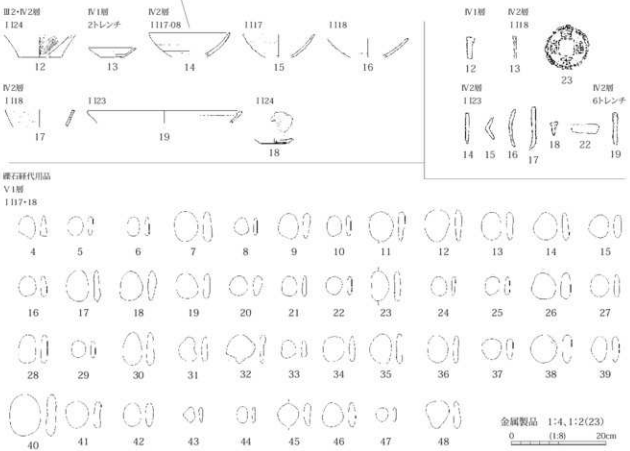
ST01 P12



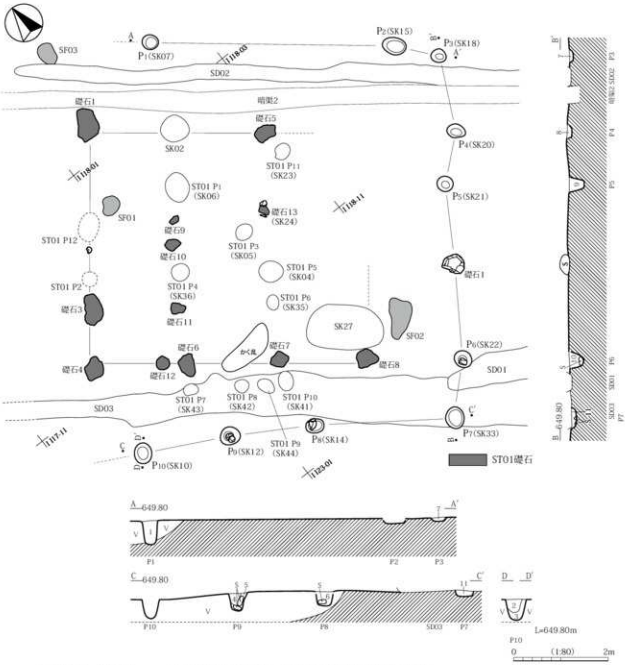
1　10YR3/2　黒褐色土
締まり強い　粘性なし
やや砂質　黒褐色土主体層
φ2～4mm白色土粒40%混入

第14図　ST01　ピット





第15図　Ⅳ層・Ⅴ層遺物出土状況図



1	10YR3/4	暗褐色土	締まりややあり　粘性なし　橙色土ブロック5％・花崗岩粒5％混入
2	10YR4/4	褐色土	締まりあり　粘性ややあり　φ1～3mm花崗岩粒3％混入　上部に黒褐色土分布
3	10YR4/4	褐色土	締まりあり　粘性ややあり　φ1～3mm花崗岩粒3％混入
4	10YR4/3	にぶい黄褐色土	締まり弱い　粘性なし　砂質　黒褐色土ブロック20％混入　柱痕跡
5	10YR4/4	褐色土	締まり・粘性なし　砂質　小礫30％・褐灰色土ブロック30％・炭化物混入
6	10YR4/3	にぶい黄褐色土	締まり弱い　粘性なし　砂質　黒褐色土ブロック20％・φ1～3mm花崗岩粒3％混入
7	10YR4/3	にぶい黄褐色土	締まり弱い　粘性ややあり　砂質　φ1～3mm花崗岩粒20％・小礫20％混入
8	10YR3/3	暗褐色土	締まりあり　粘性ややあり　砂質　褐色土ブロック5％(下部に多く分布)・φ1～3mm花崗岩粒1％混入
9	10YR4/3	にぶい黄褐色土	締まりややあり　粘性なし　砂質　褐色土ブロック10％・φ1～3mm花崗岩粒5％(下部に多く分布)混入
10	10YR3/4	暗褐色土	締まり・粘性ややあり　褐色土ブロック10％・φ1～3mm花崗岩粒5％混入
11	10YR4/4	褐色土	締まりあり　粘性なし　褐色土ブロック・φ1～2mm花崗岩粒3％混入

第16図　SA101　遺構図

３　柵列

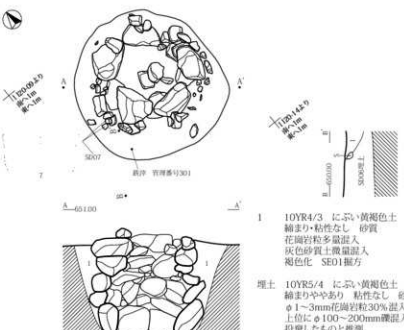
SA101［遺構：第16図、PL ７］

位置：Ⅰ113・17・18・23グリッド。平場の中央部に位置し、ST01に近接する。　**検出**：Ⅳ層をはいだⅤ層もしくはⅥ層で検出した。Ｐ１・８・９・10はⅤ層上面、Ｐ５・６・７はⅥ１層上面もしくはⅥ３層上面、Ｐ２・３・４はⅥ４層上面で検出した。　**規模・形状**：10基のピット（Ｐ１～10）と礎石１基（礎石１）で構成される。Ｐ６・８・９の底部には礎板石が設置されており、Ｐ９では柱痕跡を確認した。各ピットの規模・形状は第９表を参照。平面形はコ字形を呈し、ST01の周囲三方に配置する。ST01との距離（ST01礎石中央と本遺構のピット中央で計測）は、北面（Ｐ１～３）が1.6m、東面（Ｐ３～７）1.6m、南面（Ｐ７～10）1.4～1.8mを測り、三方ともST01とほぼ等間隔である。規模は、北面（Ｐ１～３）が5.75m、東面（Ｐ３～７）7.25m、南面（Ｐ７～10）6.25mで、北面と南面のピットは直線的に並ぶが、東面のピットは細かく蛇行する。柱間は、Ｐ１～２間5.18m、Ｐ２～３間85cm、Ｐ３～４間1.62m、Ｐ４～５間1.14m、Ｐ５～礎石１間1.68m、礎石１～Ｐ６間2.02m、Ｐ６～７間1.27m、Ｐ７～８間2.98m、Ｐ８～９間1.8m、Ｐ９～10間1.88mである。　**埋土**：Ｐ１～８は単層、Ｐ９・10は２層に分層した。　**重複関係**：Ｐ６はSD01に、Ｐ７はSD03に切られる。　**出土遺物**：なし。　**時期**：本遺構の上部にⅣ層が堆積することから、15世紀中頃～16世紀中頃と推測する。　**性格**：位置関係から、ST01を囲む柵列と推測する。

４　井戸跡

SE01［遺構：第17図、PL ８・９、遺物：第26図、PL13・15］

位置：Ⅰ120グリッド。平場の東側谷奥部にある。　**検出**：SD06・07検出時に人頭大の礫がまとまって出土したため精査した結果、面を内側に揃えた五角形の井戸であることを確認した。また、礫の外側で掘り込みのプランを確認した。　**規模・形状**：平面は五角形を呈する石組み井戸跡で、規模は長辺1.63m、短辺1.6m、検出面から底面までの深さは1.1mを測る。底面から検出面までほぼ垂直に石積が施されている。底面近くと最上段の石には比較的大きな礫を用いている。底面は平坦である。　**埋土**：検出面から約20cm下方までは単一層で、にぶい黄褐色土が堆積する。径５～10cmの礫が隙間なく多量に混入していることから、投棄されたものと推測する。　**掘方**：平面形は円形で、花崗岩粒が多量混入するにぶい黄褐色土が堆積する。　**重複関係**：SD06・07を切る。　**遺物出土状況**：石組みの間から16世紀前半の内耳鍋（７）、常滑の甕（管理番号36）、大窯の



第17図　SE01　遺構図

平碗（管理番号37）、鉄滓（炉内滓）（管理番号301）が出土した。内耳鍋はSD07出土遺物と接合している。**時期**：出土遺物と他遺構との重複埋土の堆積状況から、ST01と共存し、16世紀前半には埋め戻されたものと推測する。

５　溝跡

SD01［遺構：第18～20図、PL ７、遺物：第26・29図、PL13・15］

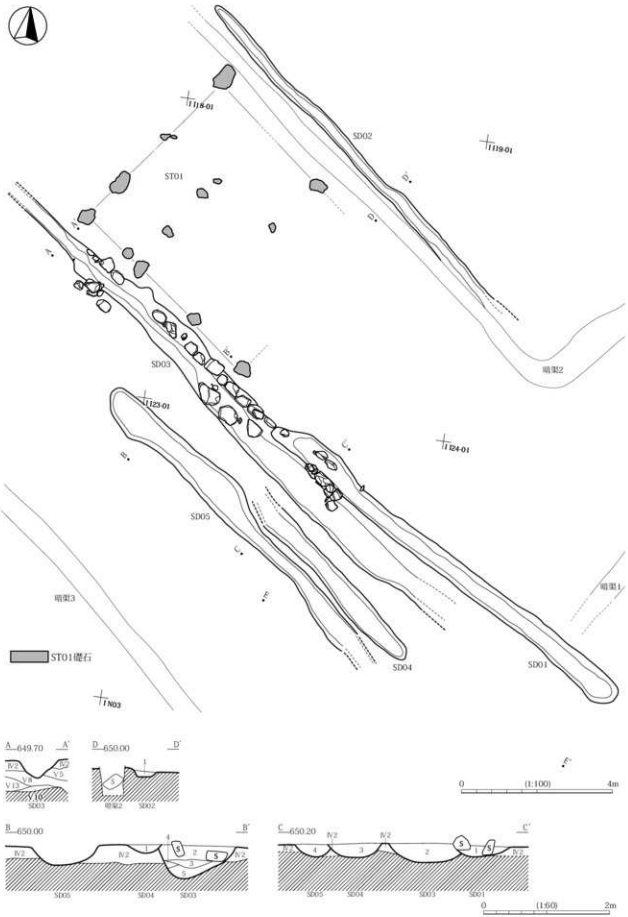
位置：Ⅰ I23・24グリッド。平坦地１の中央部やや南側に位置する。　**検出**：本遺構に伴う石列と平面プランはⅥ４層上面で検出したが、トレンチの土層断面観察で、Ⅳ２層を掘り込む本遺構の存在が確認できた。　**規模・形状**：本遺構は谷奥から開口部に向けて直線的に延びる。長さ11.5m、幅80cm、検出面から底面までの深さ20cmを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。先端部には２段の石積が施されている。石積は壁に接する状態で積まれており、裏込め土は確認されない。　**埋土**：単層。地山の礫が多量混入する砂質の暗褐色土が堆積する。　**重複関係**：SA101 Ｐ６とSD03・07を切る。　**遺物出土状況**：古瀬戸後期の折縁中皿（５）、大窯の丸碗（管理番号５）、中世の壺と推測する破片（管理番号40）、古瀬戸の壺類（管理番号42）、古瀬戸後Ⅳ期～大窯のすり鉢（管理番号39）、17世紀前半のすり鉢（管理番号41）、鉄釘（１）が出土した。折縁中皿（５）はST01が位置するⅣ２層（Ⅰ I17グリッド）出土遺物と接合しており、古瀬戸後Ⅳ～大窯のすり鉢（管理番号39）はⅢ層出土遺物と接合している。前者はST01に伴う可能性がある。　**時期**：Ⅳ２層を掘り込むことから、16世紀中頃以降と推測する。

SD02［遺構：第18・19図］

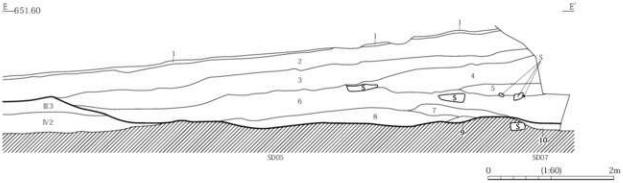
位置：Ⅰ I13・18・19グリッド。平坦地１の中央部やや北側に位置する。　**検出**：Ⅳ２層の精査では、平面プランを捉えることができなかった。本遺構と並走する暗渠２の深さと暗渠に設置された礫の状況を確認するためにトレンチを掘削した際、本遺構の存在を確認した。本遺構の平面プランはⅤ層上面もしくはⅥ１・３・４層上面で確認した。　**規模・形状**：本遺構は谷奥から開口部に向けて直線的に延びる。長さ10.7m（現存）、幅80cm、検出面から底面までの深さ10cmを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。ST01の北側長辺と約１m間隔で平行する。　**埋土**：単層。Ⅲ３層を基調とした黒褐色土が堆積する。　**重複関係**：暗渠２に切られ、SF03を切る。　**出土遺物**：なし。　**時期**：他遺構との重複関係から16世紀中頃以降と推測する。

SD03［遺構：第18～20図、PL ７・８、遺物：第26・29図、PL13・15］

位置：Ⅰ I17・18・23・24グリッド。平坦地１の中央部やや南側に位置する。　**検出**：Ⅳ２層の掘り下げ前に掘削したトレンチの断面観察で、Ⅳ２層を掘り込む本遺構の存在を確認したが、本遺構の平面プランは、西側がⅤ層上面、東側はⅥ１・３・４層上面で確認した。　**規模・形状**：本遺構は谷奥から開口部に向けて直線的に延びる。長さ14.8m（現存）、幅１m、検出面から底面までの深さ50cmを測る。底面は、西側がやや尖底、東側がほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。本遺構には、縁辺部に石列が設置されており、特にST01がある北側は長方形の石を本遺構の内側に面をそろえて設置されている。石列には裏込め石は確認されない。また、石列が確認されない場所のなかには、上端が外側（ST01側）に半円形に突出する箇所がある。この突出部は、ST01の出入口と推測した礎石６・７間にある。**埋土**：４層に分層した。下層に黒褐色土と褐色土ブロック混合層（５）、中層に砂質の褐色土（３）とにぶい黄褐色土（２）が堆積する。３層堆積後に石列が設置される。　**重複関係**：SD01・04に切られる。ST01とＰ７～10、SA101 Ｐ７を切る。　**遺物出土状況**：１層より古瀬戸後期の卸皿（６）、２層より大窯



第18図　SD01～05　遺構図１



B-B'
1　10YR3/2　黒褐色土　締まり・粘性なし
　φ1～3mm花崗岩粒20%・炭化物粒5%混入　SD04埋土
　基本土層Ⅲ層基調土
2　10YR4/3　にぶい黄褐色土　締まり・粘性なし　砂質
　部分的にシルト化　φ1～2mm花崗岩粒20%混入
　全体に色調にぶい　SD03埋土
3　10YR4/6　褐色土　砂質　細粒砂主体層
　φ1～2mm花崗岩粒20%・川原砂混入　SD03埋土
4　10YR4/3　にぶい黄褐色土　締まり・粘性なし　シルト化
　φ1～2mm花崗岩粒20%・砂混入　SD03埋土
5　10YR3/4　暗褐色土　締まり・粘性なし　黒褐色土主体層
　黒褐色土ブロック・褐色土ブロック混合層
　φ1～3mm花崗岩粒20%混入　SD03埋土

C-C'
1　10YR3/4　暗褐色土　締まり・粘性なし　砂質
　φ1～3mm花崗岩粒30%・暗褐色シルト混入
　粗粒砂・φ5mm地山粒多量混入　全体に暗色　SD01埋土
2　10YR4/3　にぶい黄褐色土　締まり・粘性なし　砂質
　φ1～3mm花崗岩粒30%以上混入
　粗粒砂・細粒砂・φ5mm地山粒多量混入　SD03埋土
3　10YR4/4　褐色土　締まりややあり　粘性なし　砂質
　暗褐色土主体層　φ1～3mm花崗岩粒30%・φ5mm地山粒5%・
　黄褐色土ブロック5%混入　SD04埋土
4　10YR4/6　褐色土　締まり・粘性なし　砂質
　φ1～3mm花崗岩粒30%・φ5mm地山粒10%・粗粒砂3%混入
　SD05埋土

D-D'
1　10YR3/2　黒褐色土　締まり・粘性なし　やや灰色化
　SD02埋土　基本土層Ⅲ3層基調土

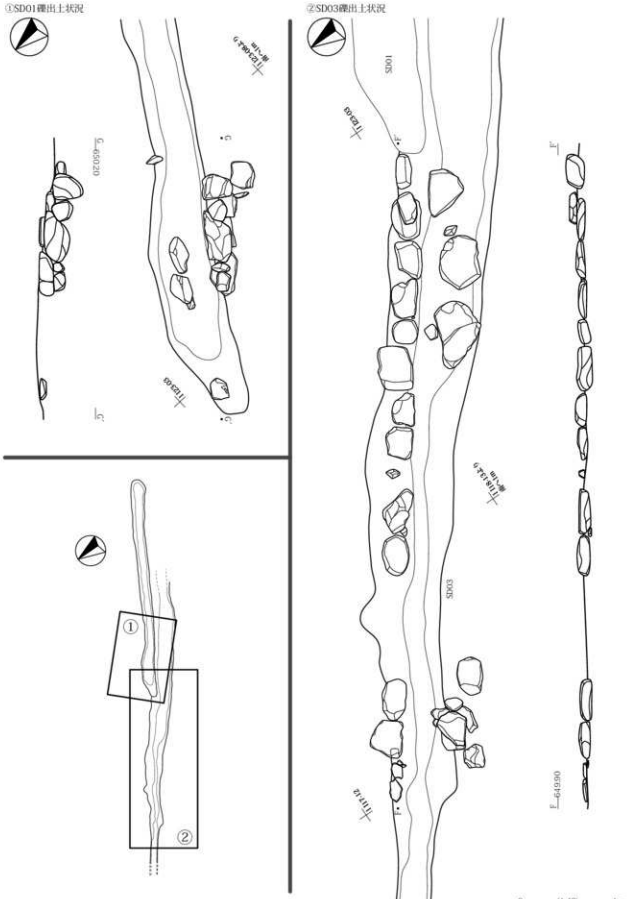
E-E'
1　10YR3/2　黒褐色土　草木・木根多量混入　表土　基本土層Ⅰ層
2　10YR3/4　暗褐色土　締まり・粘性なし
　φ1～2mm花崗岩粒30%・黄褐色土ブロック10%混入
　全体に暗褐色化　現耕作土(畑地)　基本土層Ⅱ層
3　10YR4/3　にぶい黄褐色土　締まり・粘性なし　砂質
　φ1～3mm花崗岩粒20%・木根混入　黄褐色土ブロック微量混入
　土質は2層に似る　SD05埋土
4　10YR4/4　褐色土　締まりあり　粘性弱い　シルト質　粒子細
　φ1～3mm花崗岩粒20%・こぶし大～人頭大礫混入　SD05埋土
　φ4mm礫微量混入　φ2～4mm酸化鉄粒子散在　全体に暗灰色化
5　10YR4/4　褐色土　締まり・粘性なし　砂質
　φ1～2mm花崗岩粒25%混入　酸化鉄集積あり　SD05埋土
6　10YR4/3　にぶい黄褐色土　締まりややあり　粘性なし
　φ1～2mm花崗岩粒25%・黄褐色シルト質土混入　酸化鉄集積あり
　SD05埋土
7　10YR4/4　褐色土　締まりあり　粘性なし　砂質　シルト化
　φ1～2mm花崗岩粒20%・炭化物混入　酸化鉄集積あり　SD05埋土
8　10YR3/4　暗褐色土　締まり・粘性なし　砂質
　φ1～2mm花崗岩粒多量混入　4層土ブロック混入
　酸化鉄集積あり　全体に暗色　SD05埋土
9　10YR3/2　黒褐色土　締まりややあり　粘性なし　炭化物層
　暗褐色土混入　SD05埋土
10　10YR4/4　褐色土　締まりあり　粘性なし
　褐色シルト・黄褐色シルト主体層　φ1～2mm粗粒砂多量混入
　酸化鉄集積あり　SD07埋土

第19図　SD01～05　遺構図２

の丸碗（管理番号８）、埋土より鉄釘（２、３、４）、鉄滓（流動滓）（管理番号304）が出土した。卸皿（６）はⅢ層出土土器と接合している。　**時期**：出土遺物と他遺構との重複、Ⅳ２層に伴うことから、16世紀中頃と推測する。　**性格**：石列は、設置状況からST01がある北側を意識して設置した護岸石と推測する。この突出部はST01の出入口と推測した礎石６・７間にあることから、Ⅳ層堆積後に継承されたST01の出入口施設と推測する。

SD04［遺構：第18・19図、PL ７］

位置：Ⅰ 123グリッド。平坦地１の中央部やや南側、SD03の南西側に位置する。　**検出**：Ⅳ２層の掘り下げ前に、本遺構に直交する方向にトレンチを複数掘削した際、断面でⅣ２層を掘り込む本遺構の存在を確認した。平面プランはⅥ４層上面で確認した。　**規模・形状**：SD03と平行して直線的に延びる。長さ5.15m（現存）、幅80cm、検出面から底面までの深さ25cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、細かな凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がる。　**埋土**：単層。砂質の褐色土が堆積する。　**重複関係**：SD03・05を切る。　**出土遺物**：なし。　**時期**：他遺構との重複関係から16世紀中頃以降と推測する。

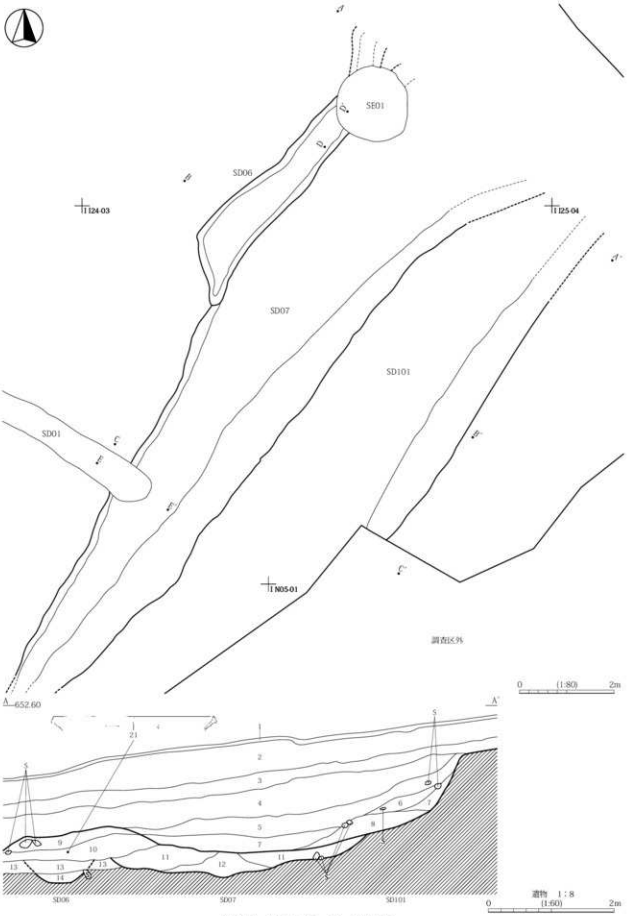


第20図　SD01・03　礫出土状況図

SD05［遺構：第18・19図、PL ７］
位置：Ⅰ I17・22・23グリッド。平坦地１の中央部やや南側、SD04の南側に位置する。　検出：表土はぎ前のトレンチ調査で掘削した６トレンチ断面で、Ⅲ層を掘り込む溝状の落ち込みを確認した。落ち込み確認地点と面調査で確認された本遺構の平面プランとを照合した結果、本遺構の落ち込みであることを確認した。平面プランはⅤ層上面もしくはⅥ層上面で確認した。　規模・形状：SD04と平行して直線的に延びる。長さ９m（現存）、幅１m、検出面から底面までの深さ25cmを測るが、Ⅲ層から底面までは60cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。　埋土：７層に分層した。本遺構の長辺方向の断面（第19図）では、谷奥側から開口部側に堆積した状況を確認した。６～８層では酸化鉄集積が認められたことから、３～５層堆積時は滞水した可能性がある。　重複関係：SD04に切られ、SK28を切る。　出土遺物：なし。　時期：Ⅲ層の堆積時期は不明であるが、Ⅳ２層を掘り込む遺構の時期から16世紀中頃以降と推測する。

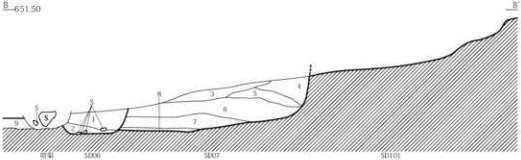
SD06［遺構：第21・22図、PL ８］
位置：Ⅰ I19・20・24・25グリッド。平場の東側、谷奥に近い場所に位置する。検出：３トレンチ断面で確認した灰黄褐色土（第21図10層）をはいだ面での遺構検出で、SD07と重複する本遺構の平面プランを確認した。　規模・形状：本遺構は谷状地形の傾斜に直交方向に延びる。長さ4.7m（現存）、幅1.1m、検出面から底面までの深さは36cmを測る。南側の先端は、SD07と接する付近が突出する形状を示す。壁は、本遺構中央部はほぼ垂直に立ち上がるが、北側は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、細かな凹凸がある。　埋土：２層に分層した。上層（第22図１層）には砂質を帯びるにぶい黄褐色土、下層（同２層）には砂層が混入するにぶい黄褐色土が堆積する。本遺構の上部に堆積する灰黄褐色土（第21図10層）は、Ⅳ層が湧水により変色したものと推測する。　重複関係：SE01・SD101に切られ、SD07を切る。　出土遺物：なし。　時期：他遺構との重複から、16世紀前半以降と推測する。

SD07［遺構：第21・22図、PL ８、遺物：第26・29図、PL13・15］
位置：Ⅰ I20・24・25、Ⅰ N04グリッド。平場の東側、谷奥に近い場所に位置する。　検出：表土はぎに先行して掘削した３トレンチ断面で本遺構の存在を確認し、本遺構埋没後に SD101が構築されていることを確認した。SD101調査後に実施した平面調査では、本遺構の南側上端は埋土と SD101底面に露出したⅥ４層との境界が把握できたが、北側上端は把握できなかった。さらに下げてⅥ４層上面で確認した。　規模・形状：本遺構は谷状地形の傾斜に直交方向に延びる。長さ13m（現存）、幅（中心幅）2.8m、検出面から底面までの深さ60cmを測る。南側は幅が狭く、北側にいくにしたがって幅広となる。底面は中央部がやや低く、南から北に緩やかに傾斜する。　埋土：場所によって堆積状況が異なるが、３～６層に分層した。花崗岩が風化した褐色土や灰色シルトブロックが混入する暗褐色土が堆積する。
重複関係：SD01・06・101、SE01に切られる。　遺物出土状況：16世紀前半の内耳鍋（７）、大窯の平碗（管理番号10）、古瀬戸後Ⅳ期のすり鉢（管理番号43）、鉄釘（５・６）が出土した。内耳鍋は、SE01、ST01 P11、Ⅳ層出土遺物と接合している。　時期：出土遺物と他遺構との重複から16世紀前半と推測する。　性格：本遺構は平場のなかで最も谷奥側に位置し、形状が不整形であることから、平場形成に伴う掘削痕跡と推測した。さらに、谷奥からの湧水が激しく、発掘時、本遺構内を常時水が流れていた。開口部側への湧水の流出を防ぎ、北側に排水する目的をも具備したものと推測する。

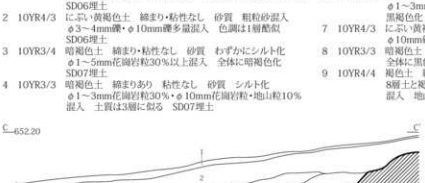


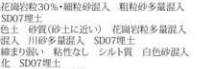
第21図　SD06・07・101　遺構図１

A-A′
1　10YR3/2　黒褐色土　草本・木根多量混入　表土　基本土層Ⅰ層
2　10YR3/4　暗褐色土　締まり・粘性なし　砂質
φ1～3mm花崗岩粒20%混入　木根多量混入　現耕作土(畑地)
基本土層Ⅱ層
3　10YR3/2　黒褐色土　締まり・粘性なし　やや砂質
φ1～3mm花崗岩粒25%・炭化物粒5%混入　木根多量混入
全体に黒色化　基本土層Ⅲ2層
4　10YR3/4　暗褐色シルト　締まり・粘性なし　花崗岩風化層が主体
φ1～3mm花崗岩粒20%混入
5　10YR3/3　暗褐色シルト　締まりあり　粘性なし　花崗岩風化土が主体
土質は4層に似るが暗色　SD101埋土
6　10YR3/4　暗褐色土　締まりあり　粘性なし　花崗岩風化層主体
φ1～5mm花崗岩粒30%・礫混入　土質は4層に似る　SD101埋土
7　10YR4/4　褐色土　締まり弱い　花崗岩粒多量混入　褐色土ブロック混入　SD101埋土
8　10YR3/4　暗褐色土　締まり・粘性なし　花崗岩風化土が主体
φ1～3mm花崗岩粒50%・暗褐色土混入　SD101埋土
9　10YR5/4　にぶい黄褐色土　締まり・粘性なし　砂質
花崗岩粒主体層　φ1～3mm花崗岩粒30%以上・炭化物粒5%混入
黄褐色砂質土多量混入　SD07埋土
10　10YR5/2　灰黄褐色土　締まり・粘性なし　砂質
φ1～3mm花崗岩粒30%・炭化物5%混入　Ⅳ層土が水分で灰色化した土か
11　10YR3/2　黒褐色土　締まりあり　粘性なし　下部は砂質
花崗岩風化層主体層　φ1～3mm花崗岩粒30%混入　SD07埋土
12　10YR3/4　暗褐色シルト　灰色シルトブロック混入
土質は11層に似る　SD07埋土
13　10YR4/4　褐色土　締まり・粘性なし　砂質
10層土と褐色砂質土の混合層　φ1～3mm花崗岩粒30%混入
地山粒多量混入
14　10YR4/3　にぶい黄褐色土　締まり・粘性なし　砂質
φ1～3mm花崗岩粒・地山粒多量混入　全体に暗灰色化　SD06埋土



B-B′
1　10YR4/3　にぶい黄褐色土　締まり・粘性なし　砂質
φ1～4mm花崗岩粒30%・φ10mm地山粒10%・
炭化物粒5%混入　全体に灰色　水の影響によるグライ化か
SD06埋土
2　10YR4/3　にぶい黄褐色土　締まり・粘性なし　砂質　粗粒砂混入
φ3～4mm礫・φ10mm礫多量混入　色調は1層酷似
SD06埋土
3　10YR3/4　暗褐色土　締まり・粘性なし　砂質　わずかにシルト化
φ1～5mm花崗岩粒30%以上混入　全体に暗褐色化
SD07埋土
4　10YR3/3　暗褐色土　締まりあり　粘性なし　砂質　シルト化
φ1～3mm花崗岩粒30%・φ10mm花崗岩粒・地山粒10%
混入　土質は3層に似る　SD07埋土
5　10YR4/4　褐色土　砂質　第1～2mm花崗岩粒30%・φ20mm地山粒
混入　明色　SD07埋土
6　10YR3/2　黒褐色土　締まり・粘性なし　砂質
φ1～3mm花崗岩粒30%・細粒砂混入　粗粒砂多量混入
黒褐色化　SD07埋土
7　10YR4/3　にぶい黄褐色土　砂質(砂土に近い)　花崗岩粒多量混入
φ10mm礫混入　川砂多量混入　SD07埋土
8　10YR3/3　暗褐色土　締まり弱い　粘性なし　シルト質　白色砂混入
全体に黒色化　SD07埋土
9　10YR4/4　褐色土　締まり・粘性なし　砂質
8層土と褐色砂質土の混合層　φ1～3mm花崗岩粒30%
混入　地山粒多量混入





D-D′
1　10YR5/3　にぶい黄褐色土
締まり・粘性なし　砂質
φ1～3mm花崗岩粒30%・粗粒砂30%混入
グライ化　全体に灰色化　SD06埋土

E-E′
1　10YR4/3　にぶい黄褐色土
締まりあり　粘性なし　砂質
φ2～5mm地山粒・黄褐色土ブロック・
褐色土ブロック混入　SD07埋土

C-C′
1　10YR3/2　黒褐色土　草本・木根多量混入　表土　基本土層Ⅰ層
2　10YR3/4　暗褐色土　締まりあり　粘性なし
φ1～3mm花崗岩粒20%混入　全体に暗褐色化　現耕作土(畑地)
基本土層Ⅱ層
3　10YR4/3　にぶい黄褐色土　締まりあり　粘性なし
φ1～3mm花崗岩粒25%・炭化物粒5%・黄褐色土ブロック混入
やや明色　SD101埋土
4　10YR4/4　褐色土　締まりあり　粘性なし　粒子細かい
φ1～2mm花崗岩粒20%・φ5mm花崗岩粒20%・炭化物粒5%混入
SD101埋土
5　10YR3/3　暗褐色土　締まりややあり　粘性なし
φ1～2mm花崗岩粒20%・φ10mm礫5%・褐色土ブロック混入
SD101埋土
6　10YR4/6　褐色土　締まりあり　粘性なし　褐色土主体層
φ1～3mm花崗岩粒30%・φ10～20mm礫10%混入　SD101埋土
7　10YR3/4　暗褐色土　締まりあり　粘性なし　シルト質　粒子細かい
φ1～2mm花崗岩粒15%混入　土質は5層に似る　SD07埋土
8　10YR5/4　にぶい黄褐色土　締まり・粘性なし　砂質
φ1～2mm花崗岩粒15%・炭化物5%・礫・褐色土ブロック混入
粗粒砂多量混入　全体に褐色化　SD07埋土
9　10YR4/6　褐色土　締まり・粘性なし　砂質
φ1～2mm花崗岩粒20%・φ2～3mm白色土粒15%・
花崗岩粒ブロック10%・暗褐色土ブロック10%・φ10mm礫5%混入
SD07埋土

第22図　SD06・07・101　遺構図２

SD101［遺構：第21・22図、PL ８］

位置：Ⅰ I24・25、Ⅰ N04・05グリッド。平坦地１の南東側、谷奥に近い場所に位置する。SD07と重なり合いながら平行する。　**検出：**SD07と同様である。　**規模・形状：**SD07と同様で、谷状地形の傾斜に直交方向に延びる。長さ7.3m（現存）、幅5.3m、検出面から底面までの深さ70cm（現存）を測る。南側は平面プランを捉えることができたが、北側は検出面の土層と埋土が酷似しており、平面的に捉えることはできなかった。　**埋土：**場所によって堆積状況に異なりがあるが、３～６層に分層した。３トレンチ（第21図）と６トレンチ（第22図）の断面によると、本遺構は東側の壁際に褐色土や花崗岩粒を多く含む土が堆積し、その上層には花崗岩風化層を基調とした土が２～３層堆積して埋没したことがわかる。　**重複関係：**SD06・07を切る。SE01と重複すると推測するが、新旧関係は不明である。　**出土遺物：**なし。　**時期：**他遺構との重複関係と、本遺構の上部にⅢ層が堆積することから、16世紀代と推測する。**性格：**谷奥付近に掘削した地山の掘削痕跡と推測する。

６　焼土跡

SF01［遺構：第23図、PL10］

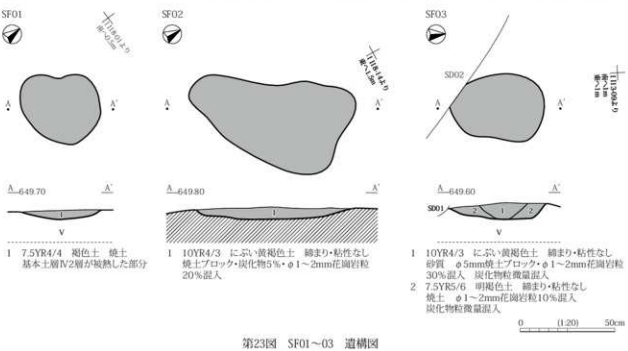
位置：Ⅰ I18-01グリッド。ST01の中に位置する。　**検出：**Ⅳ１層で本遺構の存在を確認した。　**規模・形状：**長辺42cm、短辺39cmで円形に近い。最も厚い被熱部分は５cmを測る。　**重複関係：**下部に ST01の硬化面（Ⅴ１層）がある。　**出土遺物：**なし。　**時期：**検出面から、16世紀中頃～末頃と推測する。

SF02［遺構：第23図、PL11］

位置：Ⅰ I18-14グリッド。SK27に近接する。　**検出：**Ⅳ１層で本遺構を確認した。　**規模・形状：**長辺88cm、短辺49cmの不整形で、最も厚い被熱部分は６cmを測る。　**重複関係：**なし。　**出土遺物：**なし。**時期：**Ⅳ１層に伴うことから、16世紀中頃～末頃と推測する。

SF03［遺構：第23図、PL11、遺物：PL13］

位置：Ⅰ I13-09グリッド。ST01の北側に位置する。　**検出：**Ⅳ１層上面をやや下げて本遺構を確認し



第23図　SF01～03　遺構図

た。**規模・形状**：長辺50cm、短辺35cmで楕円形に近い。最も厚い被熱部分は８cmを測る。　**埋土（被熱部分）**：２層に分層した。１層は焼土ブロックと炭化物粒が混入するにぶい黄褐色土、２層は焼土である。　**重複関係**：SD02に切られる。　**遺物出土状況**：16世紀中頃の内耳鍋（管理番号11）が出土した。**時期**：出土遺物とⅣ１層に伴うことから、16世紀中頃～末頃と推測する。

７　土坑

SK02［遺構：第24図］

位置：Ⅰ I18-02グリッド。平坦地１のほぼ中央部にある。　**検出**：ST01の礎石列に沿って掘削したトレンチの精査で確認した。平面検出はⅤ層上面で行った。　**規模・形状**：長辺60cm、短辺58cmの円形を呈する。深さは18cmを測る。底面は平坦で壁面は緩やかに立ち上がる。　**埋土**：単層で、褐色土ブロックが混入する黒褐土が堆積する。黒色化したⅢ３層を基調とした土である。　**重複関係**：ST01を切る。**出土遺物**：なし。　**時期**：出土遺物はないが、埋土から、16世紀中頃以降と推測する。　**性格**：ST01の北面では、礎石１と礎石５の間に礎石が確認されていない。本遺構は礎石が存在した位置にあることから、礎石を抜き取る際に掘削した穴と推測する。

SK03［遺構：第24図、PL ９］

位置：Ⅰ I17-07・08グリッド。平坦地１の西側にある。ST01の西面と近接する。　**検出**：Ⅴ５層上面におけるST01礎石検出時に本遺構の平面プランを確認した。　**規模・形状**：長辺58cm、短辺57cmの円形を呈する。深さは８cmを測る。底面は平坦で壁面は緩やかに立ち上がる。　**埋土**：単層で、褐色土ブロックが混入する黒褐土が堆積する。色調は黒色化し、Ⅲ３層を基調とした土である。　**重複関係**：本遺構はST01の礎石３・４と近接する。礎石の中央に柱が立っていたとすると、本遺構はST01北西面と接するため、ST01を切ると判断する。　**出土遺物**：なし。　**時期**：出土遺物はないが、埋土から、16世紀中頃以降と推測する。

SK16［遺構：第24図］

位置：Ⅰ I18-04、I19-01グリッド。平坦地１の中央部北側、SA101に近接する。　**検出**：Ⅵ４層上面の精査で本遺構の平面プランを確認した。　**規模・形状**：長辺28cm、短辺26cmの円形を呈する。深さは37cmを測る。底部は狭く、壁面は垂直に近い。　**埋土**：単層。褐色土ブロックが混入する黒褐色土が堆積する。土質と色調はⅢ層に酷似する。　**重複関係**：なし。　**出土遺物**：なし。　**時期**：出土遺物はないが、埋土がⅢ層に酷似することから、16世紀中頃以降と推測する。

SK17［遺構：第24図］

位置：Ⅰ I19-01グリッド。SK16に近接する。　**検出**：Ⅵ４層上面の精査で本遺構の平面プランを確認した。　**規模・形状**：長辺44cm、短辺38cmの円形を呈する。深さは11cmを測る落ち込みである。底部はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。　**埋土**：単層。砂質で、黒褐色土ブロックが混入する暗褐色土が堆積する。黒褐色ブロックはⅢ層の可能性が高い。　**重複関係**：なし。　**出土遺物**：なし。　**時期**：出土遺物はないが、埋土にⅢ層の可能性が高い土が含まれていることから、16世紀中頃以降と推測する。

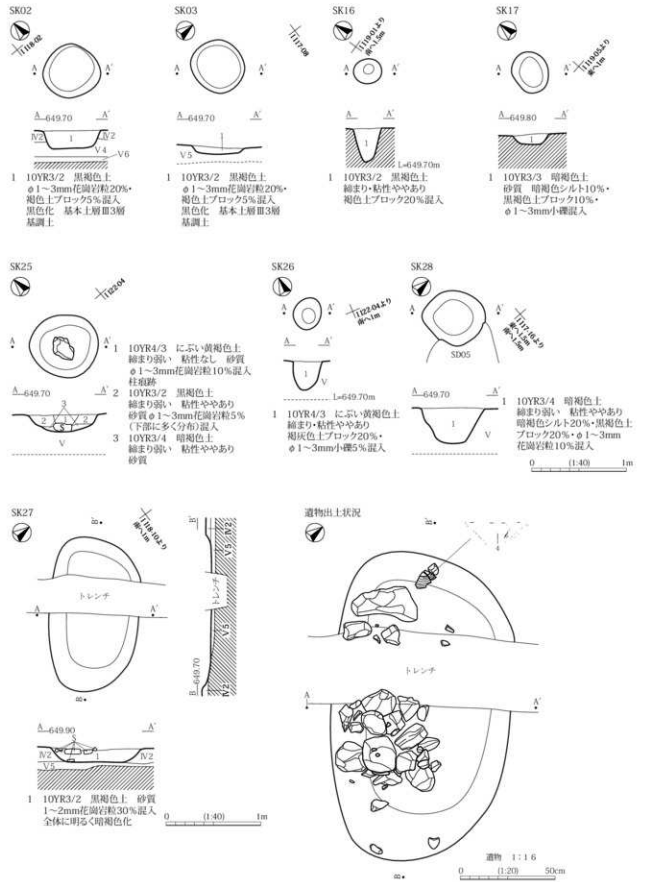
SK25［遺構：第24図、PL ９］
位置：Ⅰ I17-15、Ⅰ I22-03グリッド。SA101の南側に位置する。　検出：Ⅳ層をはいだⅤ層上面において褐色土が落ち込む本遺構の平面プランを確認した。　規模・形状：長辺71cm、短辺66cmの円形を呈し、深さは18cmを測る。底面は中央がやや低まり、礎板石と判断できる扁平な礫が１個設置されている。礎板石の上面では、柱の設置痕跡は確認されない。壁は緩やかに立ち上がる。　埋土：３層に分層した。１層は柱痕跡、２層は柱を固定するための埋土、３層は礎板石を固定するための土と推測する。　重複関係：なし。　出土遺物：なし。　時期：本遺構の上部にⅣ層が堆積することから、15世紀中頃～16世紀前半と推測する。

SK26［遺構：第24図］
位置：Ⅰ I22-03グリッド。SA101の南側に位置する。　検出：Ⅳ層をはいだⅤ層上面においてにぶい黄褐色土が落ち込む本遺構の平面プランを確認した。　規模・形状：長辺35cm、短辺28cmの円形で、深さは30cmを測る。底部が湾曲し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。　埋土：単層。褐灰色土ブロックが混入するにぶい黄褐色土が堆積する。Ⅳ１層もしくはⅣ２層を基調とした土と推測する。　重複関係：なし。　出土遺物：なし。　時期：本遺構の上部にⅣ層が堆積することから、15世紀中頃～16世紀前半と推測する。

SK27［遺構：第24図、PL ９・10、遺物：第26図、PL13］
位置：Ⅰ I18-09・10・13・14グリッド。ST01の礎石８に近接する。　検出：下層の状況を確認するために掘削したトレンチで、本遺構がⅣ２層を掘り込んでいることを確認した。平面検出はST01の礎石検出時に行い、平面プランは東側一角がⅥ１層上面、それ以外がⅤ層上面で確認した。　規模・形状：長辺1.63m、短辺95cmの楕円形で、北西側がやや突出する。深さは15cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、細かな凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がる。　埋土：単層。砂質で黒褐色土が堆積する。埋土上位を中心に拳～小児頭大の礫が多量含まれており、なかには被熱痕跡が確認できる礫がある（註１）。礫には規則的な配列もしくは積まれた状況はみられず、散在する様相を示していることから、投棄されたものと推測した。　重複関係：ST01を切る。　遺物出土状況：古瀬戸後Ⅳ期（新）のすり鉢（４）、15世紀の内耳鍋（管理番号４）が埋土上位から出土した。　時期：出土遺物は15世紀代に比定されるが、Ⅳ２層を掘り込んでいることから、16世紀中頃以降と推測する。

SK28［遺構：第24図］
位置：Ⅰ I17-16、Ⅰ I22-04グリッド。ST01の南側に位置する。　検出：Ⅴ層上面の検出で、本遺構の平面プランを確認した。　規模・形状：長辺66cm、短辺60cmの楕円形。深さは37cmを測る。底面は平坦で、緩やかに立ち上がる。　埋土：単層。黒褐色土ブロックが混入する暗褐色土が堆積する。　重複関係：SD05に切られる。　出土遺物：なし。　時期：本遺構の上部にⅣ層が堆積することから、15世紀中頃～16世紀中頃と推測する。

SK29［遺構：第25図、PL10］
位置：Ⅰ I13-09・10グリッド。平坦地１の中央部北側、SD02の北側に位置する。　検出：Ⅴ層上面においてST01周辺の精査を行った際、褐色土が落ち込む本遺構の平面プランを確認した。西側は平面プランを明瞭に確認することができず、トレンチを掘削した結果、SK37の存在を確認した。　規模・形状：



第24図　SK02・03・16・17・25～28　遺構図

長辺75cm、短辺68cmの円形。深さは40cmを測る。底面はやや湾曲し、壁面は緩やかに立ち上がる。　埋土：単層。砂質の褐色土が堆積する。　重複関係：SK37を切る。　出土遺物：なし。　時期：出土遺物はないため、中世以降としか推測できない。

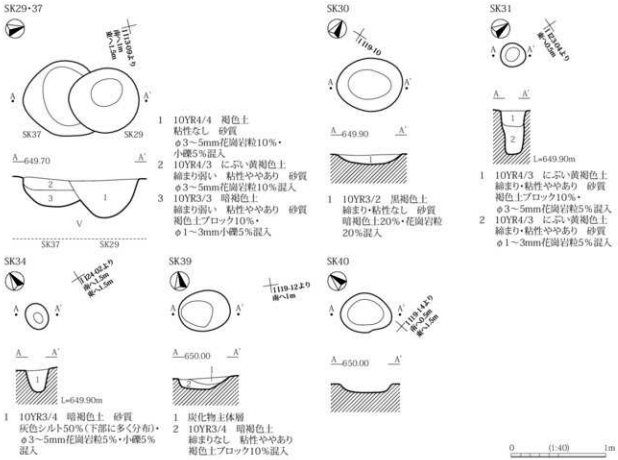
SK30［遺構：第25図、PL10］
位置：Ⅰ I19-10グリッド。平坦地１の北東側、SD02の北東側に位置する。　検出：Ⅵ４層上面の精査で、本遺構の平面プランを確認する。　規模・形状：長辺73cm、短辺56cmの楕円形。深さは10cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。浅く窪む土坑である。　埋土：単層。砂質の黒褐色土が堆積する。Ⅲ層主体層である。　重複関係：なし。　出土遺物：なし。　時期：埋土から、16世紀中頃以降と推測する。

SK31［遺構：第25図］
位置：Ⅰ I23-04グリッド。平坦地１の中央部やや東側、SD01の北側に位置する。　検出：Ⅵ４層上面の精査で、本遺構の平面プランを確認した。　規模・形状：直径26cmの円形で、深さは46cmを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。　埋土：単層。砂質の黒褐色土が堆積する。Ⅲ層を主体とした層である。　重複関係：なし。　出土遺物：なし。　時期：埋土から、16世紀中頃以降と推測する。

SK34［遺構：第25図］
位置：Ⅰ I24-02グリッド。平坦地１の中央部東側、SD01の北側に位置する。　検出：Ⅵ４層上面の精査で、本遺構の平面プランを確認した。　規模・形状：長辺29cm、短辺26cmの楕円形を呈し、深さは24cmを測る。底面はやや平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。　埋土：単層。砂質の暗褐色土が堆積する。　重複関係：なし。　出土遺物：なし。　時期：出土遺物はないため、中世以降としか推測できない。

SK37［遺構：第25図、PL10］
位置：Ⅰ I13-09・10・13・14グリッド。平坦地１の中央部北側、SD02の北側に位置する。　検出：Ⅴ層上面において ST01周辺の精査を行った際、褐色土が落ち込む本遺構を確認した。本遺構の北側の平面プランが不明瞭であったため、この部分を精査したところ、SK29に切られていることを確認した。　規模・形状：長辺80cm、短辺46cm（現存）を測るが、構築時は直径約80cm規模の円形を呈していたと推測する。深さは30cmを測る。底面はほぼ平坦で、現存する壁面は緩やかに立ち上がる。　埋土：２層に分層した。上層には砂質のにぶい黄褐色土、下層には砂質で褐色土ブロックが混入する暗褐色土が堆積する。　重複関係：SK29に切られる。　出土遺物：なし。　時期：出土遺物はないため、中世以降としか推測できない。

SK39［遺構：第25図、PL10］
位置：Ⅰ I19-11グリッド。SD06の西側に位置する。　検出：Ⅵ４層上面で炭化物が多く混入する落ち込みを確認した。周辺を精査したところ、本遺構の平面プランを確認した。　規模・形状：長辺54cm、短辺43cmの楕円形。深さは15cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は東側が緩やか、他３方はほぼ垂直に立ち上がる。　埋土：２層に分層された。上層は炭化物を主体とした層で、下層には暗褐色土が堆積する。　重複関係：なし。　出土遺物：なし。　時期：出土遺物はないため、中世以降としか推測できない。



第25図　SK29～31・34・37・39・40　遺構図

SK40［遺構：第25図、PL10］

位置：Ⅰ19-10・14グリッド。STO1の東側、土坑が散在する場所に位置する。　検出：Ⅵ４層上面において暗褐色土が堆積する落ち込みを確認した。　規模・形状：長辺54cm、短辺41cmの楕円形。深さは10cmを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。　埋土：単層。暗褐色土が堆積する。　重複関係：なし。　出土遺物：なし。　時期：出土遺物はないため、中世以降としか推測できない。

第３節　遺物

１　土器・陶磁器

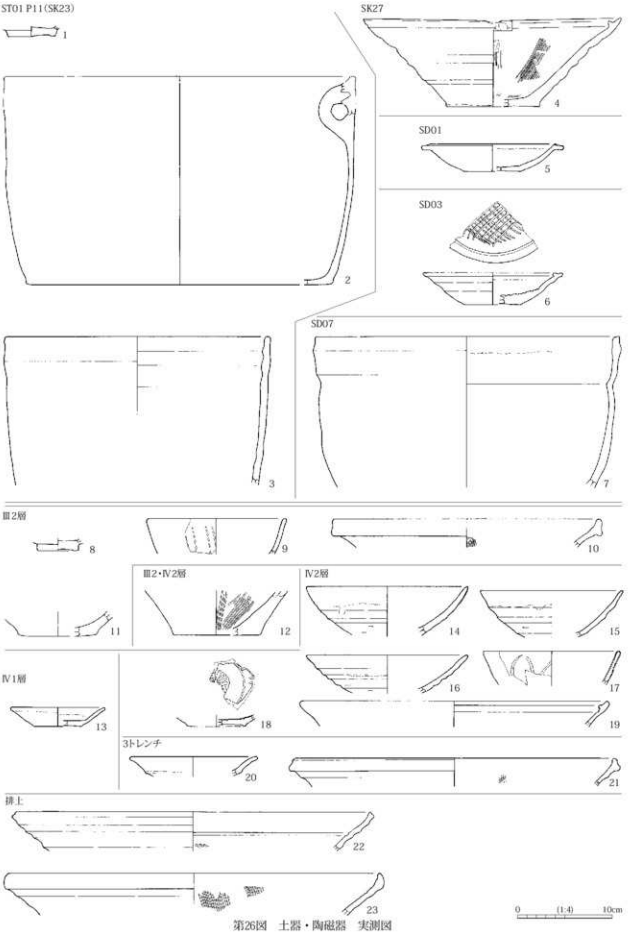
（１）遺構内（１～７）［26図、PL13］

１～３はST01 P11出土遺物である。１は平碗の底部で高台のみ遺存する。底部内面に灰釉が残り、外面には製作時に混入した小石と思われる痕跡が残る。削り出し高台であることから古瀬戸後期と推測する。２・３は内耳鍋である。２は体部がやや丸味を帯びる。口縁部は直立し、端部に丸みをもたせるものである。底部内面が黒色化する。３は体部がほぼ直立し、口縁部付近の外面と内面に輪積痕が残る。２・３は、口縁部が直立することから16世紀中頃に比定する。４はSK27出土のすり鉢である。体部の形状は直線的で、口縁部の内側には折り返される小突起が形成される。口縁端部外面に注口がある。すり目は内面の体部から底部まであるが、かなり摩耗している。錆釉は外面全面に施されており、内面は口縁部から体部まで残る。口縁部にある小突起の形状から古瀬戸後Ⅳ期（新）に比定する。５はSD01出土の折縁中皿である。体部が丸味を帯び、口縁部は外折する。口縁部に灰釉が施されている。底部外面に糸切り痕が残る。体部の形状と外折する口縁部の形状から古瀬戸後期に比定する。６はSD03出土の卸皿である。体部が直線的に開き、口縁部の内側にやや丸味を帯びる小突起が形成されている。体部上方内外面にのみ施釉されている。卸目は明瞭に残り、使用による摩耗があまり認められない。体部と底部外面には斑点状の黒色付着物がある。体部と口縁部の形状から古瀬戸後期に比定する。７はSE01及びSD07出土の内耳鍋である。体部は丸味を帯び、口縁部は外反気味である。体部外面は全体的に黒色化する。口縁部内面には輪積痕が残り、胎土には花崗岩粒が多く入る。口縁部の形状から16世紀前半に比定する。

（２）遺構外（８～23）［第26図、PL14］

８～11はⅢ２層出土遺物である。８は天目茶碗の底部である。削り出し高台を有し輪高台である。高台は厚みを帯び幅が狭い。底部内面に錆釉が施されている。底部外面にはロクロ目が顕著に残る。高台の形状から大窯１段階に比定する。９は丸碗で、体部の丸味が弱く、外面に印花技法により蓮弁文が施文されている。全面に施釉されている。体部の文様から大窯１段階に比定する。10はすり鉢で、口縁部に縁帯が形成されている。内面に残るすり目は摩耗する。口縁部の形状から大窯２段階と推測する。11はすり鉢である。底部の立ち上がり部分はわずか内面に屈曲している。錆釉は外面に施されているが、内面は遺存しない。底部の形状から古瀬戸後Ⅳ期に比定する。

12～19はST01上に堆積するⅣ層出土遺物である。12はⅢ２層とⅣ２層出土遺物が接合したすり鉢である。体部は直線的で、内面のすり目は摩耗が激しい。外面に錆釉が施されている。体部の形状から大窯１段階に比定する。13はⅣ１層から出土した縁釉小皿である。体部は直線的で、底部内面は露胎で指ナデ痕が残る。底面に糸切り痕が明瞭に残る。口縁部に灰釉が施されている。以上の点から古瀬戸後Ⅲ期に比定する。14～19はⅣ２層出土遺物である。14はST01礎石４の近くから出土した平碗である。体部はやや丸味を帯び、器壁は全体に厚い。口縁端部は尖っている。口縁部の外面と内面全体に灰釉が施されている。体部外面に輪積痕が残る。体部と口縁部の形状から古瀬戸後Ⅳ期（新）に比定する。15は平碗である。体部が直線的に開き、口縁部が短くくびれる。器壁は薄手である。口縁部の内外面全体に灰釉が施されているが、釉の遺存状況が悪く、特に内面は剥落した部分が多い。口縁部から体部の外面に輪積痕が明瞭に残る。胎土には直径約３㎜の花崗岩粒と推測される小石が含まれている。体部と口縁部



第26図　土器・陶磁器　実測図

の形状から古瀬戸後Ⅲ期に比定する。16は平碗である。体部は扁平でほぼ直線的に開く。口縁部外面に施された灰釉は部分的に剥落する。体部外面は黒色化する。口縁部から体部の外面に輪積痕が明瞭に残る。体部の形状から古瀬戸後Ⅳ期（古）に比定する。17は龍泉窯系の青磁碗で、外面に蓮弁文が施されている。蓮弁の鎬と間弁を失った上田氏分類 B-I′類に該当し、14世紀に比定される（上田1982）。18は丸皿で削り込み高台である。底面内部に菊の印花文が押印され、灰釉が施されている。高台と印花文の状況から大窯１段階に比定する。19はすり鉢で、口縁部内側に小突起がある。内外面に錆釉が施されている。口縁部内面の形状から古瀬戸後Ⅳ期（新）に比定する。

20・21は３トレンチ出土遺物である。20は腰折皿である。口縁部は緩やかに外反し、内外面に灰釉が施されている。口縁部の形状から古瀬戸後Ⅳ期（新）に比定する。21はすり鉢である。口縁部に縁帯を形成し、内外面に錆釉が施されている。口縁部の形状から大窯２段階に比定する。22・23は詳細な出土地点が不明なすり鉢である。22は体部が直線的で外面には輪積痕が明瞭に残る。23は口縁部の外側が若干丸味を帯び、縁帯を形成するものである。口縁部の形状から大窯１段階と推測する。

２　石器（１～３）［第27図、PL15］

横刃形石器１点、石錘１点、打製石斧１点出土した。すべて遺構外出土遺物である。

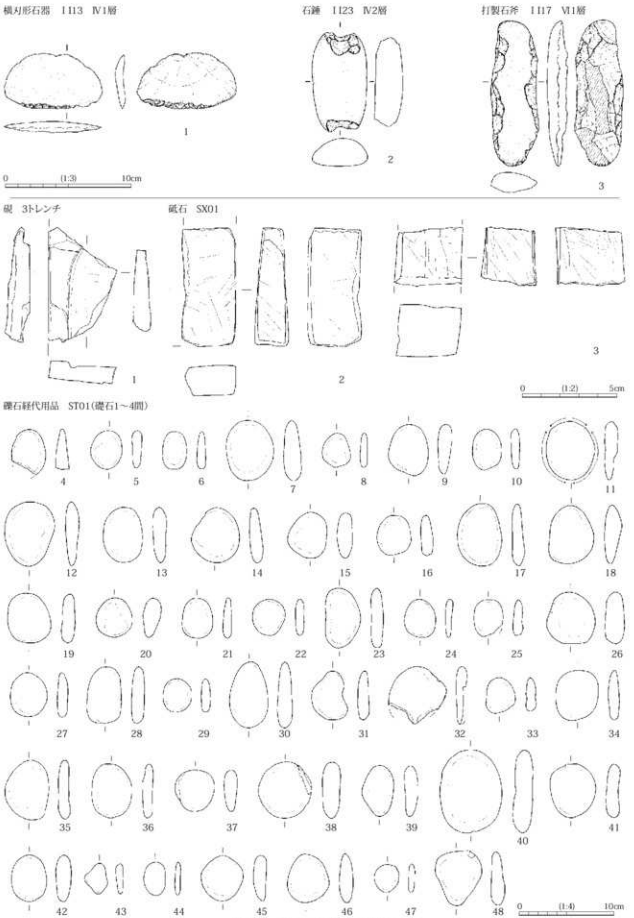
１・２は礎石建物跡上部に堆積するⅣ層出土遺物である。１は横刃形石器である。９㎜の剥片の縁辺部に二次加工を施し、刃部を造り出している。砂岩の礫素材を分割することで鋭利な剥片を採取し、刃部に加工を施して鋭利な部分を造り出したものと推測する。刃部はやや摩耗する。２は石錘で、礫の両端を打ち欠き抉りを入れている。抉りの中央部（凹部）が磨耗している。石材は砂岩である。３は谷状地形に堆積したⅥ１層から出土した短冊形の打製石斧である。裏面は原石から剥離したままの状態で、短辺の縁辺部に平坦な剥離を連続的に行って造り出した刃部がみられるが、摩耗が激しい。石材はマイロナイトである。

３　石製品（１～48）［第27・28図、PL15］

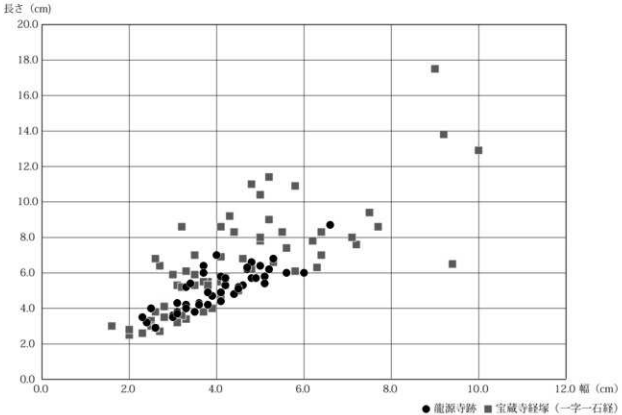
硯１点、砥石２点、礫石経の代用品45点が出土した。

１は３トレンチ 13層出土の硯である。遺存部分が少ないため形状はわからないが、縁帯側面の形状から、長方形を呈していたものと推測する。表面は研磨されている。裏面は剥離欠損して遺存しない。石材は流紋岩である。２は SX01の石積内出土の砥石、３は SX01の裏込め土出土の砥石である。２は欠損しており詳細な平面形状は不明であるが、遺存状況から細長い長方形を呈していたものと推測する。断面形は長方形である。３は遺存部分が少なく、平面形状は不明である。２・３とも表面、裏面、側面１方が研磨されており、２では短辺方向と斜め方向の線状痕が確認できる。石材は２・３とも細粒砂岩である。

４～48は ST01の礎石検出時にⅤ１層から出土した礫である。大きさは２～７㎝にまとまり、全体に扁平で、厚さは1.1～1.5㎝のものが多い。重量は40～59g のものがほぼ半分を占める。11は側縁部が摩耗しているが、ほかの礫は摩耗していない。これらは、肉眼観察はもとより赤外線写真でも経文の痕跡を確認できなかったが、長野県月岡遺跡（市川2010）、埼玉県宝蔵寺経塚（井上1987）から、一字一石経とともに経文が書写されていない扁平な礫が出土している。第28図は本遺跡の扁平礫と宝蔵寺経塚の一字一石経の大きさ等を示しているが、おおむね本遺跡から出土した扁平礫は宝蔵寺経塚出土のものと重なるため、礫石経（特に一字一石経）の代用品と考えた。また、宝蔵寺経塚や群馬県棚下不動村本堂下（津金1982）では、礫石経が旧本堂下から出土している（註２）。石材は、砂岩27点、細粒砂岩９点、細



第27図　石器・石製品　実測図



第28図　礫石経　規模グラフ

粒砂岩～泥岩１点、変成岩２点、凝灰岩２点、砂岩と泥岩の混在岩１点、泥岩１点、チャート１点、白雲母片岩１点で、遺跡の基盤層（花崗岩）では産出しない礫が大半である。このことから、遠隔地から持ち込んだか、もしくは上久堅の段丘に堆積する段丘礫層に含まれる礫を採取した可能性がある(註１)。

4　金属製品（１～23）［第29図、PL15］

鉄釘20点、刀子２点、銭貨１点が出土した。

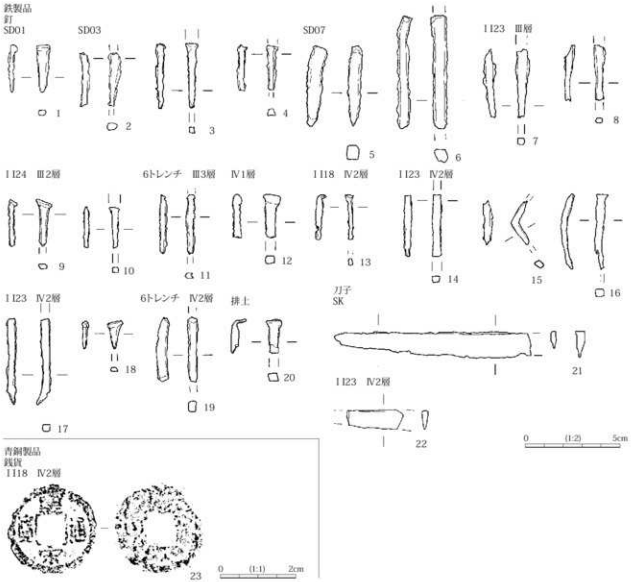
鉄釘は、１がSD01、２～４がSD03、５・６がSD07から出土したほかは、ST01上部のⅣ層から出土したものが多い。頭部または先端部は欠損しているものが多いが、完在するものは長さ2.5m程度である。頭端部を平坦な方頭形にしたもの（１・３・４・９・10・18）と、端部をたたき延ばしたうえで折り返して頭造りしたもの（５・12・13・16・20）がある。胴部の断面はすべて方形である。出土場所から判断して、礎石建物に使われていたものと考えられる。

21の刀子は土坑、22は遺構外から出土した。21は関から先端に向けて身の幅が狭くなり切っ先が尖る。22も遺存部分から判断すると、21と同じ形状のものと考えられる。

23は遺構外出土の皇宋通寶（初鋳1038年）である。

5　そのほか［PL15］

SE01（管理番号301）、SD03（管理番号304）、Ⅳ層（管理番号323）、３トレンチ（管理番号324）から鉄滓が出土した。管理番号301と323は炉内滓、管理番号304と324は流動滓である。



第29図　金属製品　実測図

註

1）原山　智氏の指導による。

2）時枝　務氏は、本資料が礫石経の代用品と判断できることと、堂宇の床下から出土した礫石経は地鎮具であることを示した。また、礫石経を地鎮具として用いた例は、松原典明氏の指摘（松原1994b）による。

第5章　総　　括

龍源寺跡は市教委によって、中世の遺跡として周知されている。「龍源寺跡」としたのは、小字名「龍源寺」が残ること、大正期から周辺が「龍源寺」伝承地として地域で想定されていたことによる。しかしながら、「龍源寺」に関連する記録は小字名、伝承地を除いてはなく、寺院の実態は不明のままであった。そのような中、今回発掘調査を実施したことになる。

結果は造成跡、礎石建物跡、井戸跡、溝跡、土坑、焼土跡などが発見され、あわせて主に15世紀から17世紀にかけての土器・陶磁器類などの出土をみたが、礎石建物を「龍源寺」と関連付ける確証を得ることはできなかった。ことの詳細は各章に述べたとおりで、ここではいくつかの課題について触れておきたい。

まず、礎石建物は誰が、何のために建て、何が原因で廃絶したのかである。柱の土台である礎石からだけでは寺院関連施設と限定するのは難しいものの、出土した礫石経の代用品や礎石の配置状況を検討し、礎石建物跡は阿弥陀堂などの「仏堂」と積極的に評価した。遺構・遺物からは、誰が建てたのか、何が原因で廃絶したかは不明である。また、礎石建物を「仏堂」と考えたとはいえ、何のために建てたのかも明瞭にできない。調査で発見した遺構群が谷状地形内を大規模に改変し、造成した上に造られ、15世紀中頃に登場し、およそ100年間継続して消えてゆくことは分かってきた。また、礎石建物のほかに居住の可能性がある遺構は検出されていないことから、「仏堂」が単独で存在していたと推測もできよう。

次に、「仏堂」を考えた場合、遺跡周辺はもとより伊那谷での信仰遺跡のありようはどうなのか。仏教信仰の波及は遺跡、遺物からどのようにみえるのか、そのなかで、礎石建物跡はどう位置付くのかを探求することが必要である。例えば、手初めに近接する神之峰北中腹遺跡（調査時、「神之峯城跡」と呼称）で「堂宇」と推測した15世紀から16世紀の礎石建物跡との建物構造や出土した遺物の比較から何がみえてくるのか。掘立柱建物跡ではあるが、上久堅地区に所在する鬼釜遺跡や風張遺跡、北田遺跡の中世遺構群との違いは何か。さらに、広い地域ではどのような様相が捉えられるのかなどである。それとあわせて、龍源寺跡と同様な立地環境を示す県内の事例の有無やそれとの比較検討をする作業も必要になる。そこから導き出される傾向なりをもとに、礎石建物がこの地に建てられた理由と廃絶した要因がみえてくるのではないか。

調査時点でも、隣接する神之峰城跡、地元の国人領主である知久氏、文献史料や伝承、遺跡の近くを通る近世の「秋葉みち」などから、龍源寺跡の性格付けを検討してきた。この地が中世においても、交通・物流の要の一つではなかったかと想定をしているものの、ここで提示できるまでには作業が至らなかった。今後、明らかにすべき大きな課題である。

龍源寺跡と日々向き合い調査を行った担当者として、そこで抱いた「遺跡観」は、神之峰北中腹遺跡で発見した「堂宇」の調査と非常に酷似している。それは、15世紀に「堂宇」を建立するために谷状地形を造成している、その姿である。中世においては城郭、宗教施設などで土木工事が行われていることは全国的にも認識されているところであるが、実際に遺跡で直視したときは驚きの一言に尽きた。その驚きは近年提唱された、土木の実態を解明する「土木考古学」研究の進展に寄与すると実感したことは記憶に新しい。龍源寺跡の調査成果は、先に報告した飯喬道路関連遺跡のそれと相互に補完しつつ、地域史解明の一助になると考えている。

引用・参考文献

足立順司2012「鐙・雲版・鰐口―駿遠から南信へ―」『静岡県埋蔵文化財センター研究紀要』創刊号

飯田市教育委員会1986『塚穴１号・２号古墳－昭和61年度特殊改良第一種事業一般県道手塚原米川飯田線飯田市中宮敷地区内における埋蔵文化財発掘調査報告書－』

飯田市教育委員会1998『飯田の遺跡－市内遺跡詳細分布調査報告書』

飯田市教育委員会2014『秋葉街道―社会資本整備総合交付金（道路）事業に埋蔵文化財等調査報告書―』

飯田市教育委員会2015『飯田市埋蔵文化財包蔵地地図（市内遺跡詳細分布調査報告書）』

飯田市歴史研究所2007『みるよむまなぶ飯田・下伊那の歴史』

市川包雄2002「近世信州における秋葉信仰のひろがり」『長野県立歴史館　研究紀要』第８号

市川隆之2005「北信地域の鋼・擂鉢からみた中世から近世前半」『海なき国々のモノとヒトの動き』第１回内陸遺跡研究会シンポジウム資料集　内陸遺跡研究会

井上　肇ほか1987『宝蔵寺経塚調査報告書―付　智観寺板碑発掘調査報告―』飯能市教育委員会

市村成人1925「神之峯城址」『史跡名勝天然記念物調査報告』第３集　1974長野県文化財保護協会復刻

市村成人ほか1970『下伊那史』第６巻　室町時代　下伊那誌編纂会

岩原　剛ほか2016『普門寺旧境内―考古学調査編―』豊橋市教育委員会

上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№２

大河直躬1990「宗教建築」『長野県史』美術建築資料編　全１巻（２）建築　解説　長野県史刊行会

大河直躬ほか1990「宗教建築」『長野県史』美術建築資料編　全１巻（２）建築　写真集　長野県史刊行会

小田富士雄1982『宝満山の地宝―宝満山の遺構と遺物―』大宰府天満宮文化財研究所

岡本直久ほか2015『古瀬戸後期の様相―古瀬戸系施釉陶器窯の成立と展開―』平成26年度　公益財団法人瀬戸市文化振興財団　企画展図録

太田藤四朗1925「厳助大僧正記」『続群書類従』第30集　上　続群書類従完成会

岡田正彦ほか1992『上久堅村誌』上久堅村誌編纂委員会

河西克造ほか2012『国道474号（飯喬道路）埋蔵文化財発掘調査報告書５－飯田市内その５－井戸端遺跡・下村遺跡（鶯ケ城跡）・芦ノ口遺跡』国土交通省中部地方整備局・長野県埋蔵文化財センター

河西克造ほか2016『飯田市　鬼釜遺跡　風張遺跡　神之峯城跡　一般国道474号飯喬道路埋蔵文化財発掘調査報告書６―飯田市内その６―』国土交通省中部地方整備局　長野県埋蔵文化財センター

金子健一ほか2015『戦国時代の瀬戸窯―古瀬戸から大窯へ―』 平成27年度　公益財団法人瀬戸市文化振興財団　企画展図録

金子健一ほか2016『織豊期の瀬戸窯と美濃窯』 平成28年度　公益財団法人瀬戸市文化振興財団　企画展図録

菊池　登1973「信長の禁制について」『日本史研究』137号　日本史研究会

北垣聰一郎1987『石垣普請』ものと人間の文化史58　法政大学出版会

工藤圭章1984「寺院建築Ⅱ」文化庁監修『国宝』14　建造物Ⅱ　毎日新聞社

工楽善通2008「土木考古学の推進」『季刊考古学』第102号　雄山閣

後藤健一ほか1993『大知波峠廃寺跡Ⅳ―平成４年度』静岡県湖西市教育委員会

後藤健一ほか1997『大知波峠廃寺跡―確認調査報告書―平成４年度』静岡県湖西市教育委員会

小林正春ほか1988『北田遺跡―昭和61・62年度農村総合整備モデル事業・ほ場整備事業に先立つ緊急発掘調査報告書―』飯田市教育委員会

小松　望1989「金属製品と鍛冶資料」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３－塩尻市内その２―　吉田川西遺跡本文編』日本道路公団・長野県教育委員会・（財）長野県埋蔵文化財センター

近藤　豊1972『古建築の細部意匠』大河出版
坂詰秀一1979「初期伽藍の類型認識と僧地の問題」『立正大学文学部論叢』第63号　立正大学文学部
笹本正治ほか1987『長野県史』通史編　第３巻　中世２　長野県史刊行会
笹本正治2016『甲信の戦国時代―武田氏と山の民の興亡―』ミネルヴァ書房
笹生　衛1997「考古学から見た中世寺社―中世寺院遺跡の分類と変遷を中心に―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第８集
笹生　衛2007「考古学から見た中世の寺院と堂」考古学と中世史研究４　『中世寺院　暴力と景観』高志書院
佐藤　央・重枝　豊・大山亜紀子2009「方三間仏堂の成立と普及に関する基礎的研究―阿弥陀堂の平面構成の推移を中心にして―」『平成21年度日本大学理学部学術講演会予稿集』日本大学理学部
佐藤甦信1978「下伊那地方における中世遺構と堂址について」『中部高地の考古学―長野県考古学会15周年記念論文集―』長野県考古学会
信濃史料刊行会1958「勝山記」「厳助往年記」『信濃史料』第12巻
信濃史料刊行会1961「文永寺文書」『信濃史料』第16巻
信濃史料刊行会1969「矢嶋文書」『信濃史料』第15巻
信濃史料刊行会1974「信州下向記」『新編信濃史料叢書』第10巻
下久堅村誌刊行会1973『下久堅村誌』
清水茂夫・服部納則校注1967「妙法寺記」『武田史料集』新人物往来社
須田　茂ほか1992『黒熊中西遺跡』（１）』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
高島成侑1983「三間仏堂の平面構成について―東北地方の中世遺構からみて―」『八戸工業大学紀要』第２号　八戸工業大学
田中雅明2004「織田信長禁制の取次に関する考察」『戦国史研究』第47号　戦国史研究会
津金澤吉茂1982「群馬県沼田市内出土の天文４年銘銅経筒」『考古学ジャーナル』210号　ニューサイエンス社
時枝　務1988「近世寺院の一様相―長野県下伊那郡宮田村熊野寺をめぐって―」『東国史論』第３号　群馬考古学研究会
時枝　務2006「中世寺院の諸問題」『季刊考古学』第97号　雄山閣
時枝　務2009「中世寺院遺跡の基礎概念」『山梨県内中世寺院分布調査報告書』山梨県教育委員会
時枝　務2011『山岳考古学―山岳遺跡研究の動向と課題―』ニューサイエンス社
時枝　務2012「山寺研究の課題」『季刊考古学』第121号　雄山閣
時枝　務2014『霊場の考古学』高志書院
時枝　務2016『山岳宗教遺跡の研究』岩田書院
長野県教育委員会1955『福徳寺本堂修理工事報告書』
長野県教育委員会1983『長野県の中世城館跡―分布調査報告書―』
長野県教育委員会1985『歴史の道調査報告書ⅩⅢ―秋葉街道－』
長野県立歴史館2000『歴史の宝庫　秋葉みち－信濃古道をたどる－』文化財保護法50周年記念秋季企画展図録
野村一寿1990「第６節　中世土器・陶磁器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４―松本市内その１―　総論編』
日本道路公団・長野県教育委員会・（財）長野県埋蔵文化財センター
原　明芳2013「牛伏寺堂平の発掘調査」『牛伏寺誌』歴史編　牛伏寺誌編纂委員会
藤澤良祐2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯
藤澤良祐ほか2007『愛知県史』別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系
藤澤良祐2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

平山　優2011a『天正壬午の乱―本能寺の変と東国戦国史―』（株）学研パブリッシング
平山　優2011b『武田遺領をめぐる動乱と秀吉の野望―天正壬午の乱―』戎光祥出版
峰岸純夫1993「戦国時代の制札とその機能」『史学論集』23号　駒澤大学
松原典明1994a「礫石経研究序説」『考古学論究』第３号〈特集・礫石経の世界〉立正大学考古学会
松原典明1994b「３　関東・甲信越」『考古学論究』第３号〈特集・礫石経の世界〉立正大学考古学会
宮坂光昭ほか1990『殿村・東照寺址遺跡―長野県諏訪郡下諏訪町殿村・東照寺址遺跡発掘調査報告書―』下諏訪町教育委員会
望月秀和2011「山梨県の中世寺院」『山梨県考古学協会誌』第20号　山梨県考古学協会
守矢昌文1993『千沢城下町遺跡―国道256号線改良事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書―』茅野市教育委員会
守矢昌文2016「諏訪上社前宮周辺に於ける中世の町の素描―千沢城下町遺跡・荒玉社周辺遺跡の考古学的調査成果と文献史料の融合―」『小此木輝先生古稀記念論集　歴史と文化』青史出版

龍源寺跡の現況

遺構一覧表
遺物観察表

第５表　礎石建物跡一覧

図版番号	PL番号	遺構番号	時期	大々・大・中地区	主軸方向	規模（ ）は推定値 建物規模 長辺（m）	短辺（m）	長辺×短辺	礎石間隔（長辺方向） 最小～最大値（m） 現存値	推定値	礎石間隔（短辺方向） 最小～最大値（m） 現存値	推定値	柱 有無	面積（㎡）	平面形	特記事項 出土遺物（掲載）	出土遺物（非掲載）	遺構の状況等
12・13	4・5	ST01	15世紀中頃～16世紀前半	1 113・17・18	N-36°-E	5.35	4.55	5間×5間	0.16～1.60	1.42～1.80	0.66～1.80	0.66～1.80	－	24.34（推定値）	正方形	礎石跡の代用品	－	平場にある岩成後に礎盤点上石天十N方幅が基盤

※長辺：北西－南東方向，短辺：北西－南西方向
※礎石間隔の推定値は原位置をとどめないと推測される石を除いた値

第６表　礎石建物跡　礎石一覧

図版番号	PL番号	遺構番号	礎石番号	時期	大々・大・中・小地区	規模（cm） 長さ×幅×厚さ	石材	備考
12～14	5	ST01	1	15世紀中頃～16世紀前半	1 115-13	70×44×20	閃緑岩	－
12～14	－	ST01	2	16世紀中頃	1 117-04	28×16×14	片状花崗岩	－
12～14	5	ST01	3	15世紀中頃～16世紀前半	1 117-08	66×36×22	片状花崗岩	－
12～14	5	ST01	4	15世紀中頃～16世紀前半	1 117-07・08	45×40×20	風状花崗岩	－
12～14	－	ST01	5	15世紀中頃～16世紀前半	1 118-02	48×30×12	片状花崗岩	－
12～14	5	ST01	6	15世紀中頃～16世紀前半	1 117-12	48×32×16	細粒閃緑岩	－
12～14	5	ST01	7	15世紀中頃～16世紀前半	1 118-09	32×32×12	片状花崗岩	－
12～14	5	ST01	8	15世紀中頃～16世紀前半	1 118-14	44×36×14	風状花崗岩	－
12～14	6	ST01	9	15世紀中頃～16世紀前半	1 118-01・05	23×14×16	風状花崗岩	－
12～14	6	ST01	10	15世紀中頃～16世紀前半	1 118-05	26×24×12	細粒花崗岩	－
12～14	6	ST01	11	15世紀中頃～16世紀前半	1 117-08 1 118-05	32×24×8	片状花崗岩	－
12～14	5	ST01	12	15世紀中頃～16世紀前半	1 117-12	28×28×10	片状花崗岩	－
12～14	6	ST01	13	15世紀中頃～16世紀前半	1 118-06	23×16×6	不明	SK24を変更

第７表　礎石建物跡　ピット一覧

図版番号	PL番号	遺構番号	ピット番号	時期	大々・大・中・小地区	平面形	断面形	主軸方向	規模（ ）は推定値 長辺（cm）	短辺（cm）	深さ（m）	理土の分層状況	柱痕跡	礎板石の有無	特記事項 出土遺物（掲載）	出土遺物（非掲載）	遺構の状況等
14	－	ST01	1	15世紀中頃～16世紀前半	1 118-01	楕円形	b2	N-30°-E	0.65	0.52	0.16	単層	－	－	－	－	SK06を変更
12	－	ST01	2	15世紀中頃～16世紀前半	1 117-04・08	不明	b5	不明	不明	不明	0.47	単層	－	－	－	－	V層を新り込む
14	－	ST01	3	15世紀中頃～16世紀前半	1 118-05・06	楕円形	b2	N-82°-E	0.40	0.32	0.15	単層	－	－	－	－	SK05を変更
14	－	ST01	4	15世紀中頃～16世紀前半	1 118-05	円形	b1	N-82°-E	0.38	0.36	0.08	単層	－	－	－	－	SK36を変更
14	－	ST01	5	15世紀中頃～16世紀前半	1 118-05・06・09・10	楕円形	a1	N-53°-W	0.54	0.45	0.12	単層	－	－	－	－	SK04を変更
14	－	ST01	6	15世紀中頃～16世紀前半	1 118-09	楕円形	a1	N-38°-E	0.34	0.25	0.05	単層	－	－	－	－	SK35を変更
14	－	ST01	7	15世紀中頃～16世紀前半	1 117-12	楕円形	a1	N-61°-W	0.32	0.24	0.16	単層	－	－	－	－	SK43を変更 SK03に切られる
14	－	ST01	8	15世紀中頃～16世紀前半	1 117-12 1 118-09	円形	a1	N-30°-W	0.30	0.28	0.06	単層	－	－	－	－	SK42を変更 SK03に切られる
14	－	ST01	9	15世紀中頃～16世紀前半	1 118-9・13	楕円形	a1	N-23°-W	0.36	0.27	0.09	単層	－	－	－	－	SK44を変更 SK03に切られる
14	－	ST01	10	15世紀中頃～16世紀前半	1 118-13	楕円形	a2	N-26°-E	0.43	0.31	0.50	2層	－	－	－	－	SK41を変更 SK03に切られる
14	6・7	ST01	11	16世紀中頃	1 118-06	不整形	d	N-44°-E	0.36	0.32	0.31	単層	－	－	平瓦、内耳鍋、陶器	大川茶碗（中世）	SK23を変更 IV層を新り込む
12	－	ST01	12	16世紀中頃	1 117-04	不明	c	不明	不明	不明	0.60	単層	－	－	－	－	IV2層を新り込む

第８表　柵列一覧

図版番号	PL番号	番号	時期	大々・大・中地区	平面形	ピット断面形	主軸方向	規模 長さ（m）	ピット数	理土の分層状況	ピット間の長さ（m）	特記事項 出土遺物（掲載）	出土遺物（非掲載）	遺構の状況等
16	7	SA101	15世紀中頃～16世紀中頃	1 113・17・18・23	コの字形	－	N-50°-W（P1～P2間） N-32°-E（P2～P3間） N-58°-W（P7～P8間）	5.75（P1～P7間） 7.25（P3～P7間） 6.25（P7～P10間）	10	－	5.18（P1-P2間） 0.85（P2-P3間） 1.62（P3-P4間） 1.14（P4-P5間） 1.68（P5-礎石1間） 2.02（礎石1-P6間） 1.27（P6-P7間） 2.98（P7-P8間） 1.80（P8-P9間） 1.68（P9-P10間）	－	－	－

第9表　柵列　ピット・礎石一覧

図版番号	PL番号	遺構番号	ピット・礎石番号	時期	大々・大・中・小地区	平面形	断面形	主軸方向（主方向不明）	規模 長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	厚さ(m)	埋土の分層状況	柱痕跡	礎板石の有無	特記事項 出土遺物（掲載）	出土遺物（非掲載）	遺構の状況等
16	—	SA101	1	15世紀中頃～16世紀中頃	I 113-14	円形	b3	N-35°-W	0.54	0.32	0.52	—	単層	—	—	—	—	SB02を変更
16	—	SA101	2	15世紀中頃～16世紀中頃	I 118-04・08	楕円形	a1	N-37°-W	0.49	0.36	0.12	—	単層	—	—	—	—	SB15を変更
16	—	SA101	3	15世紀中頃～16世紀中頃	I 118-08	楕円形	a1	N-43°-W	0.32	0.28	0.90	—	単層	—	—	—	—	SB18を変更
16	—	SA101	4	15世紀中頃～16世紀中頃	I 118-12	楕円形	a1	N-38°-W	0.40	0.30	0.11	—	単層	—	—	—	—	SB20を変更
16	—	SA101	5	15世紀中頃～16世紀中頃	I 118-11・12	円形	a2	—	0.33	0.33	0.31	—	単層	—	—	—	—	SB21を変更
16	7	SA101	6	15世紀中頃～16世紀中頃	I 118-14・15 I 123-02・03	円形	b3	N-23°-E	0.38	0.36	0.31	—	単層	—	○	—	—	SA22を変更 SB01に切られる
16	—	SA101	7	15世紀中頃～16世紀中頃	I 123-02	楕円形	a1	N-27°-E	0.46	0.40	0.14	—	単層	—	—	—	—	SA23を変更 SB01に切られる
16	7	SA101	8	15世紀中頃～16世紀中頃	I 118-13	楕円形	a2	N-43°-W	0.40	0.32	0.31	—	単層	—	○	—	—	SB14を変更
16	7	SA101	9	15世紀中頃～16世紀中頃	I 117-16	楕円形	b3	N-50°-W	0.43	0.38	0.40	—	2層	○	○	—	—	SB12を変更
16	7	SA101	10	15世紀中頃～16世紀中頃	I 117-11	楕円形	b3	N-25°-E	0.44	0.30	0.44	—	2層	—	—	—	—	SB10を変更
16	—	SA101	礎石1	15世紀中頃～16世紀中頃	I 118-15	—	—	—	0.68	0.40	—	0.21	—	—	—	—	—	位置不明

第10表　井戸跡一覧

図版番号	PL番号	番号	時期	大々・大・中地区	平面形	断面形	主軸方向	規模 長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	埋土の分層状況	特記事項 出土遺物（掲載）	出土遺物（非掲載）	遺構の状況等
17	8・9	SE01	16世紀前半	I 120	円形	a2	N-43°-W	1.63	1.60	1.10	単層	平瓶、内耳鍋、擂、鉄浮	—	SB06・07を切る 石組みを伴う井戸跡

第11表　溝跡一覧

図版番号	PL番号	番号	時期	大々・大・中地区	平面形	断面形	主軸方向	規模（ ）は推定値 長さ(m)	最大幅(m)	深さ(m)	埋土の分層状況	特記事項 出土遺物（掲載）	出土遺物（非掲載）	遺構の状況等
18～20	7	SD01	16世紀中頃以降	I 123・24	直線的	b1	N-60°-W	11.50	0.80	0.20	単層	丸瓶、折縁中皿、すり鉢、壺か、壺類、釘	丸瓶	SD03・07、SA101 P6を切る
18・19	—	SD02	16世紀中頃以降	I 113・18・19	直線的	b1	N-51°-W	10.70（現存）	0.80	0.10	単層	—	—	柵列に切られる SF03を切る
18～20	7・8	SD03	16世紀中頃	I 117・18・23・24	直線的	b2	N-54°-W	14.80（現存）	1.00	0.50	4層	丸瓶、鉢類、釘、鉄浮	—	SD01・04に切られる SD01 P2・P3・P20、SA101 P7を切る 墓坑か土壙墓である石列を伴う
18・19	7	SD04	16世紀中頃以降	I 123	直線的	b2	N-51°-W	5.15（現存）	0.80	0.25	単層	—	—	SD03・05を切る
18・19	7	SD05	16世紀中頃以降	I 117・22・23	直線的	b2	N-52°-W	9.00（現存）	1.00	0.35	単層	—	—	SD04に切られる SA28を切る
21・22	8	SD06	16世紀中頃以降	I 119・20・24・25	直線的	b3	N-44°-E	4.70（現存）	1.10	0.36（現存）	2層	—	—	SE01、SD10に切られる SD07を切る
21・22	8	SD07	16世紀前半	I 120・24・25 J 304	直線的	d	N-36°-E	13.00（現存）	2.80	0.46（現存）	4層	平瓶、内耳鍋、すり鉢、釘	—	SD01・06・10、SE01に切られる
21・22	8	SD10	16世紀中頃以降	I 124・25 J 304・305	直線的	b1	N-37°-E	7.30（現存）	5.30	0.70（現存）	2層	—	—	SD06・07を切る

第12表　焼土跡一覧

図版番号	PL番号	番号	時期	大々・大・中・小地区	平面形	主軸方向	規模 長辺(m)	短辺(m)	最残部分の深さ(m)	埋土の分層状況	特記事項 出土遺物（掲載）	出土遺物（非掲載）	遺構の状況等
23	10	SF01	16世紀中頃～未頃	I 118-01	円形	N-35°-E	0.42	0.39	0.05	単層	—	—	SF04を切る
23	11	SF02	16世紀中頃～未頃	I 118-14	不整形	N-40°-E	0.88	0.49	0.06	単層	—	—	SF01を切る
23	11	SF03	16世紀中頃～未頃	I 113-09	楕円形	N-4°-E	0.50	0.35	0.08	2層	内耳鍋	—	SB02に切られる

第13表　土坑一覧

図版番号	孔番号	番号	時期	大小・大・中・小地区	平面形	断面形	主軸方向	規模（ ）は推定値 長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	埋土の分層状況	柱痕跡	礎板石の有無	出土遺物（現載）	出土遺物（非現載）	特記事項 遺構の状況等
24	－	SK02	10世紀中頃以降	I 118-02	円形	a2	N-50°-W	0.60	0.58	0.18	単層	－	－	－	－	SI01を切る SI01礎石あさとり穴
24	9	SK03	10世紀中頃以降	I 117-07・08	円形	a1	N-40°-E	0.58	0.57	0.08	単層	－	－	－	－	－
14	－	SK04	15世紀中頃～16世紀前半	I 118-05・06・09・10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SI01　P5に変更
14	－	SK05	15世紀中頃～16世紀前半	I 118-05・06	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SI01　P3に変更
14	－	SK06	15世紀中頃～16世紀前半	I 118-01	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SI01　P1に変更
16	－	SK07	15世紀中頃～16世紀中頃	I 113-14	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SA101　P1に変更
16	－	SK10	15世紀中頃～16世紀中頃	I 117-11	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SA101　P19に変更
16	－	SK12	15世紀中頃～16世紀中頃	I 117-16	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SA101　P8に変更
16	－	SK14	15世紀中頃～16世紀中頃	I 116-13	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SA101　P6に変更
16	－	SK15	15世紀中頃～16世紀中頃	I 118-04・08	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SA101　P3に変更
24	－	SK18	16世紀中頃	I 118-04 I 119-01	円形	b3	N-45°-W	0.28	0.26	0.37	単層	－	－	－	－	－
24	－	SK17	16世紀中頃	I 118-01	楕円形	b2	N-25°-E	0.44	0.38	0.11	単層	－	－	－	－	－
16	－	SK18	15世紀中頃～16世紀中頃	I 118-08	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SA101　P3に変更
16	－	SK20	15世紀中頃～16世紀中頃	I 118-12	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SA101　P4に変更
16	－	SK21	15世紀中頃～16世紀中頃	I 118-11・12	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SA101　P5に変更
16	－	SK22	15世紀中頃～16世紀中頃	I 118-14・15 I 123-02・03	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SA101　P6に変更
14	－	SK23	16世紀中頃	I 118-06	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SI01　P11に変更 第1段階の SI01を切る
12	－	SK24	15世紀中頃～16世紀前半	I 118-05・09	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SI01　礎石15に変更
24	9	SK25	13世紀中頃～16世紀前半	I 117-15 I 122-05	楕円形	b2	N-41°-W	0.71	0.66	0.18	3層	－	－	－	－	－
24	－	SK26	13世紀中頃～16世紀前半	I 122-03	楕円形	b3	N-41°-E	0.35	0.28	0.30	単層	－	－	－	－	－
24	9・10	SK27	10世紀中頃以降	I 118-09・10・13・14	楕円形	a1	N-55°-W	1.63	0.95	0.15	単層	－	－	内耳鍋、すり鉢	内耳鍋	SI01を切る
24	－	SK28	15世紀中頃～16世紀中頃	I 117-16 I 122-04	楕円形	a2	N-46°-E	0.66	0.60	0.37	単層	－	－	－	－	SI05に切られる
25	10	SK29	中世以降	I 113-09・10	円形	b2	N-14°-E	0.75	0.68	0.40	単層	－	－	－	－	SK32を切る
25	10	SK30	10世紀中頃以降	I 116-10	楕円形	b1	N-52°-E	0.73	0.56	0.10	単層	－	－	－	－	－
25	－	SK31	10世紀中頃以降	I 123-04	円形	a2	－	0.26	0.26	0.46	2層	－	－	－	－	－
16	－	SK33	15世紀中頃～16世紀中頃	I 123-02	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SA101　P7に変更
25	－	SK34	中世以降	I 124-02	楕円形	b3	N-8°-E	0.29	0.26	0.24	単層	－	－	－	－	－
14	－	SK35	15世紀中頃～16世紀前半	I 118-09	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SI01　P6に変更
14	－	SK36	15世紀中頃～16世紀前半	I 118-05	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SI01　P4に変更
25	10	SK37	中世以降	I 113-09・10・13・14	楕円形	b2	N-88°-E	0.80	0.4-0.6（現存）	0.30	2層	－	－	－	－	SK28に切られる
25	10	SK38	中世以降	I 119-11	楕円形	a1	N-83°-E	0.54	0.43	0.15	2層	－	－	－	－	－
25	10	SK40	中世以降	I 119-10・14	楕円形	a1	N-34°-W	0.54	0.41	0.10	単層	－	－	－	－	－
14	－	SK41	15世紀中頃～16世紀前半	I 118-13	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SI01　P10に変更 SI05に切られる
14	－	SK42	15世紀中頃～16世紀前半	I 117-12 I 118-09	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SI01　P8に変更 SI05に切られる
14	－	SK43	15世紀中頃～16世紀前半	I 117-12	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SI01　P7に変更 SI05に切られる
14	－	SK44	15世紀中頃～16世紀前半	I 118-09・13	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	SI01　P9に変更 SI05に切られる

第14表　石積遺構一覧

図版番号	孔番号	番号	時期	大小・大・中地区	平面形	断面形	主軸方向	規模 長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	埋土の分層状況	特記事項 出土遺物（現載）	出土遺物（非現載）	遺構の状況等
－	11	SX01	近代以降	I 114・15	長方形	a2	N-46°-W	2.18	1.60	0.80	－	鬼石	近世・近代以降陶磁器	主軸から離れて　石積を伴う柳元

第15表　土器・陶磁器観察表

図版番号	凡番号	掲載番号	管理番号	出土遺構等（結合年数）	出土遺構等（図版番号）	取り上げ番号等	注記記号	時期	詳細時期	型式・小別等	器種	部位	産地	法量（ ）は縮尺時の値 <　>は実測図での計測値 （ ）は推定値 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g) 括弧内は推定重量	色調 外面	内面	胎土	焼成	備考
26	13	1	2	ST01P11	SK23	No1	SK23No.3	中世	14世紀後半～15世紀末	古瀬戸後期	平鉢	底部	—	—	5.0	(1.1)	28.2	胎土2.5YR/1灰白	明2.5Y/1灰白	白色粒子少量、灰～黒色粒子中量、石英少量	良	断面に黒色付着物あり
26	13	2	1	ST01P11	SK23	SK23No.1・2・3・4・5・6・8・10・11・13・14・15・16・17・19・20ST01No.3（12層）、4層（1 117）/SK23No.13	SK23No.1・6・5・6・8・10・11・13・14・15・16・17・19・20ST01No.3（12層）、4層（1 117）/SK23No.13	中世	16世紀中頃	不明	内耳鍋	口縁部～体部	—	<36.8>	<32.2>	(21.2)	288.0 (4.5)	胎土2.5YR/4明	胎土7.5YR/6橙	白・灰色粗色粒子多量	良	内面底部が若干黒色化
26	13	3	47	ST01P11	SK23	No2、No9	SK23、SK23No9/SK23、SK23No2	中世	16世紀中頃（第2PR半期）	不明	内耳鍋	口縁部～体部	—	<27.8>	—	(15.5)	163.7 (43.0)	胎土7.5YR5/2灰褐	胎土7.5YR6/6橙	白・黄白・赤褐色粒子多量、石英中量、雲母微量	良	外面に鍋部が黒色化
26	13	4	3	SK27	SK27	No1	SK27No.1、SR03、1474層	中世	13世紀後半～末	古瀬戸後期（新）	すり鉢	口縁部～底部	—	<26.3>	<10.6>	8.9	171.6	胎5YR4/3にぶい赤褐	胎5YR4/3にぶい赤褐	白色粒子少量、赤褐色粒子微量	良	すり目の摩耗顕著
26	13	5	6	SD01	SD01	—	SD01、1層（1 121）	中世	14世紀後半～15世紀末	古瀬戸後期	折縁中皿	口縁部～底部	—	<13.2>	<6.0>	2.9	28.8	胎7.5YR5/2オリーブ黒 胎10YR7/1褐灰	胎7.5YR5/3灰オリーブ 胎10YR7/1褐灰	白・黒色粒子少量	良	—
26	13	6	7	SD03	SD03	—	SD03、3層（1 123）	中世	14世紀後半～15世紀末	古瀬戸後期	卸皿	口縁部～底部	—	<14.3>	<5.9>	3.4	48.6	胎7.5YR/3浅黄	胎7.5YR/3浅黄	白・灰色粒子微量	良	口方で良好に遺存
26	13	7	9	SD07	SD07	3T No.3、SD07No.2・3	SD07（ 1 125）、SD07、3T No.3（6層 ）、3T13層（1 120）/SK23、SD07No.2・3、3T4層、3層（1 120）、4層（1 128）	中世	16世紀前半	不明	内耳鍋	口縁部～体部	—	<31.8>	—	(15.8)	287.9 (231.4)	胎7.5YR5/2黒褐	胎7.5YR4/3褐	白・黄白・灰色粒子多量、石英中量、赤褐色粒子少量、雲母・角閃石微量	良	外面に鍋部と脚下半部、内面に鍋部が黒色化
26	14	8	31	第2層	3T	—	3T4層	中世	15世紀末～16世紀初頭	大皿系統	大皿系統	底部	—	—	4.3	(1.3)	28.5	胎10YR7/3にぶい黄橙	胎10YR6/3にぶい黄橙	白・黒色粒子微量	良	—
26	14	9	13	第2層	3層	—	3層（1 124）	中世	15世紀末～16世紀初頭	大皿1段階	大皿	口縁部～底部	—	<14.4>	—	(3.7)	12.2	胎10YR7/4にぶい黄橙	胎10YR7/4にぶい黄橙	白色粒子少量、石英微量	良	漆付文
26	14	10	15	第2層	3層	—	3層（1 124）	中世	16世紀前半～後半	大皿2段階かつ	すり鉢	口縁部	—	<22.4>	—	(3.0)	33.8	胎N4/灰	胎N4/灰	黒色粒子多量、白色粒子・石英微量	良	すり目摩耗
26	14	11	14	第2層	3層	—	3層（1 124）	中世	15世紀前半～末	古瀬戸後期	すり鉢	体部～底部	—	—	—	<8.2>	<2.6>	33.1	胎7.5YR4/3黒	胎10YR6/2灰白	赤褐色粒子中量	良	—
26	14	12	25	第2・N/2層	4層	—	4層（1 124）、3層（1 124）、2T2	中世	15世紀末～16世紀初頭	古瀬戸後期	すり鉢	体部～底部	—	—	<9.0>	<4.6>	60.6	胎5YR3/2暗赤褐	胎5YR3/2暗赤褐 胎7.5YR/2灰白	白・赤褐色粒子微量	良	すり目の摩耗顕著
26	14	13	29	N/1層	2T	—	2T12層	中世	15世紀前半	古瀬戸後期	縁帽小壺	口縁部～底部	—	<9.8>	<5.0>	2.0	21.4	胎2.5Y6/4にぶい黄 胎7.5Y5/2灰黄	胎2.5Y6/4にぶい黄 胎7.5Y5/2灰黄	白色粒子微量	良	—
26	14	14	19	N/2層	4層	No1	4層No.1（1 117-08）	中世	15世紀後半～末	古瀬戸後期（新）	平鉢	口縁部～体部	—	<16.9>	—	(5.2)	39.2	胎5Y6/4オリーブ黄 胎7.5Y8/3浅黄	胎5Y7/4浅黄	白色粒子少量	良	—
26	14	15	20	N/2層	4層	—	4層（1 117）	中世	15世紀前半～末	古瀬戸後期	平鉢	口縁部～体部	—	<34.4>	—	(4.9)	54.8	胎5Y6/3オリーブ黄 胎7.5Y7/2灰白	胎5Y6/3オリーブ黄	白色粒子少量	良	輪の調整顕著
26	14	16	21	N/2層	4層	—	4層（1 118）	中世	15世紀前半～後半	古瀬戸後期（古）	平鉢	口縁部～体部	—	<36.8>	—	(4.0)	25.3	胎7.5Y7/4浅黄 胎7.5Y4/1黄灰	胎2.5Y7/4浅黄	白色粒子・石英微量	良	輪の調整顕著
26	14	17	26	N/2層	4層	—	4層（1 118）	中世	14世紀	自製	香炉鍋	口縁部	瀬戸焼	<14.0>	—	(3.6)	14.2	胎10YR/2オリーブ灰	胎10YR/2オリーブ灰	白色粒子微量	良	漆付文・漆付文の先端が離れる
26	14	18	27	N/2層	4層	—	4層（1 124）	中世	15世紀末～16世紀初頭	大皿1段階	丸皿	底部	—	—	<5.9>	(1.2)	15.7	胎7.5Y6/2灰オリーブ	胎7.5Y6/2灰オリーブ	白色粒子微量	良	底部内面に印圧文あり
26	14	19	28	N/2層	5層	—	5層（1 125）	中世	15世紀後半～末	古瀬戸後期（新）	すり鉢	口縁部	—	<32.0>	—	(2.7)	17.1	胎5YR4/4にぶい赤褐	胎5YR4/4褐灰	白色粒子少量	良	胎No.6と同一か
26	14	20	34	3T	3T	—	3T13層（1 120）	中世	13世紀後半～末	古瀬戸後期（新）	卸皿系	口縁部	—	<13.2>	—	(2.0)	17.4	胎5Y5/1灰	胎7.5Y4/3明オリーブ	白色粒子微量	良	—
26	14	21	32	3T	3T	No4	3T No.4	中世	16世紀前半～後半	大皿2段階	すり鉢	口縁部	—	<32.5>	—	(3.0)	22.3	胎2.5YR4/1赤灰	胎7.5YR4/1赤灰	白色粒子中量	良	—
26	14	22	46	表土	表土	—	2	中世	不明	不明	すり鉢	口縁部～体部	—	<32.5>	—	(4.1)	33.8	胎7.5YR6/4にぶい橙	胎7.5YR5/2灰褐	白・灰色粒子少量	良	すり目摩耗
26	14	23	49	表土	表土	—	2	中世	15世紀末～16世紀初頭	大皿1段階かつ	すり鉢	口縁部～体部	—	<30.0>	—	(4.4)	53.0	胎5YR4/1褐灰	胎5YR4/1褐灰	白～黒色粒子多量	良	すり目遺存
—	13	—	4	SK27	SK27	—	SK27 5層（1 125）	中世	13世紀	不明	内耳鍋	口縁部	—	—	—	—	29.1 (9.4)	胎10YR3/4褐灰	胎10YR3/4褐灰	白色粒子中量、石英少量、角閃石微量	やや不良	内面外面全体に黒色化
—	13	—	5	SD01	SD01	—	SD01	中世	15世紀末～17世紀初頭	大皿	丸皿	口縁部	—	—	—	—	8.6	胎7.5Y6/2オリーブ黄	胎7.5Y6/2オリーブ黄	白色粒子微量	良	胎No.5と同一か
—	13	—	8	SD03	SD03	—	SD03、1474層	中世	15世紀末～17世紀初頭	大皿	丸皿	口縁部	—	—	—	—	10.2	胎7.5Y6/3オリーブ黄	胎7.5Y6/3オリーブ黄	白色粒子微量	良	胎No.5と同一か
—	13	—	10	SD07	SD07	—	SD07（ 1 125）	中世	15世紀末～17世紀初頭	大皿	平鉢	口縁部～体部	—	—	—	—	9.6	胎7.5YR4/3明	胎7.5YR5/3明褐	白色粒子微量	良	胎No.32と同一か
—	13	—	11	SD03	SD03	No1	SD03No.1	中世	16世紀中頃	不明	内耳鍋	口縁部	—	—	—	—	22.5	胎7.5YR6/6橙	胎7.5YR6/4にぶい橙	白色粒子少量、赤褐色粒子微量	やや不良	—
—	14	—	12	第2層	3層	—	3層（1 124）	中世	15世紀末～16世紀初頭	大皿1段階	平鉢	底部	—	—	—	—	10.7	胎7.5Y6/2オリーブ灰	胎10Y5/2オリーブ灰	白色粒子微量	良	—
—	14	—	16	第2層	3層	—	3層（1 124）	中世	不明	不明	鍋	口縁部	—	—	—	—	6.1	胎10Y2/2オリーブ黒	胎10Y2/2オリーブ黒	白色粒子微量	良	—

図版番号	凡番号	掲載番号	管理番号	出土遺構等(取出番号)	出土遺構等(取場所等)	取り上げ番号等	注記記号	時期	詳細時期	型式・小期等	器種	部位	産地	法量（ ）は現在現存値 < >は現況での計測値 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)（ ）は推定復原重量	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	備考
—	14	—	17	第4層	3層	—	3層（I 123）	中世	14世紀末～15世紀前半	古瀬戸後Ⅱ期	天目茶碗	口縁部～体部	—	—	—	—	15.4	明5YR2/2オリーブ黒 暗赤2.5YR3/3反発暗	明5YR2/2オリーブ黒	白色粒子微量	良	—
—	14	—	18	第4層	3層	—	3層（I 123）	中世	不明	不明	かわらけか	体部～底部	—	—	—	—	6.2	暗7.5YR7/4に示い橙	暗7.5YR7/4に示い橙	白色粒子・黒曜少量	良	—
—	14	—	22	B7区	4層	—	4層（I 118）	中世	14世紀末～15世紀末	古瀬戸後期	天目茶碗	口縁部	—	—	—	—	5.5	明10YR2/2黒褐	明10YR2/2黒褐	白色粒子微量	良	—
—	14	—	23	B7区	4層	—	4層（I 124）	中世	15世紀末～17世紀初頭	大窯	平碗	体部	—	—	—	—	13.1	暗2.5Y7/4浅黄 暗5Y10R5/3に示い黄橙	暗2.5Y7/4浅黄	白・黒色粒子微量	良	—
—	14	—	24	B7区	4層	—	4層（I 123）	中世	15世紀末～16世紀前半	大窯Ⅰ段階	すり鉢	口縁部	—	—	—	—	25.5	明7.5Y4/1褐灰	明7.5Y4/1褐灰	白色粒子微量	良	すり目摩耗
—	14	—	30	E・B7区	3T	—	3T2層、4層（I 118）	中世	15世紀末～17世紀初頭	大窯	天目茶碗	体部	—	—	—	—	12.2	暗7.5YR2/2黒褐 暗5YR4/2灰褐	暗7.5YR2/2黒褐	白色粒子微量	良	—
—	14	—	33	3T	3T	No.5	3T No.5（10層）	中世	15世紀前半～末	古瀬戸後期	天目茶碗	口縁部	—	—	—	—	10.3	明7.5YR2/2黒褐	明7.5YR2/2黒褐	白色粒子微量	良	断面に黒色付着物あり内面外面褐色か
—	14	—	35	E・B7区	17T	—	17T（2層）	近世	18世紀～19世紀	瀬戸	碗系	不明	瀬戸	—	—	—	11.6	暗5Y2.5/1黒	暗5Y2.5/1黒	白色粒子・石英微量	良	底部外面から断面に黒色付着物あり
—	13	—	36	SB03	SB01	No.1	SB03No.1	中世	不明	不明	鍋	体部	常滑	—	—	—	66.9	暗5YR3/3明赤褐	暗5Y7.5/4/4明	白色粒子少量、灰色粒子微量	良	—
—	13	—	37	SB01	SB01	No.4	SB01No.4	中世	15世紀末～17世紀初頭	大窯	平碗	口縁部～体部	—	—	—	—	15.3	暗7.5YR3/4明褐	暗7.5YR3/4明褐	白色粒子微量	良	胎No.10と同一か
—	13	—	38	SB01P11	SB23	No.7	SB23No.7	中世	14世紀後半～15世紀末	古瀬戸後期	鉢類	体部	—	—	—	—	14.9	暗5Y6/4オリーブ黄	暗7.5Y7/1灰白	白・黒色粒子微量	良	—
—	13	—	39	SB01	SB01	—	SB01、3層（I 124）	中世	15世紀前半～17世紀前半	古瀬戸後期/不明～大窯	すり鉢	口縁部	—	—	—	—	15.9	暗10YR4/4褐	暗10YR5/2灰黄褐	白色粒子少量	良	—
—	13	—	40	SB01	SB01	—	SB01	中世	不明	不明	壺か	体部	—	—	—	—	18.2	暗10YR5/3明褐	暗10YR5/3明褐	黒色粒子微量	良	—
—	13	—	41	SB01	SB01	—	SB01	近世	17世紀前半	不明	すり鉢	体部	—	—	—	—	22.6	暗7.5YR5/2黒褐	暗7.5YR5/2黒褐	白色粒子微量	良	すり目潰か
—	13	—	42	SB01	SB01	—	SB01	中世	不明	古瀬戸	壺類	体部	—	—	—	—	53.5	暗10YR4/4褐	暗10YR4/4褐	白・黒色粒子微量	良	—
—	13	—	43	SB07	SB07	No.1	SB07No.1（4層）	中世	15世紀前半～末	古瀬戸後期/不明	すり鉢	口縁部	—	—	—	—	14.2	暗7.5YR4/6褐	暗7.5YR4/6褐	白・黒色粒子微量	良	胎土No.19（胎No.28）と同一か
—	14	—	44	B7区	4層	—	4層（I 124）	中世	不明	不明	鍋	体部	常滑	—	—	—	17.4	暗5YR3/3明赤褐	暗7.5YR4/3褐	白色粒子少量、灰色粒子微量	良	—
—	14	—	45	B7区	4層	—	4層（I 124）	中世	不明	不明	鍋	体部	常滑	—	—	—	18.9	暗7.5YR4/2灰褐	暗7.5YR4/4褐	白色粒子少量、灰色粒子微量	良	—
—	14	—	46	B7区	4層	—	4層（I 124）	中世	15世紀前半～末	古瀬戸後期	すり鉢	体部	—	—	—	—	45.8	暗7.5YR4/6褐	暗7.5YR3/2黒褐	白色粒子微量	良	すり目の摩耗顕著
—	14	—	50	第2層	3T	—	3T 4層	中世	14世紀後半～15世紀末	古瀬戸後期	すり鉢	体部	—	—	—	—	19.0	暗7.5YR6/6橙	暗7.5YR7/3に示い橙	白色粒子・石英微量	良	すり目潰か
—	14	—	51	第2層	3T	—	3T4層	中世	不明	古瀬戸	鉢類	口縁部～体部	—	—	—	—	14.5	暗10YR7/4に示い黄橙	暗10YR7/4に示い黄橙	白・黒色粒子微量	良	—
—	14	—	52	B7区	5層	—	5層（I 123）	中世	不明	古瀬戸	天目茶碗	体部	—	—	—	—	5.4	暗10YR5/4明褐	暗10YR5/4明褐	黒色粒子少量	良	—
—	14	—	53	第3層	3層	No.1	石組No.1（3層）	中世	15世紀～16世紀	不明	石組遺	口縁部	—	—	—	—	5.4	暗10GY6/1明緑灰	暗10GY6/1明緑灰	白・灰色粒子微量	良	—

第16表　石器観察表

図版番号	写真番号	掲載番号	管理番号	出土遺構等（取上番号）	出土遺構等（取上番号）	取り上げ番号等	注記記号	器種	石材	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	備考
27	15	1	102	IV5層	I 113　4層	—	4層（I 113）	磨製石斧	砂岩	78	44	9	31.7	—
27	15	2	103	IV2層	I 123　5層	—	5層（I 123）	石錘	砂岩	79	44	22	112.7	—
27	15	3	101	VI1層	I 117　No4	No4	ST01　No4（17層）	打製石斧	マイロナイト	116	37	16	100.8	—

第17表　石製品観察表

図版番号	写真番号	掲載番号	管理番号	出土遺構等（取上番号）	取り上げ番号等	注記記号	器種	石材	法量（　）は現存値 長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	備考
27	15	1	201	3T	—	3T　13層（I 120）	剥	流紋岩	(60)	(36)	(9)	24.5	—
27	15	2	202	S301	—	S301	風石	細粒砂岩	(62)	28	18	56.0	—
27	15	3	203	S301	—	S301　9層	風石	細粒砂岩	(30)	35	29	53.4	—
27	15	4	204	S701（礎石～4層）	No.1	S701　No.1（I 110-05）　硬化面	礎石群の代用品	熱変質を受けた変成岩	(43)	36	15	24.3	—
27	15	5	205	S701（礎石～4層）	No.2	S701　No.2（I 110-09）　硬化面	礎石群の代用品	砂岩	41	33	11	23.9	—
27	15	6	206	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	細粒砂岩	40	25	9	15.0	—
27	15	7	207	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	64	50	19	92.3	—
27	15	8	208	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩起源の変成岩	36	30	8	13.3	—
27	15	9	209	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	53	42	15	45.1	—
27	15	10	210	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	43	31	10	21.4	—
27	15	11	211	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	石墨頁片岩	62	52	14	66.3	—
27	15	12	212	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	68	53	15	80.1	—
27	15	13	213	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	58	41	15	57.0	—
27	15	14	214	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	58	51	13	61.4	—
27	15	15	215	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	細粒砂岩	49	41	17	51.3	—
27	15	16	216	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	42	36	13	30.7	—
27	15	17	217	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	細粒砂岩	66	48	14	62.5	—
27	15	18	218	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	62	47	18	76.0	—
27	15	19	219	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	53	46	14	55.1	—
27	15	20	220	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	42	38	18	43.5	—
27	15	21	221	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	42	33	10	16.4	—
27	15	22	222	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	38	35	9	19.2	—
27	15	23	223	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	細粒砂岩～泥岩	64	37	13	54.1	—
27	15	24	224	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	細粒砂岩	40	33	7	13.5	—
27	15	25	225	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	38	31	10	17.6	—
27	15	26	226	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	チャート	54	51	21	90.9	—
27	15	27	227	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	47	39	11	36.4	—
27	15	28	228	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	細粒砂岩	60	37	13	50.7	—
27	15	29	229	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	35	30	10	16.6	—
27	15	30	230	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	細粒砂岩	70	40	16	67.0	—
27	15	31	231	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	52	33	12	39.8	—
27	15	32	232	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	60	60	11	40.8	—
27	15	33	233	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	細粒砂岩	37	31	11	21.3	—
27	15	34	234	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	細粒砂岩	52	45	12	50.1	—
27	15	35	235	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩と泥岩の混在岩	63	47	13	57.2	—
27	15	36	236	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	凝灰岩	57	42	11	47.5	—
27	15	37	237	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	44	41	14	41.4	—
27	15	38	238	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	60	56	20	93.3	—
27	15	39	239	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	54	34	14	36.1	—
27	15	40	240	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	87	66	20	201.1	—
27	15	41	241	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	57	48	14	64.1	—
27	15	42	242	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	49	38	17	49.1	—
27	15	43	243	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	32	24	8	8.4	—
27	15	44	244	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	細粒砂岩	35	23	6	9.8	—
27	15	45	245	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	48	44	14	41.6	—
27	15	46	246	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	泥岩	51	45	15	45.2	—
27	15	47	247	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	砂岩	29	26	6	7.7	—
27	15	48	248	S701（礎石～4層）	—	S701（I 117・18）	礎石群の代用品	凝灰岩	57	49	15	60.8	—

第18表　金属製品観察表

図版番号	凡番号	掲載番号	管理番号	類別遺物台帳番号	出土遺構等（報告書呼称）	出土遺構等（現場呼称）	取りとり番号等	注記記号	器種	材質	法量（　）は現存値 長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）保存処理前に計測	保存処理号	備考
29	15	1	303	4	S801	S801	－	S801	釘	鉄	25	4	3	2.9	2	断面長方形・角釘・基部上端と先端遺存
29	15	2	305	5	S803	S803	－	S803	釘	鉄	(28)	6	4	6.5	3	断面長方形・角釘
29	15	3	306	6	S803	S803	－	S803	釘	鉄	(34)	3	3	1.7	4	重量は保存処理後に計測断面長方形・角釘・基部上端遺存
29	15	4	307	6	S803	S803	－	S803	釘	鉄	(24)	4	4	0.8	4	重量は保存処理後に計測断面長方形・角釘・基部上端遺存
29	15	5	308	9	S807	S807（S806・07セクション周）	－	S807 4層（S806・07セクション周）	釘	鉄	(41)	8	7	10.2	6	断面長方形・角釘・先端遺存
29	15	6	309	8	S807	S807	－	S807	釘	鉄	(60)	7	7	12.2	5	断面長方形・角釘
29	15	7	310	17	第層	1 123　3層	－	1 123　3層	釘	鉄	(37)	4	4	5.5	12	断面長方形・角釘
29	15	8	311	18	第層	1 123　3層	－	1 123　3層	釘	鉄	(29)	4	3	3.4	13	断面方形・角釘
29	15	9	312	19	第2層	1 124　3層	－	1 124　3層	釘	鉄	25	4	3	1.8	14	断面方形・角釘・基部上端と先端遺存
29	15	10	313	20	第2層	1 124　3層	－	1 124　3層	釘	鉄	(22)	3.5	3	1.4	15	断面方形・角釘・基部上端・部遺存
29	15	11	325	16	第3層	6T　3層	－	6T　3層	釘	鉄	(31)	4	3	2.1	11	断面方形・角釘
29	15	12	322	23	IV1層	4層	－	4層	釘	鉄	(23)	5	4	3.6	18	断面長方形・角釘・基部上端遺存
29	15	13	315	22	IV2層	1 118　4層	－	1 118　4層	釘	鉄	(24)	4	2	2.7	17	断面長方形・角釘・基部上端と先端遺存
29	15	14	321	30	IV2層	1 123　5層	－	1 123　5層	釘	鉄	(33)	4	3	6.2	25	断面長方形・角釘
29	15	15	316	25	IV2層	1 123　4層	－	1 123　4層	釘	鉄	(23)	4	3	1.3	20	断面方形・角釘・L字状に屈曲
29	15	16	318	27	IV2層	1 123　4層	－	1 123　4層	釘	鉄	40	5	4	3.2	22	断面長方形・角釘・基部上端遺存・や平屈曲
29	15	17	319	28	IV2層	1 123　4層	－	1 123　4層	釘	鉄	(46)	4	4	16.5	23	断面方形・角釘・先端遺存
29	15	18	320	29	IV2層	1 123　4層	－	1 123　4層	釘	鉄	(15)	4	2	0.9	24	断面長方形・角釘・基部上端と先端遺存
29	15	19	326	14	IV2層	6T　4層	－	6T　4層	釘	鉄	(34)	6	4	5.8	9	断面長方形・角釘
29	15	20	327	34	排土	排土	－	2	釘	鉄	(18)	6	4	2.2	27	断面長方形・角釘・基部上端遺存
29	15	21	302	2	SK	SK	－	SK	刀子	鉄	(104)	14	5	21.0	1	刀茎
29	15	22	317	26	IV2層	1 123　4層	－	1 123　4層	刀子	鉄	(30)	10	4	5.3	21	－
29	15	23	314	21	IV2層	1 118　4層	－	1 118　4層	銭貨	青銅	24	24	1	1.3	16	「皇宋通寶」（北宋　初鋳年1038年）
－	15	－	301	10	S801	S801	No5	S801　No5	鉄滓	鉄	62	52	22	61.3	－	炉内滓
－	15	－	304	7	S803	S803　4層	－	S803　4層	鉄滓	鉄	31	21	15	6.9	－	流動滓
－	15	－	323	32	IV層	3T と6T間	－	3T と6T間撹乱時	鉄滓	鉄	45	40	13	35.7	－	炉内滓
－	15	－	324	13	3T	3T（S816近く、1 120）	－	3T（S816近く、1 120）	鉄滓	鉄	27	21	15	8.6	－	流動滓

写 真 図 版

龍源寺跡　遠景（北から）

試掘後の龍源寺跡　遠景（北西から）

調査区　全景（西から）

調査区から天竜川方向を臨む（南東から）

調査区　全景（北西から）

平坦地1　試掘前風景（北西から）

谷奥の風景（北西から）

玉川側の崖　調査前風景（北西から）

玉川側から平坦地3に向かう山道（西から）

ST01　全景（北西から）

ST01　全景（写真上が南西）

ST01　全景（模擬柱設置）（南西から）

ST01　全景（模擬柱設置）（北西から）

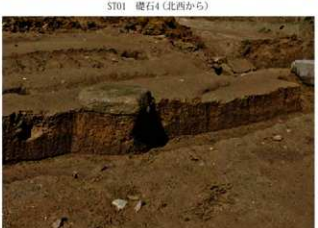
ST01　硬化面（南西から）

ST01　礎石1（北西から）

ST01　礎石3　セクション（第12図 B-B′）（南東から）

ST01　礎石4（北西から）

ST01　礎石6・7・8・12　断ち割り（第13図 D-D′）（東から）



ST01　礎石7　断ち割り（第13図 D-D′）（東から）

ST01　礎石9・10　断ち割り（第13図 F-F′）（南東から）

ST01　礎石11　断ち割り（第13図 G-G′）（北東から）

ST01　礎石13　礎出土状況（東から）

ST01　礎石13　断ち割り（東から）

ST01　断ち割り（第12図 B-B′）（南東から）

ST01　断ち割り（第12図 B-B′）（東から）

ST01　断ち割り（第12図 A-A′）（西から）

ST01　P11　平石と土器出土状況（上層）（南から）

ST01　P11　土器出土状況（下層）（南から）

SA101　P6　礎板石設置状況（北東から）

SA101　P8　礎板石設置状況（南西から）

SA101　P9　礎板石設置状況（北東から）

SA101　P10　完掘（南東から）

SD01・03・04・05　完掘（北西から）

SD01・03　セクション（第18図 C-C′）（北西から）

SD01・03・04・05　セクション（第18図 C-C′）（北から）

SD03・ST01　完掘（ST01南西）（南西から）

SD03・ST01　完掘（ST01南西）（北西から）

SD03　石列（西から）

SD03　セクション（第18図 B-B′）（北西から）

SD06・07　完掘（西から）

SD06・07　セクション（第22図 B-B′）（北西から）

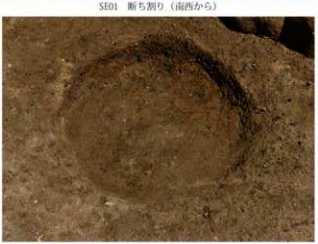
SD101　検出状況（北西から）

SE01　礫出土状況（北から）

SE01・SD06　セクション（北西から）

SE01　断ち割り（南西から）

SE01　断ち割り（南西から）


SK03　完掘（南西から）

SK25　セクション（南西から）

SK25　柱痕跡掘り下げ状況（南西から）

SK25　礎板石設置状況（南西から）

SK27　完掘（南西から）

SK27　セクション（14トレンチ）（北西から）

SK27　礫出土状況（南西から）

SK29・37　完掘（東から）

SK30　完掘（南東から）

SK39　完掘（北から）

SK39　検出状況（北から）

SK40　完掘（北東から）

SF01　検出状況（北から）

SF02　検出状況（北から）

SF03　検出状況（西から）

SX01　石積遺構　全景（北西から）

SX01　山麓の石積　北壁（南西から）

I 118　Ⅳ2層出土　銭貨（23）（東から）

Ⅳ2層出土　平碗（14）（北から）

3トレンチ　北東壁セクション（南から）

3トレンチ　北東壁セクション（暗渠）（南西から）

2トレンチ　北西壁セクション（南東から）

6トレンチ　北東壁セクション（南から）

7トレンチ　北東壁セクション（西から）

7トレンチ　南西壁セクション（北から）

11・12トレンチ　全景（南から）

12トレンチ　北東壁セクション（南西から）

17トレンチ　セクション（南西から）

18トレンチ　セクション（南西から）

遺構内出土土器・陶磁器

ST01 P11 (SK23)

1

管理番号38

2

3

SK27

管理番号4

4

SD01

管理番号5

5

管理番号39

管理番号41

管理番号40

管理番号42

SD03

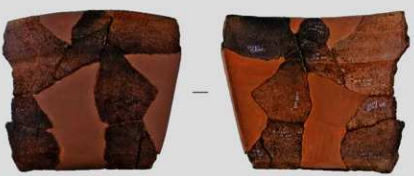
管理番号8

6

SD07

管理番号10

管理番号43



7

SF03

管理番号11

SE01

管理番号37

管理番号36

遺構外出土土器・陶磁器

Ⅱ層

管理番号35

Ⅱ・Ⅳ2層

管理番号30

Ⅲ層

管理番号17

管理番号18

Ⅲ2層

管理番号12

8

9

管理番号16

10

11

管理番号50

管理番号51

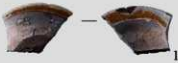
Ⅲ2・Ⅳ2層

12

Ⅲ3層

管理番号53

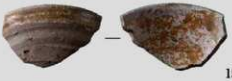
Ⅳ1層



13

Ⅳ2層

14



15

16

管理番号23

管理番号22

管理番号52

17

18

管理番号24

19

管理番号46

管理番号44

管理番号45

3トレンチ

管理番号33

20

21

排土

22

23

石器

横刃形刃器　ⅠⅡ13　Ⅳ1層

石錘　ⅠⅠ23　Ⅳ2層

打製石斧　ⅠⅠ17　Ⅵ1層

石製品

硯　3トレンチ

砥石　SX01

礫石経代用品　ST01（礎石1～4間）

金属製品

鉄製品

釘

SD01　SD03　SD07　Ⅲ層　Ⅲ2層　6トレンチ　Ⅲ3層　Ⅳ1層

Ⅳ2層　排土

刀子

SK

Ⅳ2層

青銅製品

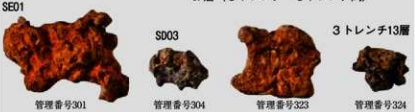
銭貨　ⅠⅠ18　Ⅳ2層

鉄滓

SE01

Ⅳ層（3トレンチ・6トレンチ間）

SD03　3トレンチ13層



報告書抄録

ふ り が な	りゅうげんじあと
書　　名	龍源寺跡
副　書　名	社会資本整備総合交付金（道路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　（国）256号 飯田市 上久堅拡幅（1）
シ リ ー ズ 名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	114
著 作 者 名	河西克造
編 集 機 関	（一財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒388－8007　長野県長野市篠ノ井布施高田963-4　TEL026-293-5926　FAX026-293-8157
発 行 年 月 日	2017年３月22日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
龍源寺跡（りゅうげんじあと）	長野県飯田市（ながのけんいいだし）上久堅3831-1（かみひさかた）ほか	20205	1150	35°27′51″	137°52′30″	2015.4.9～8.11	1,750㎡	国道256号上久堅拡幅に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
龍源寺跡	社寺跡	縄文時代	なし	横刃形石器、石錘、打製石斧	谷状地形の自然堆積層から出土。
		中世（15世紀中頃～16世紀中頃）	礎石建物跡１ 柵列１ 溝跡１ 土坑４ ピット12 井戸跡１ 焼土跡３	中世陶磁器（古瀬戸製品・大窯製品、内耳鍋）、石製品（硯・礫石経代用品）、銭貨（皇宋通寶）、鉄製品（釘・刀子）、鉄滓	谷状地形の谷奥側を掘削し、発生土を開口部側に埋め立てて平場を造成。谷奥には井戸跡、平場の中央には礎石建物跡が構築されている。建物は廃絶後に建て替えられた可能性がある。
		中世以降（16世紀中頃以降	土坑12（内５は詳細時期不明） 溝跡４	瓦、砥石	谷奥側から開口部側に溝跡を掘削。溝跡は礎石建物跡の両側に配置。
		近代以降	石積遺構１ 暗渠３	近世陶磁器、近代以降の陶磁器、瓦	近代以降、谷状地形内は畑として利用。石積遺構と暗渠は、畑の耕作に伴い構築されたと推測。

要　約

龍源寺跡は、伊那谷の天竜川左岸（竜東）にある山間地に所在する。遺跡が立地する谷状地形内を調査した結果、15世紀～16世紀の礎石建物跡が検出された。建物の立地及び造成、礎石・柱穴の配置、出土遺物から、方三間の仏堂と推測した。細田川を挟んだ遺跡の南側には国人領主である知久氏の本城（神之峰城城跡）があり、城が立地する独立丘陵の中腹（神之峰北中腹遺跡）からは堂宇と推測される礎石建物跡が確認されている。今回の調査で神之峰城城跡の麓に仏堂が点在していることが推測できた。

平成29（2017）年３月22日　発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書114

龍源寺跡

社会資本整備総合交付金（道路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
（国）256号　飯田市 上久堅拡幅（１）

発行者　長野県飯田建設事務所
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007　長野県長野市篠ノ井布施高田963-4
Tel 026-293-5926　Fax 026-293-8157
E-Mail　info@naganomaibun.or.jp
印刷者　ほおずき書籍株式会社
〒381-0012　長野県長野市柳原2133-5
Tel 026-244-0235　Fax 026-244-0210